秋田県文化財調査報告書第62集

館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書

秋田県埋蔵文化財センター

1979年3月

秋田県教育委員会

序

本報告書は，昭和51年度から59年度まで計画されている国営能代開拓建設事業地内の圃場造成事業に先立って圃場整備地域内約11.000㎡の範囲を，記録保存を目的として調査を実施した館下Ⅰ遺跡の発掘調査の成果をおさめたものです。

この報告書の刊行が地域史の研究の一助になり，文化財愛護に寄与するならば幸いです。

終りに，発掘調査と報告書刊行に色々ご協力いただいた東北農政局能代開拓建設事業所をはじめ，能代市教育委員会，関係諸機関の方々に深く感謝申しあげます。

昭和54年３月

秋田県教育委員会
教育長　畠山芳郎

例　　言

1，本報告書は，昭和53年５月10日から10月１日にかけて実施した国営能代開拓建設事業に伴う館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書である。

2，発掘調査・報告書作成にあたっては，下記の方々から御指導，御助言をいただいた。

（敬称略）

村越潔（弘前大学教授），岩本義雄（青森県郷土館主任研究員），三宅徹也（同館学芸員），鈴木克彦（同館研究員），一町田工（青森県教育庁文化課主査），市川金丸（同），三浦圭介（同主事），杉渕馨（秋田県立大曲高等学校教諭）。

3，報告書の作成は調査員，調査補佐員の討議により，調査員と，調査補佐員が分担執筆した。Ⅰの１，３，Ⅱ，Ⅲの１，３の④⑥，Ⅵの１，Ⅴは岩見。Ⅲの２．３の⑤，Ⅳの２は永瀬。Ⅲの３の①②③は藤井，田口。

Ⅰの２「米代川下流域の地形・地質」は秋田大学教官白石建雄氏の指導を受けた山本郡八森町立岩館小学校教諭工藤英美氏の執筆したものである。

4，石器の石材鑑定は，県立博物館学芸員渡辺晟氏にお願いした。

5，図版に使用した航空写真は，東北農政局能代開拓建設事業所所蔵のものである。遺構の写真の一部に能代市唐津勲氏撮影のものを使用している。

6，報告書中の遺構・遺物の写真と実測図は，調査員，調査補佐員およびその仕事を手伝われた越後谷敏子，鈴木光子，原田恵知子，宮腰智子諸氏によって作成されたものである。

7，実測図の作成にあたっては遣り方測量を基本にし，一部に平板測量を使用した。

8，発掘調査における土層の色調観察には，日本色彩研究所の「新版標準土色帖」を使用した。

9，遺物の細部観察には，オリンパス二眼鏡筒式実体顕微鏡ＶＭを使用した。石器の使用痕の撮影は，県立博物館学芸員高田順，島田忠一氏にお世話をいただいた。

目　　次

序
例　　言
挿図目次
表　目　次
図版目次

Ⅰ　館下Ⅰ遺跡と発掘調査
1，遺跡の位置と立地……1
2　米代川下流域の地質・地形……1
3　発掘調査に至るまでの経過……5

Ⅱ　調査の概要
1　調査の体制……5
2　調査の方法……7
3　調査経過……8

Ⅲ　検出遺構と出土遺物
1　遺跡の層位……9
2　旧石器時代の出土遺物……10
3　縄文時代の検出遺構と出土遺物……11
①　竪穴住居跡……11
②　竪穴遺構……40
③　フラスコ状ピット……46
④　土　　器……57
⑤　石　　器……59
⑥　土・石製品……66

Ⅳ　小　　結
1　竪穴住居跡……68
2　フラスコ状ピット……69

Ⅴ　む　す　び……71

表　目　次

第１表　石器の出土場所別割合……59
第２表　石器種類別の出土割合……60

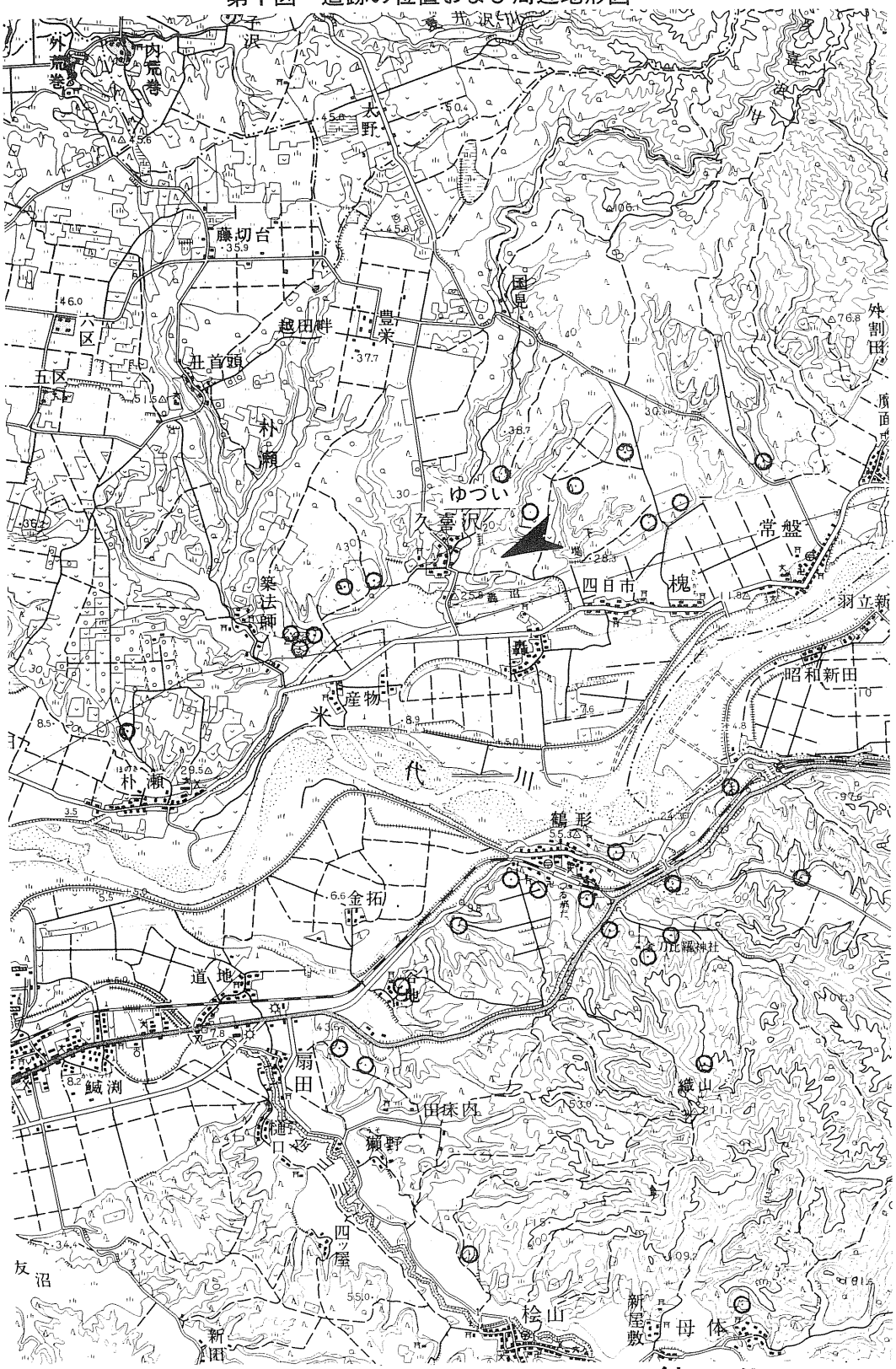
図　版　目　次

館下Ⅰ遺跡周辺の航空写真……図版１
遺跡遠景（南から）……図版２
遺跡遠景（北西から）……図版２
発掘調査前のようす……図版３
発掘風景……図版３
Ａグループ北西部の住居跡群……図版４
Ａグループ南西部の住居跡群……図版４
Ａグループ西隅の住居跡とフラスコ状ピット群……図版５
Ｂグループの住居跡群……図版５
１号住居跡の確認……図版６
１号住居跡……図版６
４号住居跡……図版７
５号住居跡……図版７
６号住居跡……図版８
７号住居跡……図版８
12号住居跡……図版９
13号住居跡……図版９
30号住居跡……図版10
31号住居跡……図版10
34号住居跡と13・14号フラスコ状ピット……図版11
15号住居跡と溝状土坑……図版11
18号住居跡……図版12
19・25号住居跡……図版12
20号住居跡……図版13
21号・23号住居跡と５号フラスコ状ピット……図版13
22号住居跡……図版14
24号住居跡……図版14
26号・27号住居跡……図版15
28号住居跡と４号フラスコ状ピット……図版15
１号竪穴遺構……図版16
２号竪穴遺構……図版16
４号竪穴遺構……図版17
10号竪穴遺構……図版17
22号竪穴遺構……図版18
１号フラスコ状ピット……図版18
７号フラスコ状ピット……図版19
９号フラスコ状ピット（二重構造のもの）……図版19
11号フラスコ状ピット……図版20
12号フラスコ状ピット……図版20
13号フラスコ状ピット……図版21
13号フラスコ状ピット土器出土状態……図版21
ナイフ形石器出土状態……図版22
石皿の出土状態……図版23
台石と剝片（６号住居跡）……図版23
土器出土状態……図版24
石棒，耳飾の出土状態……図版25
石器の出土状態……図版26
石囲炉……図版27
ナイフ形石器・垂飾品・耳飾・土器……図版28
土偶・スタンプ状土製品・土器底部……図版29
石器の使用痕……図版30
土器……図版31
土器……図版32
石器……図版33
石器……図版34

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置および周辺地形図
第２図　米代川下流域の段丘分布図…… 2
第３図　フラスコ状ピット断面の例…… 3
第４図　久喜沢付近の柱状図…… 4
第５図　久喜沢付近の地質模式断面図…… 4
第６図　グリット配置図…… 7
第７図　遺構分布図（Ａグループ）…… 9
第８図　遺構分布図（Ｂグループ）……10
第９図　ナイフ形石器……11
第10図　１号住居跡……12
第11図　２号住居跡……13
第12図　３号住居跡……14
第13図　４号住居跡……15
第14図　５号住居跡……16
第15図　６号住居跡……17
第16図　７号住居跡……18
第17図　８号住居跡……19
第18図　９号住居跡……20
第19図　10号住居跡……21
第20図　11号住居跡……22
第21図　12号住居跡……23
第22図　13号住居跡……24
第23図　14号住居跡……25
第24図　15号住居跡……26
第25図　16号住居跡……27
第26図　17号住居跡……28
第27図　18号住居跡……28
第28図　19・25号住居跡…… 29
第29図　20号住居跡……30
第30図　21･23号住居跡と5号フラスコ状ピット 31
第31図　22号住居跡……32
第32図　24号住居跡……33
第33図　26・27号住居跡……34
第34図　28号住居跡と４号フラスコ状ピット……35
第35図　29号住居跡……36
第36図　30号住居跡……37
第37図　31号住居跡……38
第38図　32号住居跡……39
第39図　33号住居跡……39
第40図　34号住居跡…… 40
第41図　１号竪穴遺構……41
第42図　２号竪穴遺構……41
第43図　11号竪穴遺構……41
第44図　４号竪穴遺構…… 41
第45図　６号竪穴遺構…… 42
第46図　７号竪穴遺構…… 42
第47図　８号竪穴遺構…… 42
第48図　９号竪穴遺構…… 42
第49図　10号竪穴遺構…… 42
第50図　12号竪穴遺構…… 43
第51図　13号竪穴遺構…… 43
第52図　14号竪穴遺構…… 43
第53図　15号竪穴遺構…… 43
第54図　16号竪穴遺構…… 44
第55図　17号竪穴遺構…… 44
第56図　18号竪穴遺構…… 44
第57図　20・23号竪穴遺構…… 44
第58図　21号竪穴遺構…… 44
第59図　22号竪穴遺構…… 45
第60図　24号竪穴遺構…… 45
第61図　25号竪穴遺構…… 45
第62図　26号竪穴遺構…… 45
第63図　１号フラスコ状ピット…… 46
第64図　２号フラスコ状ピット…… 46
第65図　３号フラスコ状ピット…… 46
第66図　６号フラスコ状ピット…… 47
第67図　７号フラスコ状ピット…… 47
第68図　８号フラスコ状ピット…… 47
第69図　９号フラスコ状ピット…… 48
第70図　10号フラスコ状ピット…… 48
第71図　11号フラスコ状ピット…… 48
第72図　12号フラスコ状ピット…… 48
第73図　13号フラスコ状ピット…… 49
第74図　14号フラスコ状ピット…… 49
第75図　15号フラスコ状ピット…… 50
第76図　土製品…… 50
第77図　土器実測図…… 51
第78図　土器拓影(1)…… 52
第79図　土器拓影(2)…… 53
第80図　土器拓影(3)
第81図　石器実測図(1)…… 55
第82図　石器実測図(2)…… 56
第83図　石鏃の形態分類…… 60
第84図　石鏃の長さと重量…… 61
第85図　石槍の形態分類…… 61
第86図　石槍の長さと重量…… 62
第87図　石斧の形態分類…… 62
第88図　箆状石器の形態分類…… 63
第89図　箆状石器の長さと重量…… 64
第90図　石匙の形態分類…… 64
第91図　石錐の形態分類…… 65

第１図　遺跡の位置および周辺地形図



Ⅰ　館下Ⅰ遺跡と発掘調査

1　遺跡の位置と立地

館下Ⅰ遺跡は，秋田県能代市久喜沢字館下52他に所在する。ここは能代市街地の北東７㎞の地点である。

秋田県北部の降水を集めて，能代平野で日本海に注ぐ米代川の北岸には，数段の段丘によって構成された広大な東雲台地が広がる。

館下Ⅰ遺跡は、この東雲台地の南縁に当り，眼下に米代川の河道を臨む標高28ｍの低位段丘上に位置し，茗荷畑，杉の苗圃，雑木林として利用されてきた。

この米代川に臨む東雲台地の南縁には遺跡が多く，館下Ⅰ遺跡の周辺にも発堀調査の行われた「ゆずり葉遺跡」(縄文，平安),「中台遺跡」(平安),「大内坂遺跡」(縄文，平安）が存在する。

2　米代川下流域の地形・地質

①　調査にあたって

これは，米代川下流域右岸の段丘地形とその構成層を中心に調査したものである。調査に当っては「秋田県北部日本海沿岸地帯の段丘群」[1)]（１９７７，白石・工藤）の報告をもとにして，東西１６㎞，南北７㎞ を区切っておこない，また久喜沢部落付近，東西1.5㎞，南北１㎞ の区域は特に精査を加えたものである。

②　地形・地質概要

調査地域はそのほとんどが能代平野の段丘群で占められている関係上，能代平野とその周辺の丘陵，山地までを概観してみることにする。

能代平野は米代川が海に注ぐ付近に三角形状に形成された広大な平野で，北は八森町，東は常盤部落まで，また南は米代川左岸沿いまでと広がっている。その東端は丘陵，山地となっていて，山地の地形はなだらかであるが，北にいくほど急峻になる。

山地および段丘堆積物の基盤は，新第三紀層からなり，男鹿半島地質層序の台島層群相当層と船川層群相当層で占められている。

山地，丘陵以外の段丘は９つに区分される。最高位段丘としては北能代第１段丘があり，これは調査地域には分布していない。高位段丘には，米代川第２，第３段丘があり，また，中位段丘としては米代川第４，第５段丘があり，最も広い分布を占める。低位段丘としては米代川

第6，第7，第8段丘があり，現河川に沿う形で分布する。なお米代川第9段丘は沖積層からなる。

海岸沿いには海岸砂丘が南北に分布[2)]している。

③ 段丘群

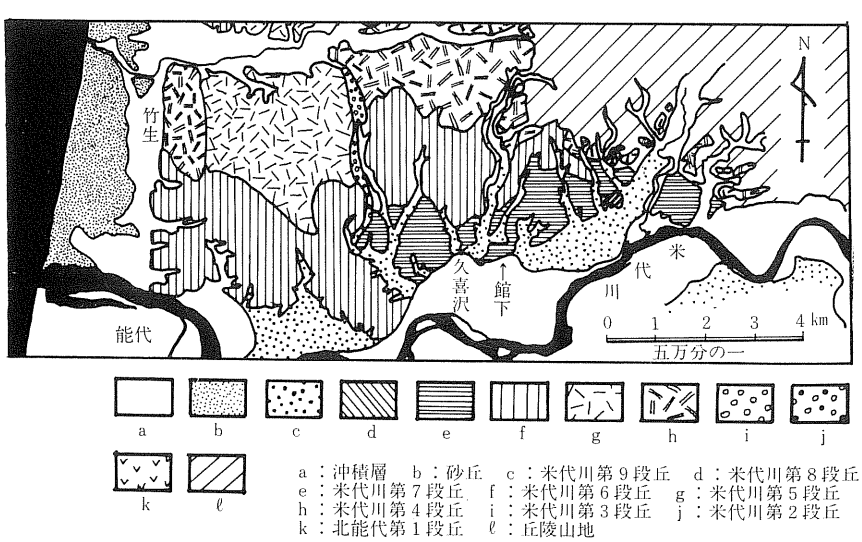
調査地域にみられる最も古い段丘は米代川第3段丘で，丑首頭付近を中心にほぼ南北に延びる帯状の高まりで，調査地域より北に良く発達している段丘の残丘であろうと考えられている。

米代川第4段丘は西は竹生付近に，また東には大野付近に，前者と不連続に分布している。第4段丘はさらに東方の丘陵まで続くが，そこでは，縁辺部にだけ点々と分布するにすぎない。

構成層は地域によって異なり，竹生地域では中礫および砂よりなる良く淘汰された地層と，その上位にくる塊状の砂層からなる。これらの地層は八郎潟西岸に広く分布する潟西層Ⅰ，Ⅱ[3)]に酷似する。また大野地域では，段丘の縁辺部では中～大礫層と砂層からなり，中心部では小礫と青灰色塊状砂などで構成されている。（層厚は5m以内）

これらの事と地形などから，この第4段丘は潟西層Ⅰ，Ⅱが形成された時代，即ち，下末吉期と同じ年代であろうと推測できる。

米代川第5段丘は向能代の拓友付近に広く分布し，第4段丘との高度差はわずかで地形区分はむずかしいが，構成層については両者は全く異にする。即ち，第4段丘の層厚は5m内外で



第2図　米代川下流域の段丘分布図図

あるのに対し，第５段丘のそれは１０ｍ～２０ｍと非常に厚い。また，前者は淘汰の良好な砂が中心的であるが，後者では淘汰の悪い中～大礫が中心である。これは，旧米代川が北西方向に流れながら第４段丘構成層を浸食し谷を形成しその後，その谷を河川の運搬物で埋めたものと解される。

米代川第６段丘は第５段丘と明瞭な比高で区別され，ほぼ３０ｍ高度の美しい平坦な段丘面を持ち，米代川現河川沿いに分布する。向能代７区では，かつてその平坦面を利用して東雲飛行場がつくられた。

構成層は主に中礫よりなり，上位にはクロスラミナの良く発達する砂がレンズ状に狭まれることもある[4]。層厚は１０～２０ｍと非常に厚い。

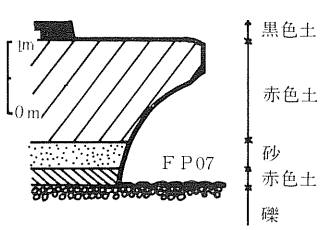
米代川第７段丘は，わずかの比高をもって第６段丘と識別できる。その分布は，西は築法師から東は天内までの区間で，現河川沿いに認められ，館下Ⅰ遺跡はこの段丘面に位置する。構成層についてはくわしく後述するが，基本的には第６段丘構成層に類似する。

米代川第８段丘は，その分布が限られており，常盤部落付近の第７段丘の先端にわずかに見られるだけである。

米代川第９段丘は，米代川流域に分布する河岸平野の高位面で，構成層中に軽石が含まれるのが特徴的である。鷹巣盆地の洪水シラスの堆積面（平山・市川１９６６）に対比され[5]，東能代付近ではシラス面[6]ともよばれている。

④　久喜沢部落付近の地形・地質

館下Ⅰ遺跡は前述の米代川第７段丘の段丘面にあたり，高度は約２５ｍである。その南端はゆるやかな斜面を経て２０ｍ高度を有する段丘面にかわる。この面は米代川第８段丘に相当する可能性が強い。

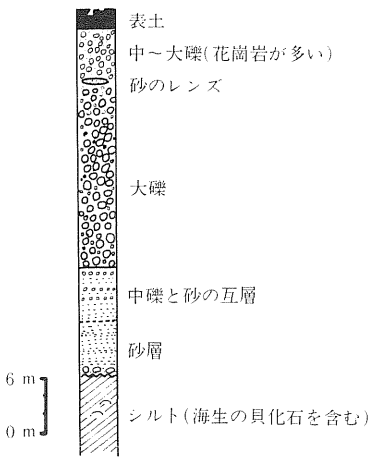


第３図　フラスコ状ピット断面の一例

精査地域の８つの露頭およびフラスコ状ピットの壁面の観察から第４図の柱状図および第５図の地質模式断面図（南北方向）を作成した。以下これらについて説明する。

基盤は塊状のシルト岩よりなり海生の二枚貝の化石を産出する。岩層および化石から本層は秋田油田層序の笹岡層に相当すると思われる。河岸から遠ざかるにつれて基盤の高度は増し，久喜沢部落付近では米代川第９段丘面よりも６ｍほども高くなる。河床では基盤岩がみられるので，沖積台地での基盤岩はさほど深くはないと思われる。

基盤岩を不整合に覆って，わずかながら平行ラミナが発達する砂層が６ｍほど堆積し，その上位には整合に中礫と砂の互層が６ｍほど続く。なお，この地層は海成層とは認めがたい。



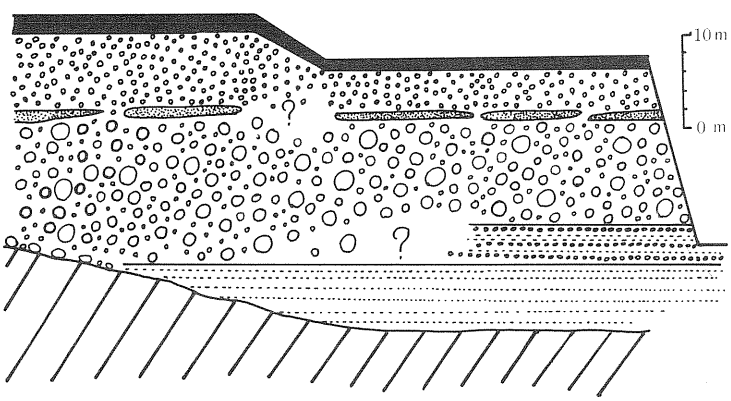
第４図　久喜沢付近の柱状図

砂，礫の互層の上には厚さ２０ｍにもおよぶ大礫からなる淘汰の悪い礫層が堆積していて，礫種は安山岩，流紋岩が顕著である，次に泥岩類，凝灰岩類と比較的やわらかい岩石が目立ち，花崗岩もわずかながら認められる。

その上位には厚さ１～1.５ｍの砂層が断続的に広く分布している。砂層はしばしばクロスラミナを形成している。

さらに上位には中～大礫からなる５～６ｍの厚さの礫層があり，その礫種をみると圧倒的に花崗岩が多く，遠くからみると地層全体が白っぽく見えるほどである。

最上部には粘土および腐植土が形成されている。礫層の直上には厚さ２５cmほどの赤色粘土が重なり，その上には厚さ３５cmほどの砂層があり，この砂層には直径１mmほどのやわらかい白質物（軽石粒ではない）が多数混在する。その上に１４０cmの厚さで赤色粘土が形成され，最後に腐植土がその上を覆っている。



第５図　久喜沢付近の地質模式断面図

文　献

1）　白石建雄，工藤英美，秋田第四紀研究グループ（１９７７），秋田県北部日本海沿岸地帯の段丘群―――秋田大学教育学部研究紀要第２７集

2）　工藤英美（１９７６），峰浜村蝦夷倉における土器類片を含む砂丘について―――峰浜村の文化財（研究・報告編）

3）　白石建雄，潟西団体研究グループ（１９７６），模式地における潟西層について――日本地

質学会第83年学術大会講演要旨
4) 工藤英美，鐙　敏春，軽部和夫，北川和子,（１９７０),能代山本フイルド，ガイド――秋田地学No.１３
5) 平山次郎，市川賢一（１９６６),１０００年前のシラス洪水――発掘された十和田湖伝説――地質ニュースNo.１４０，Ｐ１０－２８
6) 小川敏郎（１９７７),テキスト「地層」の学習（小５）――教育研究全国集会報告書

3　発掘調査に至るまでの経過

能代地区では，昭和51年度から，東北農政局能代開拓建設事業所によって，農業所得の増大と土地，労力の生産性の向上をはかるため，3,３４０haの未墾地，既墾地を対象に，国営の土地改良事業が進められてきた。

この対象地区には，多数の原始古代の周知の遺跡が確認されており，今まで工事以前に発掘調査による記録保存がなされてきた。館下にはⅠ，Ⅱ，Ⅲの縄文期３遺跡がある。そのうちⅠ遺跡が同事業の本年度の工事で田畑に造成されるため，記録保存を目的に，事前に発掘調査を実施したものである。

II　調査の概要

1　調査の体制

調査主体	秋田県教育委員会	
調査期間	昭和53年５月10日～10月１日	
調査地	秋田県能代市久喜沢字館下５２他	
調査員	岩見誠夫	秋田県教育庁文化課　社会教育主事
	永瀬福男	秋田県教育庁文化課　社会教育主事補
	熊谷太郎	秋田県立能代農業高等学校教諭
補佐員	田口　都	
	藤井安正	
事務局	高橋　司	秋田県教育庁文化課　課長
	門間光夫	秋田県教育庁文化課　課長補佐
	越智秀一	秋田県教育庁文化課　課長補佐
	飯塚喜市	秋田県教育庁文化課　学芸主事
	木村　登	秋田県教育庁文化課　主査
	富樫泰時	秋田県教育庁文化課　学芸主事
	川越　譲	秋田県教育庁文化課　主事

事務局　藤田　勉　秋田県教育庁文化課　主事

新泉美知子　秋田県教育庁文化課　主事

後藤　正　東北農政局西津軽事業所工事課課長

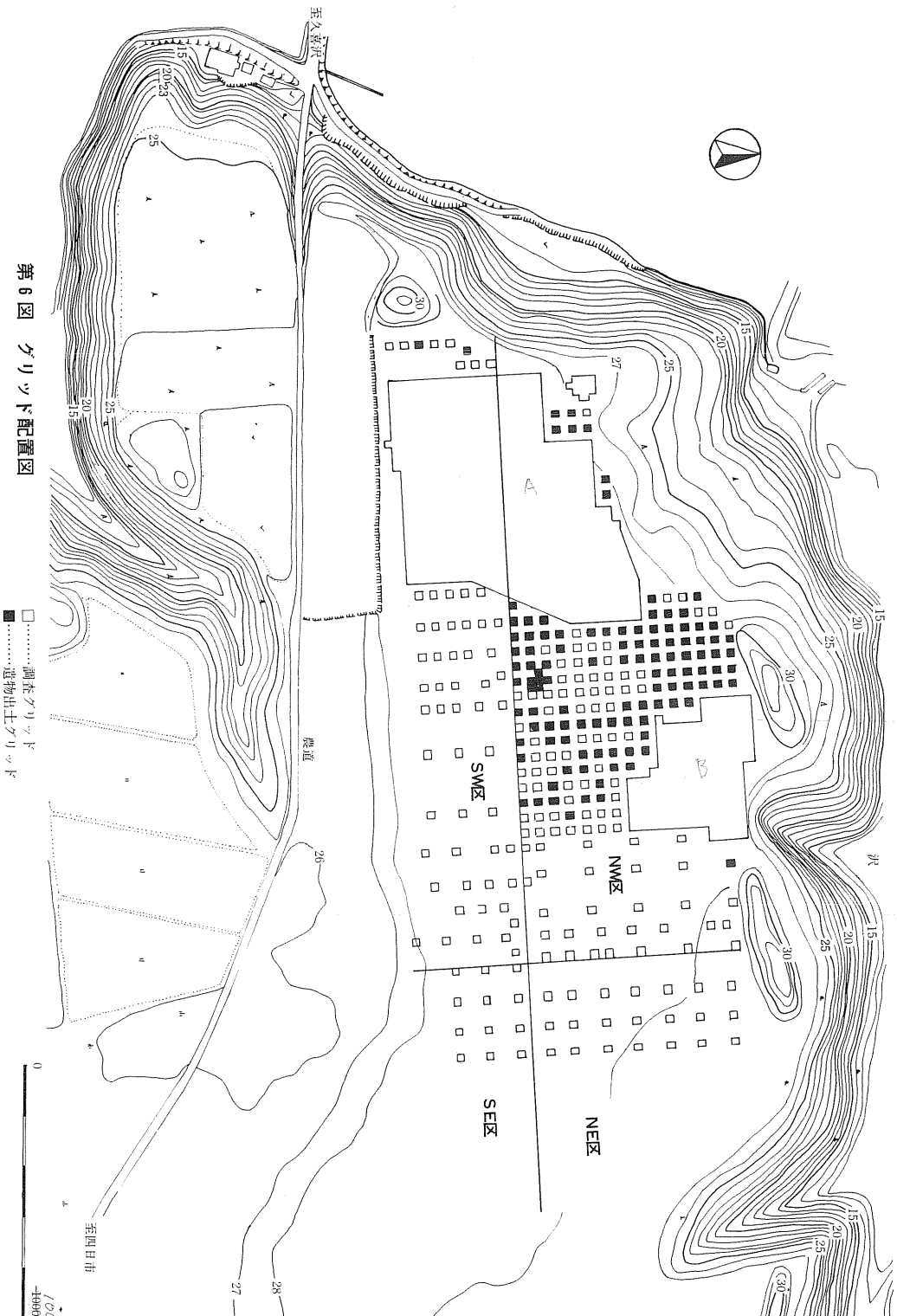
竹内　誠　東北農政局能代開拓建設事業所開発課課長

小野寺宏之，　東北農政局能代開拓建設事業所開発課係長

調査参加者　芹田兼三郎，芹田喜代治，芹田末太郎，芹田清一，芹田長作，芹田良雄，佐々木菊太郎，佐々木溜三郎，佐々木信夫，鈴木市郎，鈴木卯吉，鈴木孫治郎，鈴木与三郎，伊藤秀次郎，岩本隆，川村千代吉，菊地勘右エ門，熊谷喜久雄，七戸徹夫，神馬常太郎，神馬清美，鈴木多四郎，鈴木常太郎，鈴木弥太郎，棟方仁司，芹田キセ，芹田タカノ，芹田ツセ，芹田トミエ，芹田フクエ，芹田ミツ子，小松範子，佐々木愛子．佐々木カツ，佐々木キヨ子，佐々木トヨエ，鈴木キノ，鈴木ミキエ，田村チヤ，幸坂カヨ，幸坂スギ，幸坂フジエ，幸坂ヤエ，小林ツルエ，鈴木ミサ鈴木ユキエ，高山ハルエ，渡辺ツマ，岩本美津子，岩森みよ，蝦名キワ，小野タイ子，川村ツヰ，川村ふよ，　菊地きぬ子，菊地すぎの，工藤タミエ，工藤ミヨ，工藤ゆき子，斎藤アヤ子，笹森セイ子，神馬ヨシノ，鈴木キヨ，鈴木ふみえ，須藤和子，桧田キミエ，桧田シミエ，棟方カツエ，吉田スナ，三浦淳蔵，小林鉄雄，日諸喜憲，丑沢長生，越後谷敏子，鈴木光子，原田恵知子，宮腰智子，近藤恵子，住吉優子，大高博康

調査協力機関　秋田県能代市教育委員会

2　調査の方法



第6図　グリッド配置図

調査対象地の現況は５０．０００㎡に及ぶ畑地と，ブルドーザーによって抜根され，平坦地化した原野であった。

この平坦地の中央部よりやや西寄りを通る東西線とそれに直交する南北線で４分割して，それぞれＮＷ区，ＮＥ区，ＳＷ区，ＳＥ区を設定した。各区は更に３ｍ×３ｍに小区画し，原点とした東西線，南北線の交点からのびる４方向は，方位の記号を最初にした算用数字で示した。グリッドの名称はＮ０１Ｗ０４のように，方位の記号と算用数字の組み合せで呼ぶことにした。

3　調査の経過

発堀調査は５月１０日から開始した。当日調査員，補佐員，東北農政局能代開拓事業所小野寺係長，作業員が遺跡に参集し，テント張りののちグリッド設定にとりかかる。１５日のＮＷ区グリッド設定をまってＮＷ区の西隅から千鳥に粗掘りを開始。５月１６日に発掘基地プレハブが建つ。５月２３日に１号住居跡を検出。６月７日までに１～４号住居跡の発掘を完了。いずれも楕円形，大型の住居跡である。６月１日から発掘遺物の水洗い，接合，注記を能代市社教センター内にある調査事務所で，発掘調査と併行して開始。６月７日には県教育公安委員の一行が遺跡を視察し，調査の重要性を理解してくれたことは喜ばしい。７月１日からは大館市の塚の下遺跡の調査に従事していた藤井補佐員も加わり，作業は順調に進む。6月19日にはローム上面から県北地方では最初の杉久保型ナイフ形石器が発掘された。７月１日には県立能代農高の熊谷調査員が調査に参加，７月６日には文化庁稲田調査官来跡。指導を仰ぐ，ＮＷ区の西部で検出されている住居跡は，出土遺物から中期円筒上層Ｃ式，Ｄ式のものと考えられる。７月１６日からＮＷ区住居群検出地の実測を行う。これと併行にＮＷ区の北東部で検出されていた石囲炉を伴う住居跡周辺の粗掘りの拡大と，ベルトのとりはずしを行う。7月・８月は好天ながら高温の日が多く作業は難渋。９月２日にはじめて排土にベルコンを使用す。９月１０日以降未調査地の段丘西端，ＳＷ区とＮＷ区にわたる茗荷畑の粗掘りを行う。8基のフラスコ状ピットと２棟の竪穴住居跡を検出す。フラスコ状ピットのなかには２重構造のものも発見された。ＮＷ区北東部の住居跡群は石囲炉を持つ円形のもので，大木１０式期頃のものと考えられた。９月２０日大木１０式期の住居跡群実測のため遣り方設定に入る。９月２３日，秋分の日に現地説明会を開催，２００人近い能代市民が来跡す。発掘調査に深い感銘をうけて帰宅とのこと。１０月１日写真撮影，実測などもすべて終え発掘調査を終了す。

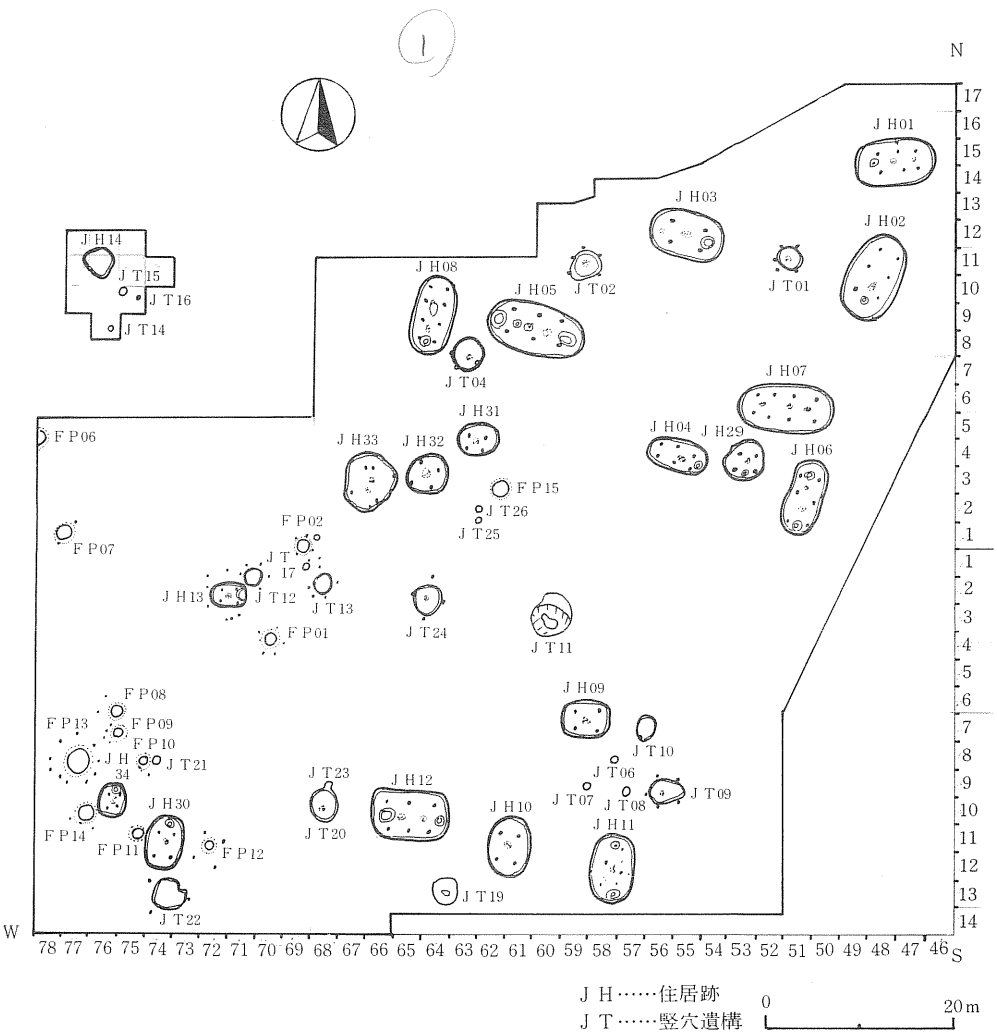
III　検出遺構と出土遺物

1　遺跡の層位

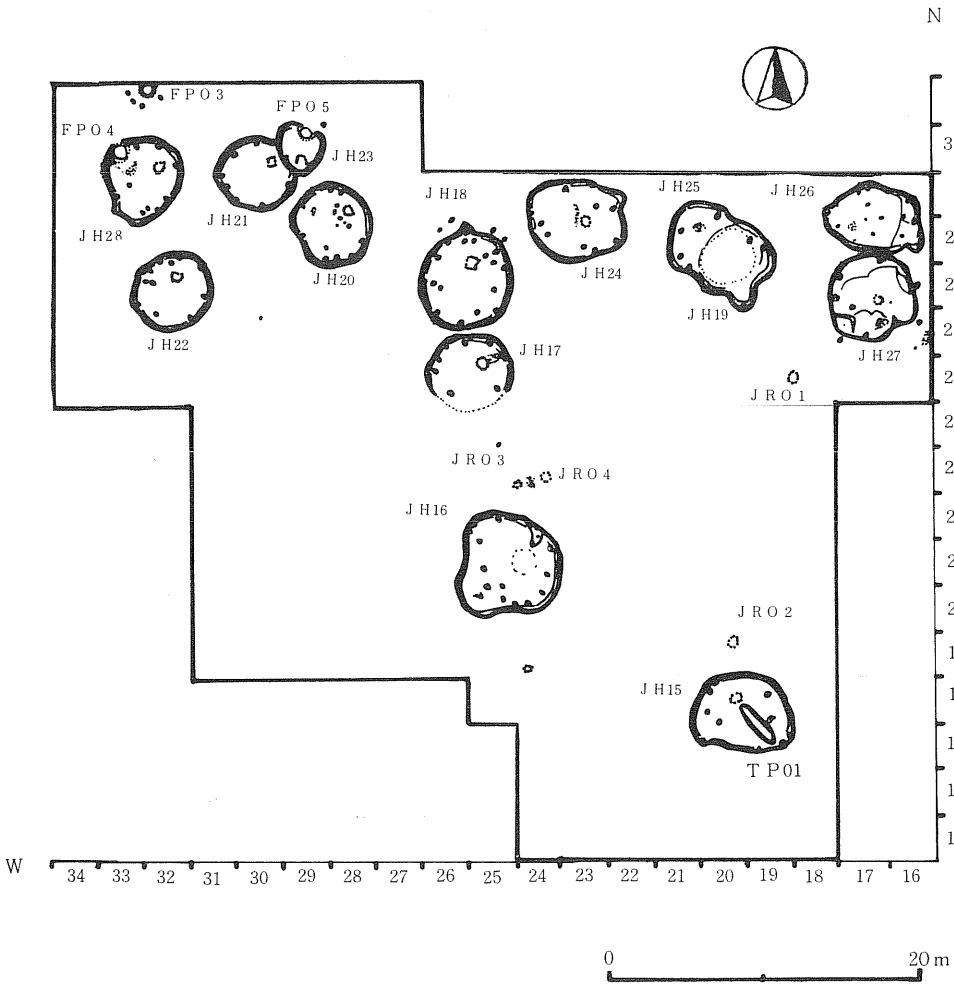
遺跡は段丘の北東縁から西縁にかけて立地している。この調査区の堆積層は，基本的には地山まで，２枚の層である。

中期中葉の住居群の検出された段丘の西縁に近い調査区は，１０cmの表土の下に遺物を包含する３０cmの黒褐色土の堆積が認められた。

北東縁の中期末葉の住居群の調査区は，段丘縁に向って緩傾斜の見られる地形である。ここの南側では２５cmの黒褐色土の堆積があり，北側の段丘縁では５３cmほどの黒褐色土の堆積が



第７図　遺構分布図（Ａグループ）



第8図　遺構分布図（Bグループ）

ＪＨ……竪穴住居跡
ＪＲ……屋外の炉
ＴＰ……溝状遺構

認められた。表土の無いのは調査に先立ち開田に便利なようにブルトーザーで削平したためである。このように遺跡の一部には表土の見られない個所がある。遺物は黒褐色土中から出土する。

2　旧石器時代の出土遺物

旧石器時代に属すると考えられる遺物が２点出土した。出土した地点は，舌状にのびる段丘の北縁に位置する。遺物出土グリッドはＮ１９Ｗ４７と，Ｎ１９Ｗ４８である。

出土地点の地層は，上から黒褐色土層（２０～３０cm），赤褐色土層（ローム），砂層，礫層

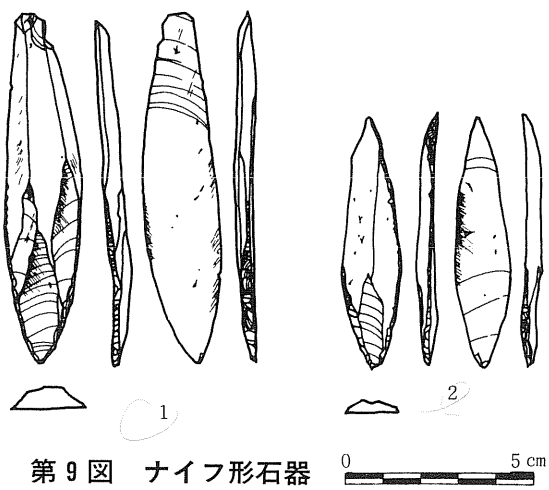
となる。石器の出土した層は，ローム層上面である。なお，１点はローム層に突刺さった状態で出土した。２点間の距離は２ｍ。

出土遺物（第９図　図版22，28）

ナイフ形石器

１は石刃技法によって剝取された縦長の剝片を使用。背面には２本の稜が走る。また，基部を薄く仕上げるため，背面に打面方向からの剝離が施されている。背面の基部周辺に対する二次加工は，両側縁に認められる。基部は尖るが先端部は丸味を持つ。長さ9.４cm，幅２cm，厚さ0.６cm，重さ１０.７ｇ。頁岩。

２も石刃抜法によって剝取された縦長の剝片を使用。背面に１本稜が走る。背面には基部を薄く仕上げるための剝離が施される。背面の側縁に施された二次加工は，右側縁では先端部に至る。両端とも尖る。長さ6.８cm，幅1.６cm，厚さ0.５cm，重さ３.７ｇ。頁岩。



第９図　ナイフ形石器

１・２とも使用痕は認められなかった。

なお，２点は杉久保型ナイフ形石器に類似する。

以上２点の石器のみで，遺構，石器組成も不明であり，遺跡の性格について言及することは不可能である。

３　縄文時代の検出遺構と出土遺物

①　住　居　跡

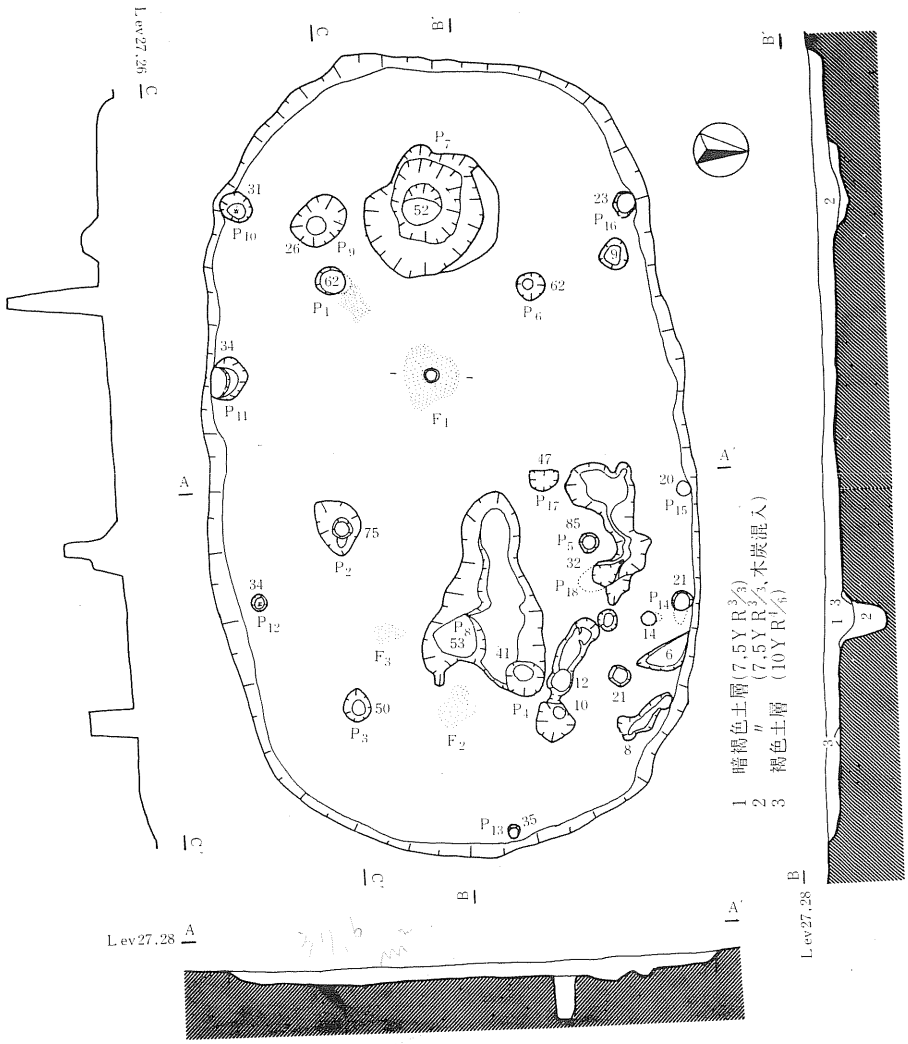
３４棟の住居跡が検出された。遺構の確認はすべて地山上面である。

１号住居跡　（第10図，図版６）

〈平面形〉長軸８.２ｍ，短軸4.７ｍの楕円形プラン。長軸は，ほぼＷ－Ｅを示す。

〈壁・床〉壁の傾斜は約３０度で，１０cm立ち上がる。北東部の床面は凹凸をなす。

〈炉〉長軸線上に，土器埋設炉（Ｆ$_1$），地床炉（Ｆ$_2$，Ｆ$_3$，Ｆ$_4$）。Ｆ１がよく焼けている。



第10図　1号住居跡

0　2 m

〈柱穴〉長軸線と平行に３個ずつ並ぶ。Ｐ１～Ｐ６が主柱穴。

〈施設〉西壁ぎわにロームの縁のあるすり鉢状ピット（Ｐ７）。

〈特記事項〉石棒の折れたものが，北壁にたおれかかる状態で出土。

２号住居跡（第11図）

〈平面形〉長軸８.８ｍ，短軸５.６ｍの楕円形プラン。長軸は，ほぼＮ－Ｓを示す。

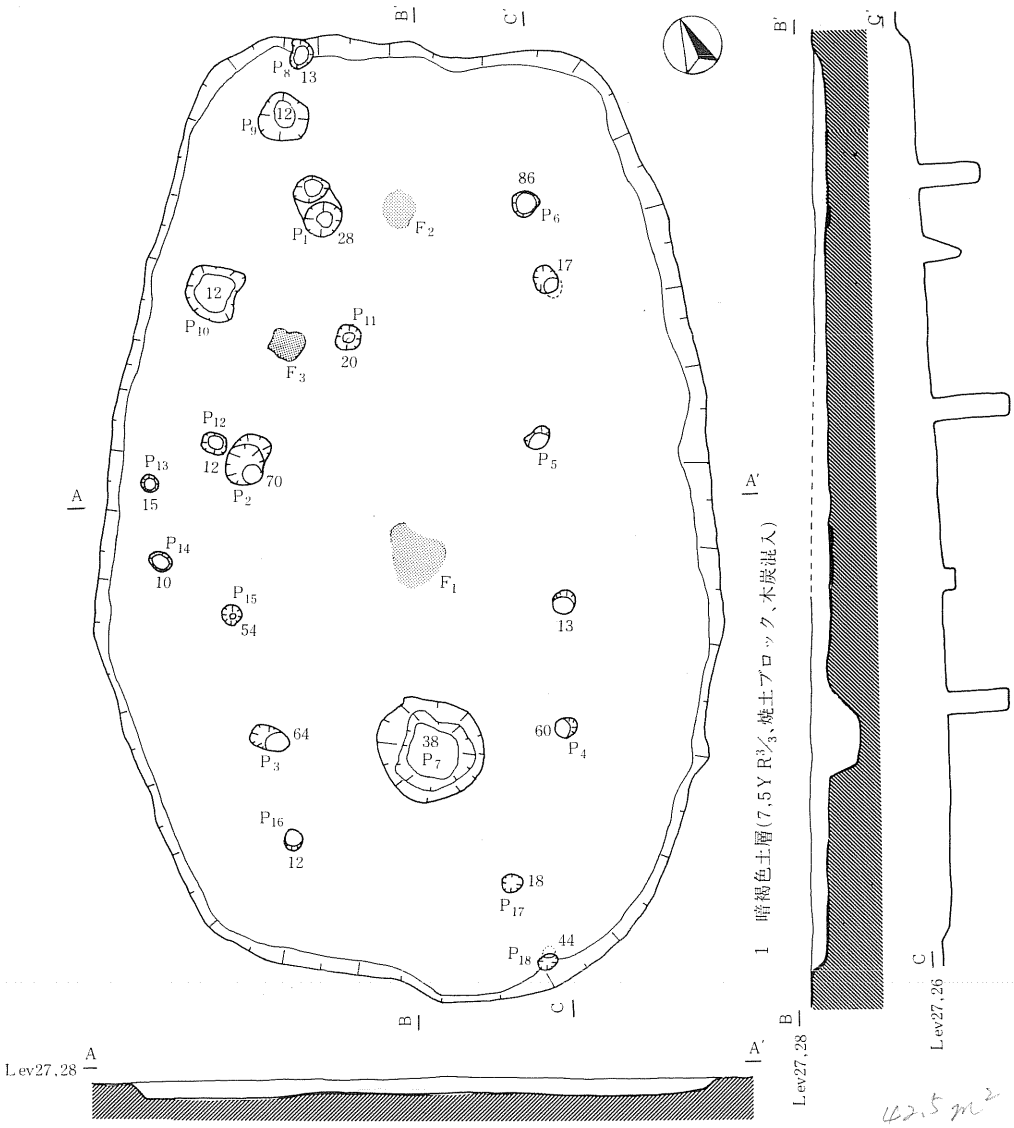
〈壁・床〉５０度の傾斜で１０cm立ち上がる。床面は，ゆるやかに中央部に傾斜。

〈炉〉長軸線上に，Ｆ１～Ｆ３の地床炉。Ｆ１の使用大。

〈柱穴〉長軸線に平行に３個ずつ並ぶ。Ｐ１～Ｐ６が主柱穴。

〈施設〉長軸線上に，かってロームの縁が巡っていたと思われるすり鉢状のピット（（Ｐ７）

〈特記事項〉Ｐ７内より，石皿出土。



第11図　2号住居跡

3号住居跡（第12図）

〈平面形〉長軸7.4ｍ，短軸4.5ｍの楕円形プラン。長軸は，ほぼW－Ｅを示す。

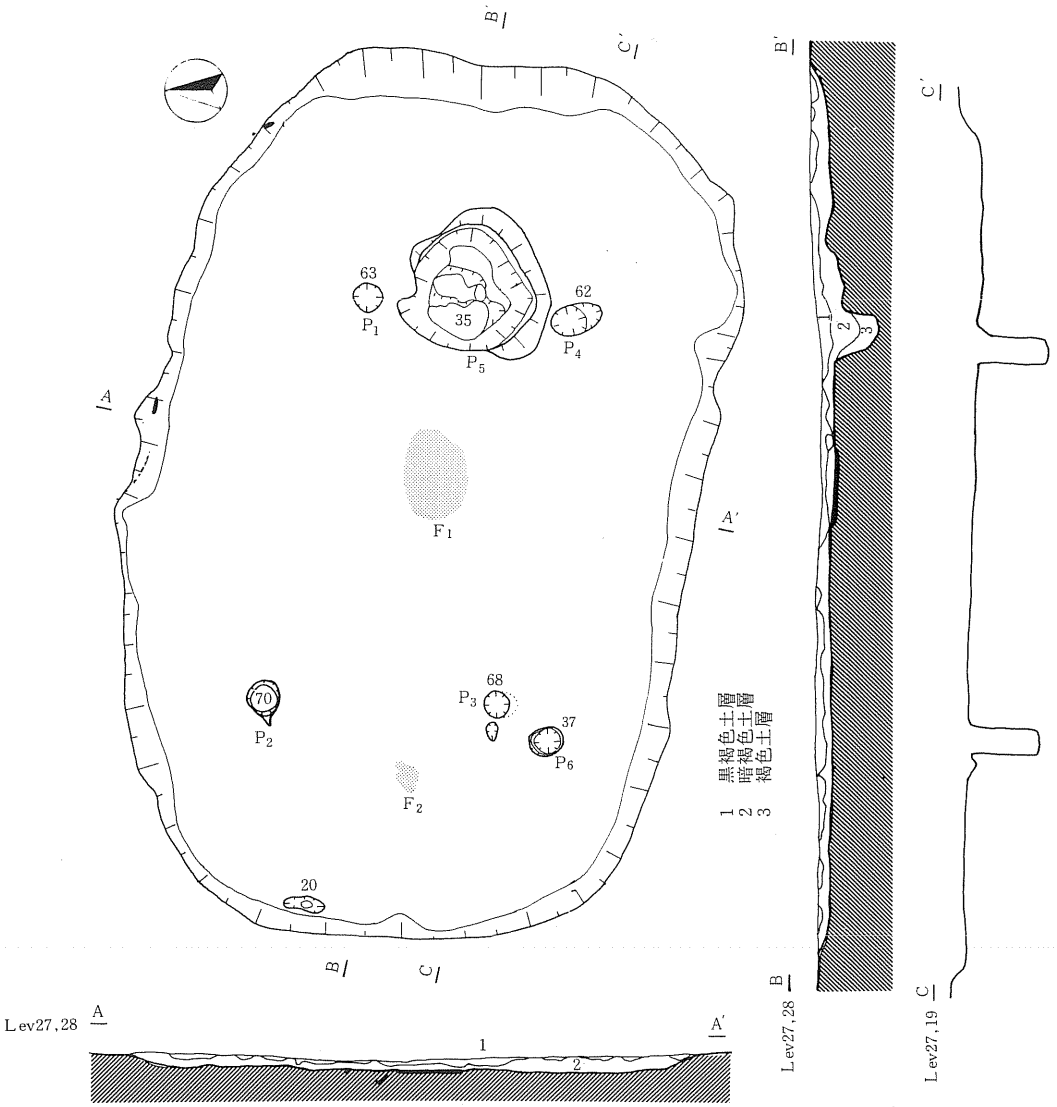
〈壁・床〉壁は５０度で約１０cm立ち上がる。床面は平坦。

〈炉〉長軸線上に，Ｆ１とＦ２の地床炉。

〈柱穴〉長軸線と平行に２個ずつ並ぶ。Ｐ１～Ｐ４が主柱穴。

〈施設〉長軸線上にロームの縁を巡らしたすり鉢状のピット。(Ｐ５)

〈特記事項〉Ｐ６には，土器が口縁部を下に埋設されていた。



34.4m²

第12図　3号住居跡

4号住居跡（第13図，図版７）

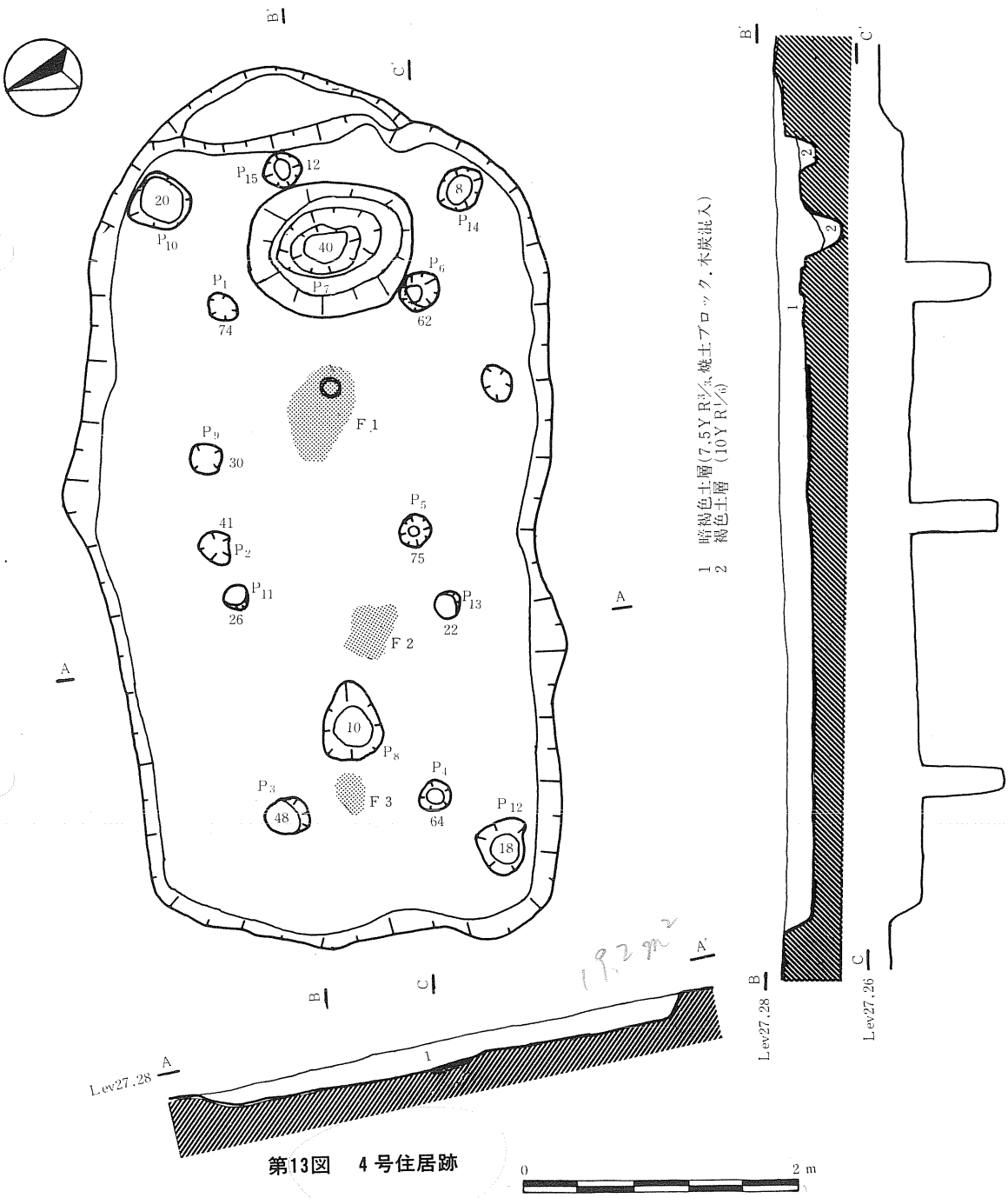
〈平面形〉長軸6.2ｍ，短軸6.0ｍの楕円形プラン。長軸は，ほぼW－Ｅを示す。

〈壁・床〉壁は６５度で１６cm立ち上がる。床面は平坦。

〈炉〉長軸線上に，Ｆ１～Ｆ３を検出。Ｆ１は土器埋設炉でよく焼けている。Ｆ２，Ｆ３は地床炉。

〈柱穴〉長軸線と平行に３個ずつ並ぶ。Ｐ１～Ｐ６が主柱穴。

〈施設〉長軸線上に縁のあるすり鉢状ピット（Ｐ７）。東壁北寄りに，テラス状のロームの張り出し。



第13図　４号住居跡

5号住居跡（第14図，図版７）

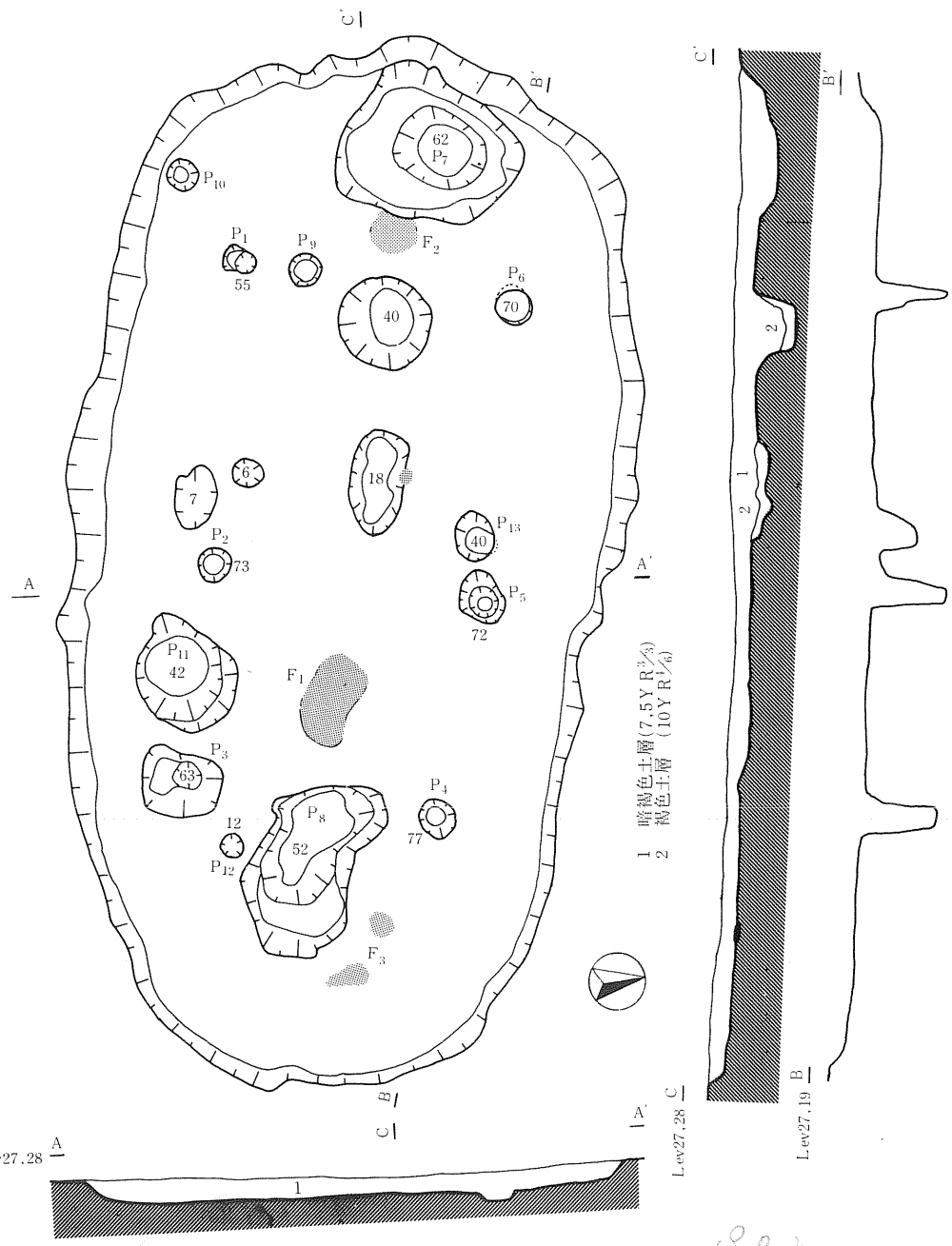
〈平面形〉長軸１０ｍ，短軸４・８ｍの楕円形プラン。長軸方向は，ほぼＷ－Ｅを示す。

〈壁・床〉壁は４０度で約２０cm立ち上がる。床面はほぼ平坦。

〈炉〉長軸線上に，Ｆ１～Ｆ３の地床炉。良く焼けている。

〈柱穴〉長軸線と平行に３個ずつ並ぶ。Ｐ１～Ｐ６が主柱穴。

〈施設〉長軸線上に段のあるすり鉢状ピット（Ｐ７）。縁のあった痕跡の残るピット（Ｐ８）。



第14図　５号住居跡

6号住居跡（第15図，図版8）

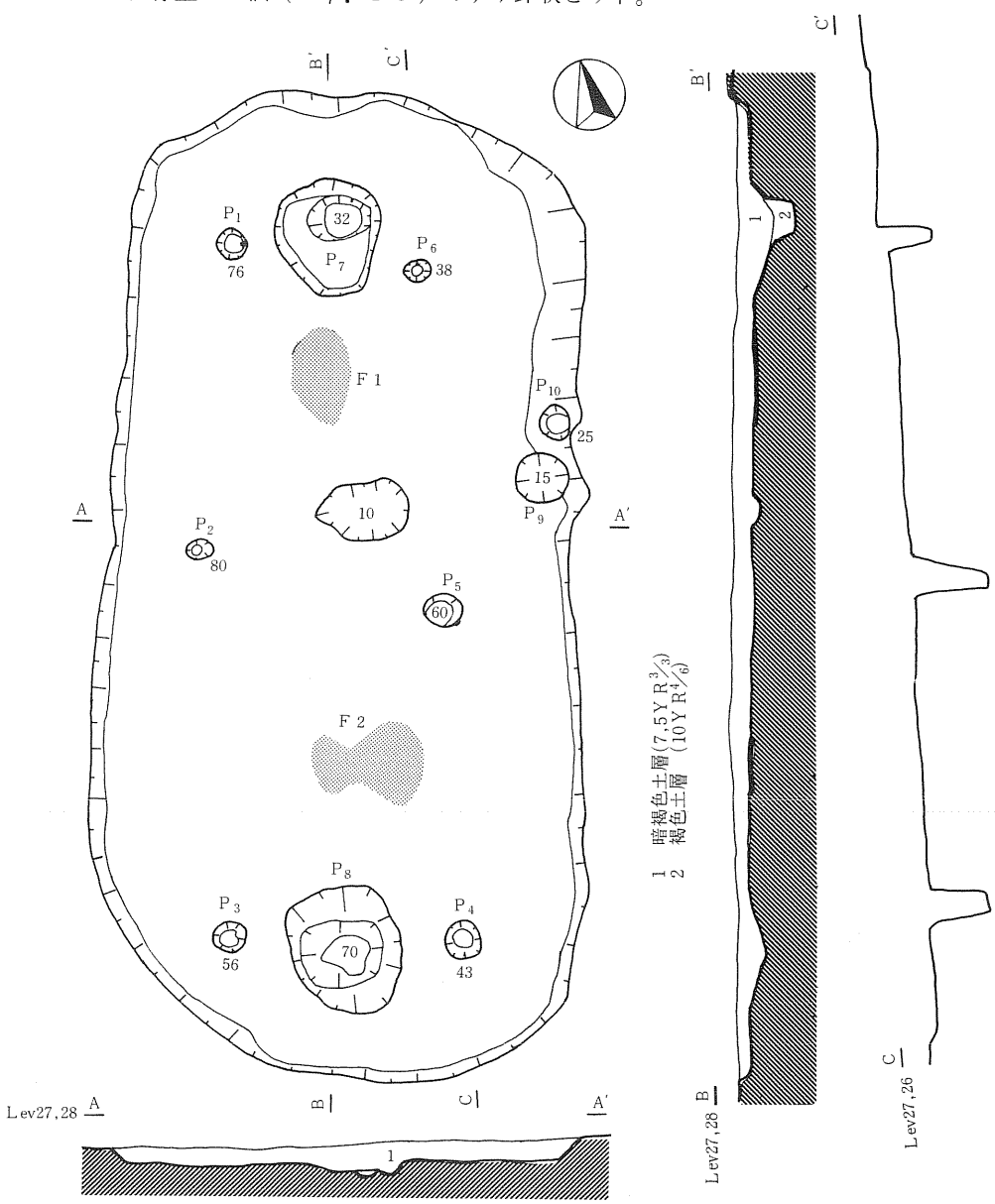
〈平面形〉長軸7.7m，短軸3.4m楕円形プラン。長軸方向は，ほぼN－Sを示す。

〈壁・床〉壁は45度で10cm立ち上がる。床面はほぼ平担。

〈炉〉長軸線上に，F_1とF_2の地床炉。よく焼けている。

〈柱穴〉長軸線と平行に3個ずつ並ぶ。P_1～P_6が主柱穴。

〈施設〉長軸線上に2個（P_7．P_8）のすり鉢状ピット。



第15図　6号住居跡

7号住居跡（第16図，図版8）

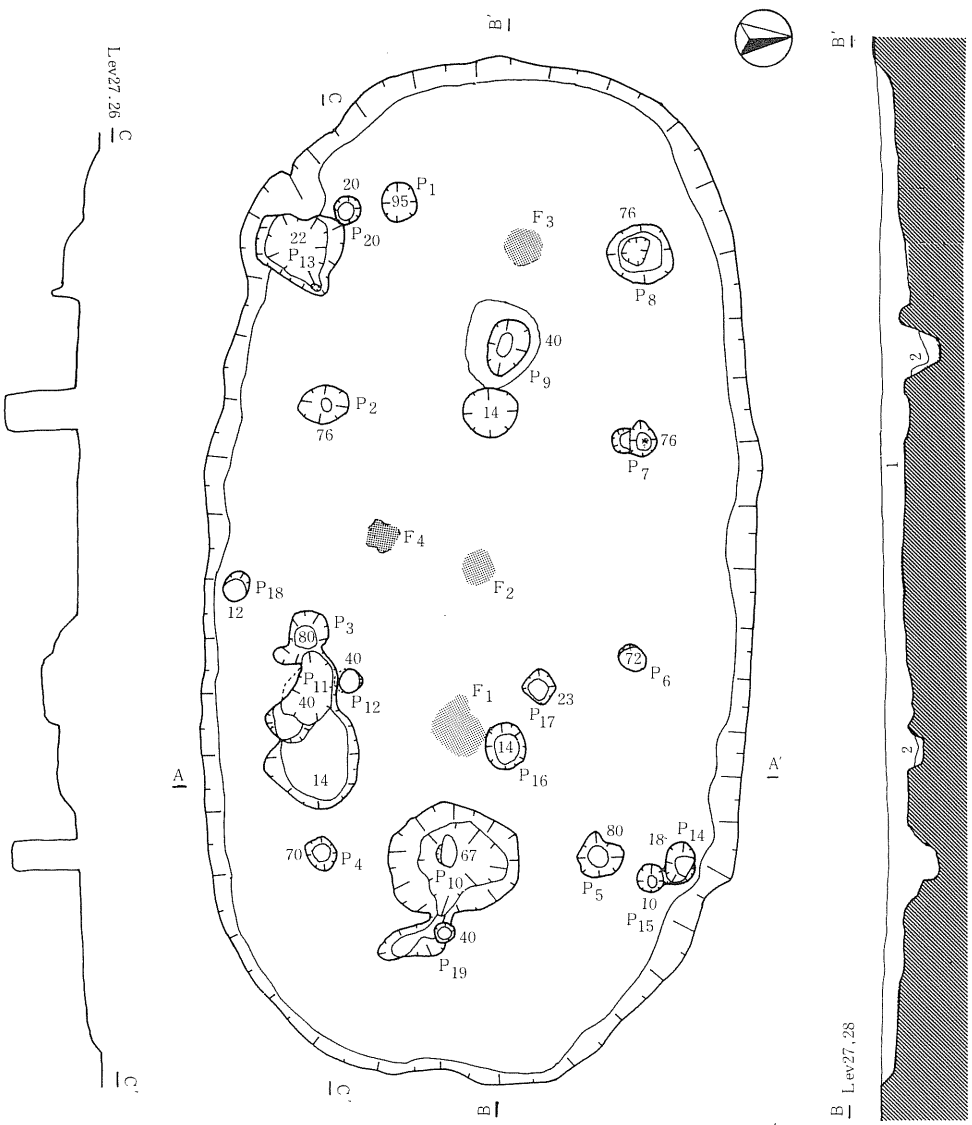
〈平面形〉長軸9.8m，短軸5.1mの楕円形のプラン。長軸方向は，ほぼW－Eを示す。

〈壁・床〉壁は40度で20cm立ち上がる。床面は中央部にむかって，ゆるやかに凹む。北東部は凹凸をなす。

〈柱穴〉長軸線と平行に4個ずつ並ぶ。P_1～P_8が主柱穴。

〈施設〉長軸線上に2個（P_9，P_{10}）のすり鉢状ピット。うちP_9は縁をもつ。

〈特記事項〉P_{11}内床面は石皿が定置されていた。



第16図　7号住居跡

8号住居跡（第17図）

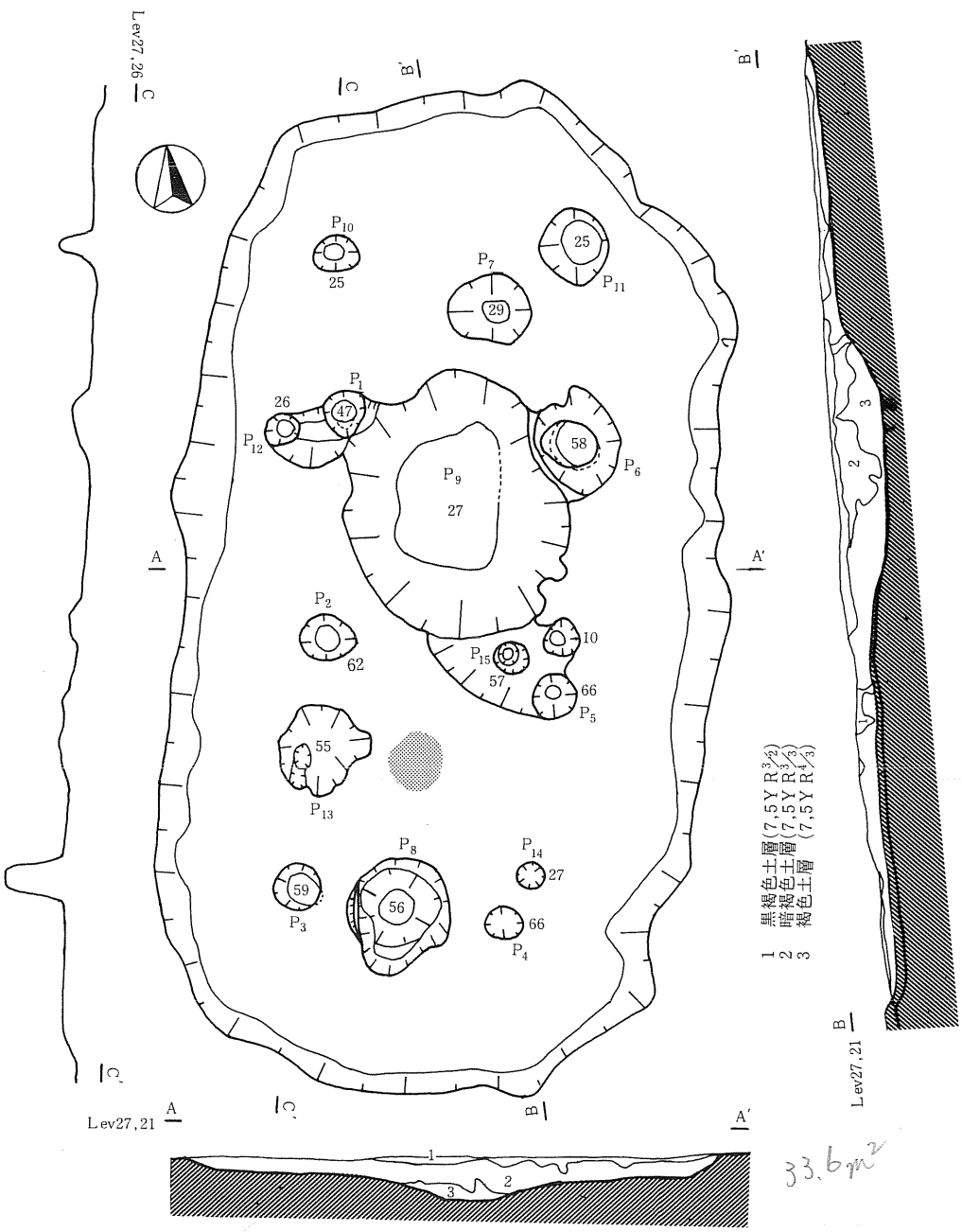
〈平面形〉長軸8．0ｍ，短軸6．9ｍの楕円形プラン。長軸方向は，ほぼＮ－Ｓを示す。

〈壁・床〉壁は２０度で８cmほど立ち上がる。床面は，ゆるやかに中央部に傾斜。

〈炉〉長軸線上に地床炉。１０cmの厚さで，かなり使用されている。

〈柱穴〉長軸線に平行して３個ずつ並ぶ。P_1～P_6が柱穴。

〈施設〉長軸線上に縁のあるすり鉢状のピット（P_8）と鍋底状を呈するピット（P_9）がある。



第17図　8号住居跡

9号住居跡（第18図）

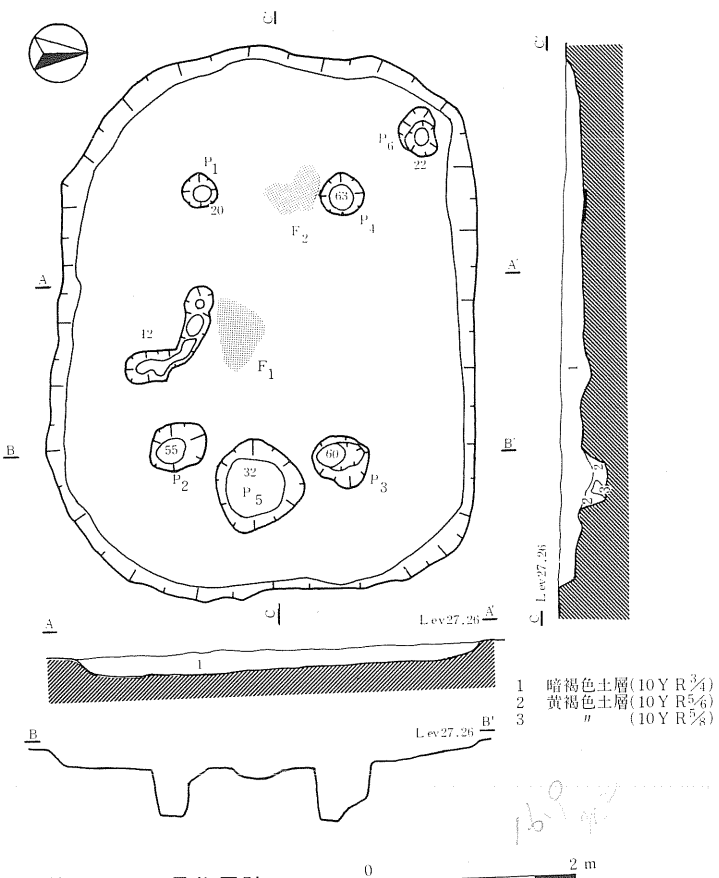
〈平面形〉長軸５．０ｍ，短軸３．５ｍの楕円形プラン。長軸は，Ｗ－Ｅを示す。

〈壁・床〉壁は２０度～６０度で１４～１８cm立ち上がる。

〈炉〉長軸線上にＦ１とＦ２の地床炉。良く焼けている。

〈柱穴〉Ｐ１～Ｐ２が主柱穴。長軸線を中心として，左右対称に２個ずつ並ぶ。

〈施設〉長軸線上にすり鉢状のＰ５。



第18図　９号住居跡

10号住居跡（第19図）

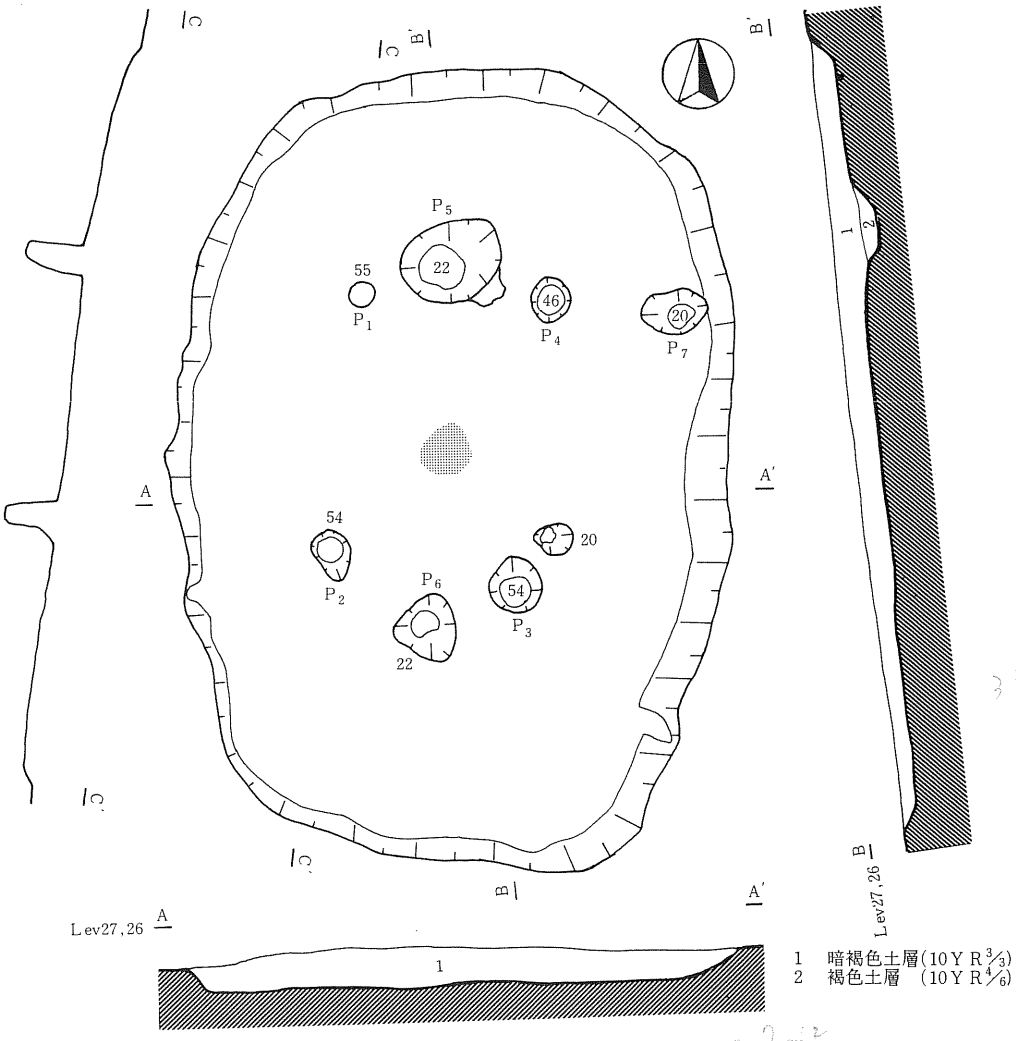
〈平面形〉長軸6.0ｍ，短軸4.0ｍの楕円形プラン。長軸方向は，Ｎ－Ｓを示す。

〈壁・床〉壁は４０度で１４cm立ち上がる。床面は平坦。

〈炉〉ほぼ中央に地床炉。１０cmの厚さ。

〈柱穴〉長軸線を中心に２個ずつ平行に並ぶ。Ｐ１～Ｐ４が主柱穴。

〈施設〉長軸線上に，少し縁の残るピット（Ｐ５）。



第19図　10号住居跡

11号住居跡（第20図）

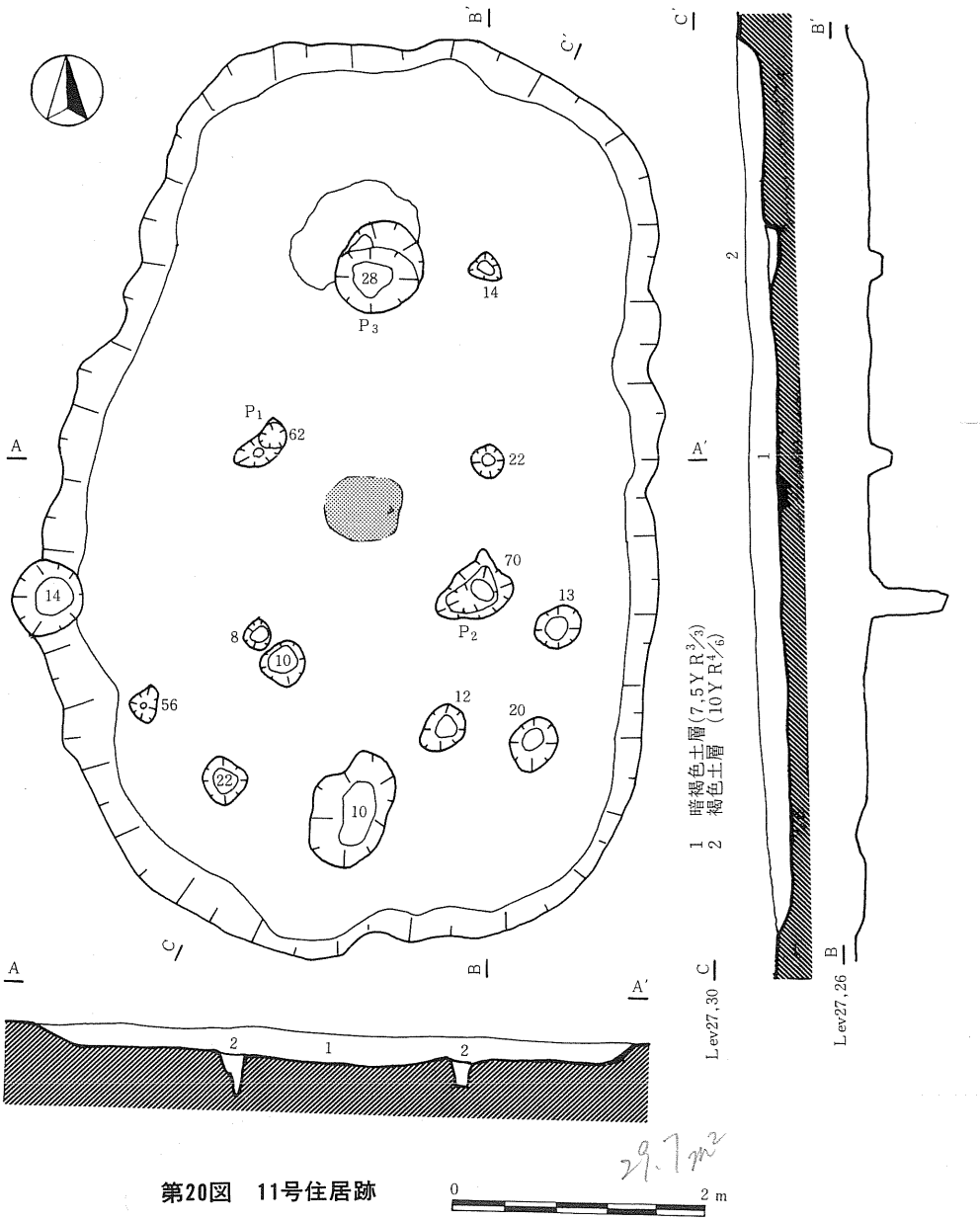
〈平面形〉長軸７.０ｍ，短軸４.３ｍの楕円形プラン。長軸方向は，短軸Ｎ－Ｓを示す。

〈壁・床〉壁は２５度で１０cm立ち上がる。床面は，やや起伏がある。

〈炉〉ほぼ中央に地床炉。

〈柱穴〉２個の柱穴（Ｐ１，Ｐ２）しか確認できなかった。

〈施設〉長軸線上に縁のあるピット（Ｐ３）



29.7㎡

第20図　11号住居跡

12号住居跡（第21図，図版９）

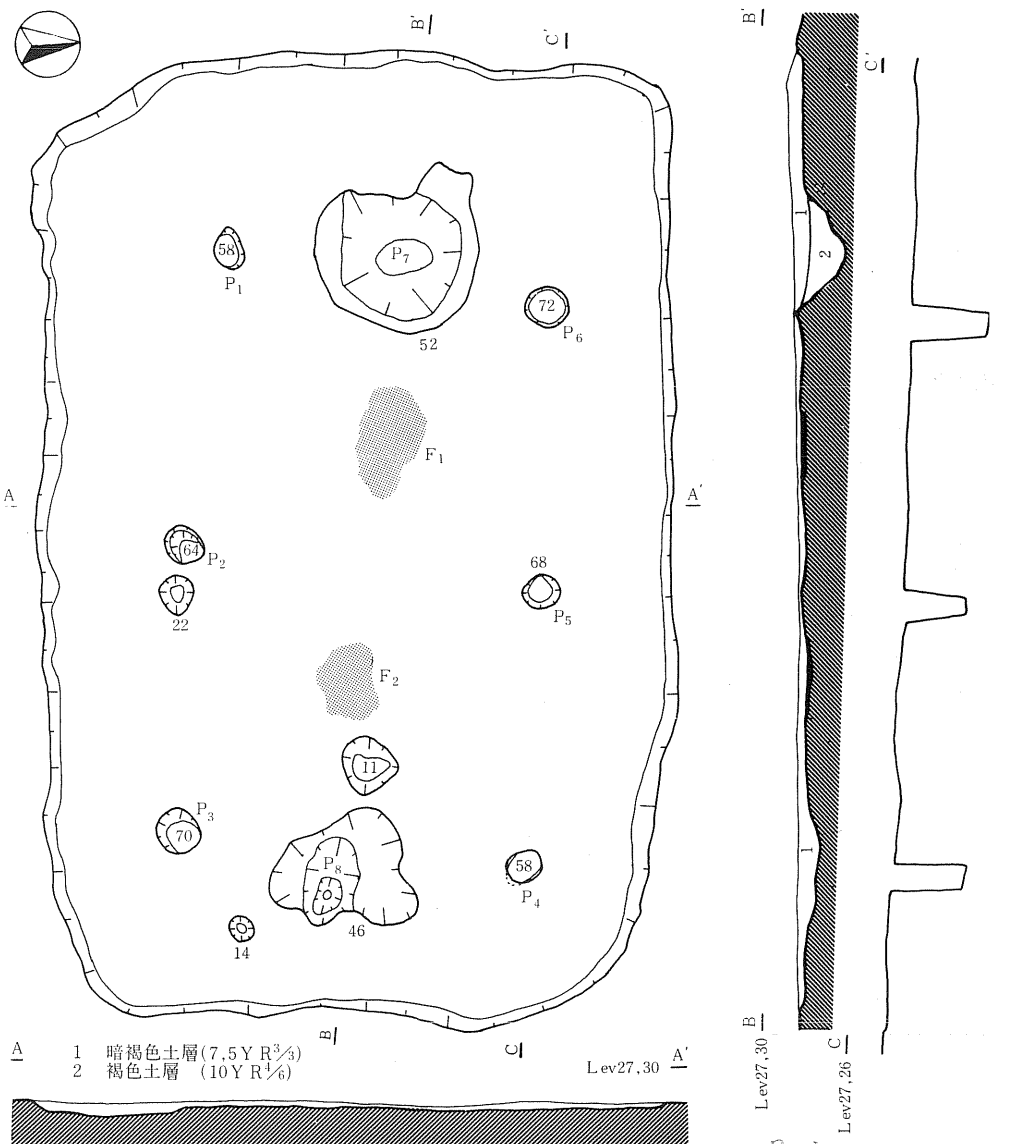
〈平面形〉長軸８.０ｍ，短軸５.２ｍの隅丸長方形プラン。長軸方向は，Ｗ－Ｅを示す。

〈壁・床〉壁は４０度で，４～５cm立ち上がる。床面は凹凸が激しい。

〈炉〉長軸線上に，Ｆ１・Ｆ２の地床炉。

〈柱穴〉長軸線を中心に３個ずつ平行して並ぶ。Ｐ１～Ｐ６が主柱穴。

〈施設〉長軸線上に，縁のあるすり鉢状のピット（Ｐ７），と縁のないピット（Ｐ８）がある。



第21図　12号住居跡

3-1

13号住居跡（第22図，図版９）

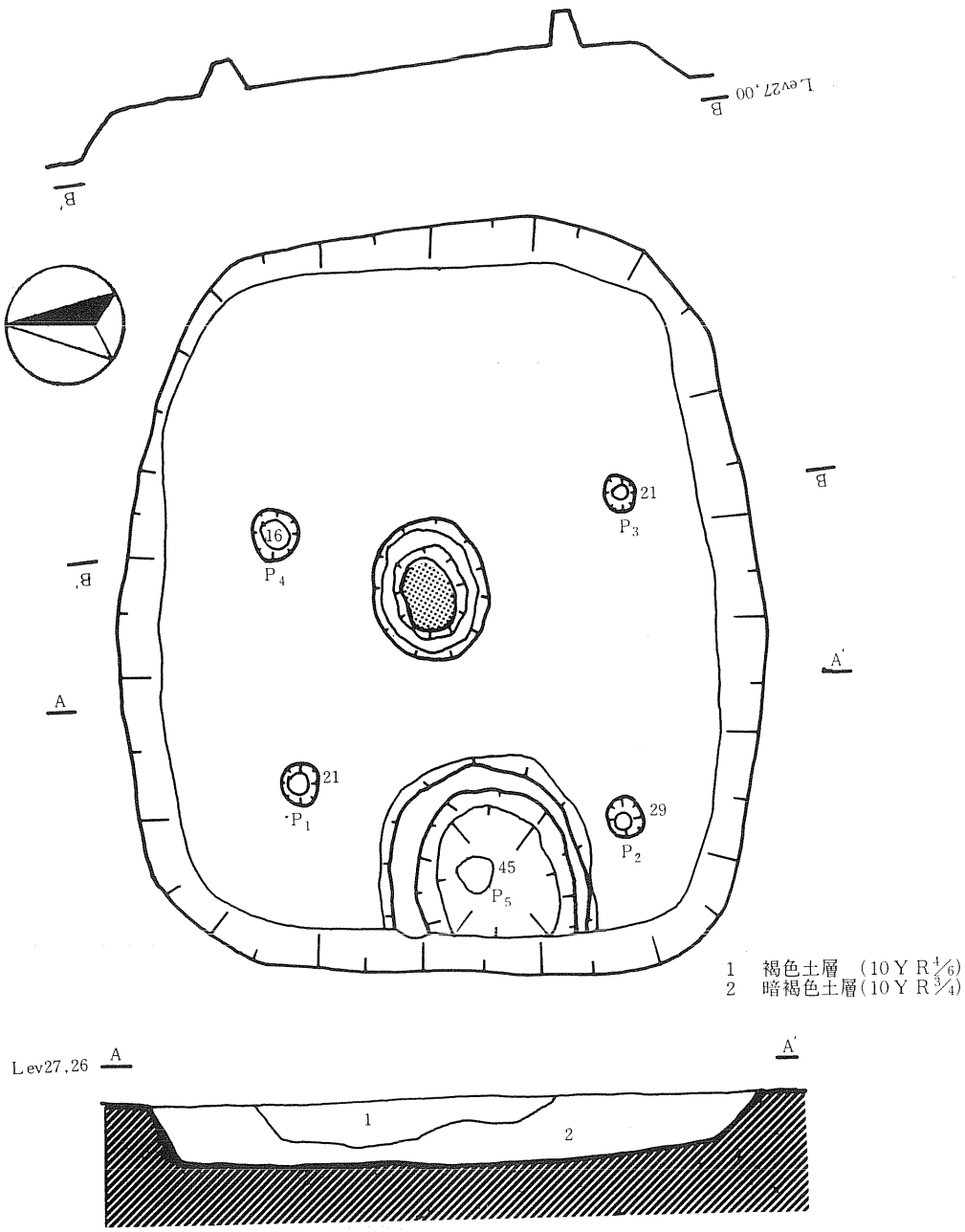
〈平面形〉長軸３.２ｍの隅丸長方形プラン。長軸方向は，Ｗ－Ｅを示す。

〈壁・床〉壁は５０度で３０cm立ち上がる。床面はほぼ平坦。

〈炉〉中央に浅く掘り凹めた炉。炉には縁がめぐる。焼土は薄い。

〈柱穴〉長軸線上に平行に２ずつ並ぶ。Ｐ$_1$～Ｐ$_4$は主柱穴。

〈施設〉長軸線上の西壁に接して縁のめぐるすり鉢のピット（Ｐ$_5$）。



第22図　13号住居跡

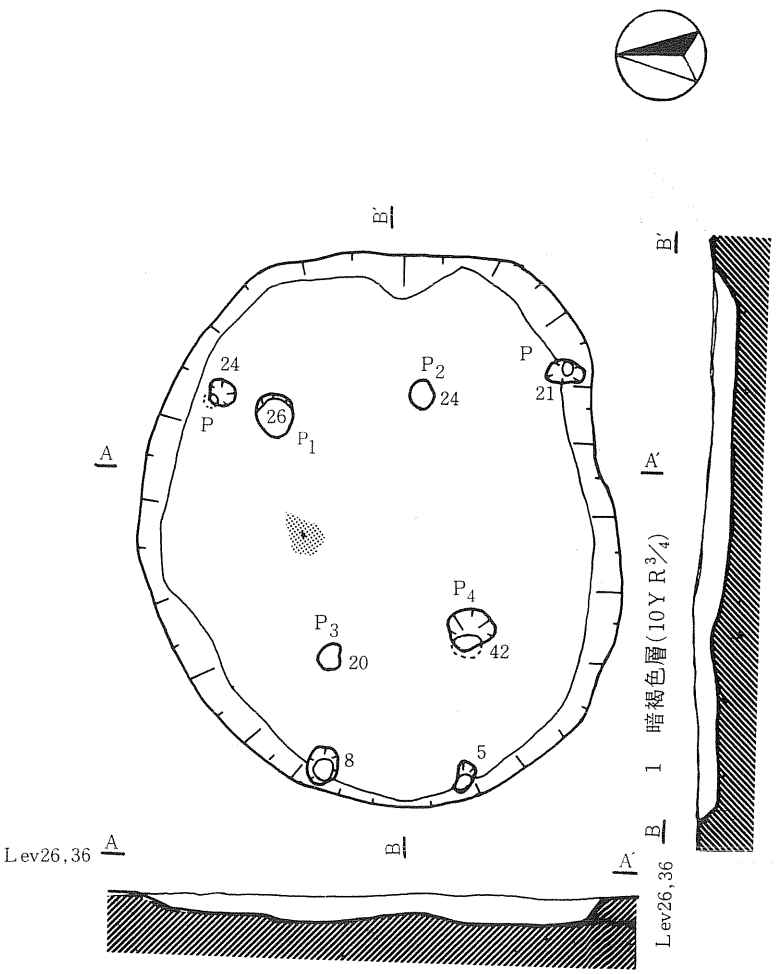
14号住居跡（第23図）

〈平面形〉長軸3．0ｍ短軸2．6ｍの円形に近い楕円形プラン。長軸方向は，Ｗ－Ｅを示す。

〈壁・床〉壁は４０度で１５cm立ち上がる。床面は，凹凸が激しい。

〈炉〉長軸線北寄りに地床炉。

〈柱穴〉長軸線を中心に２個ずつ平行して並ぶ。P_1～P_4が主柱穴。



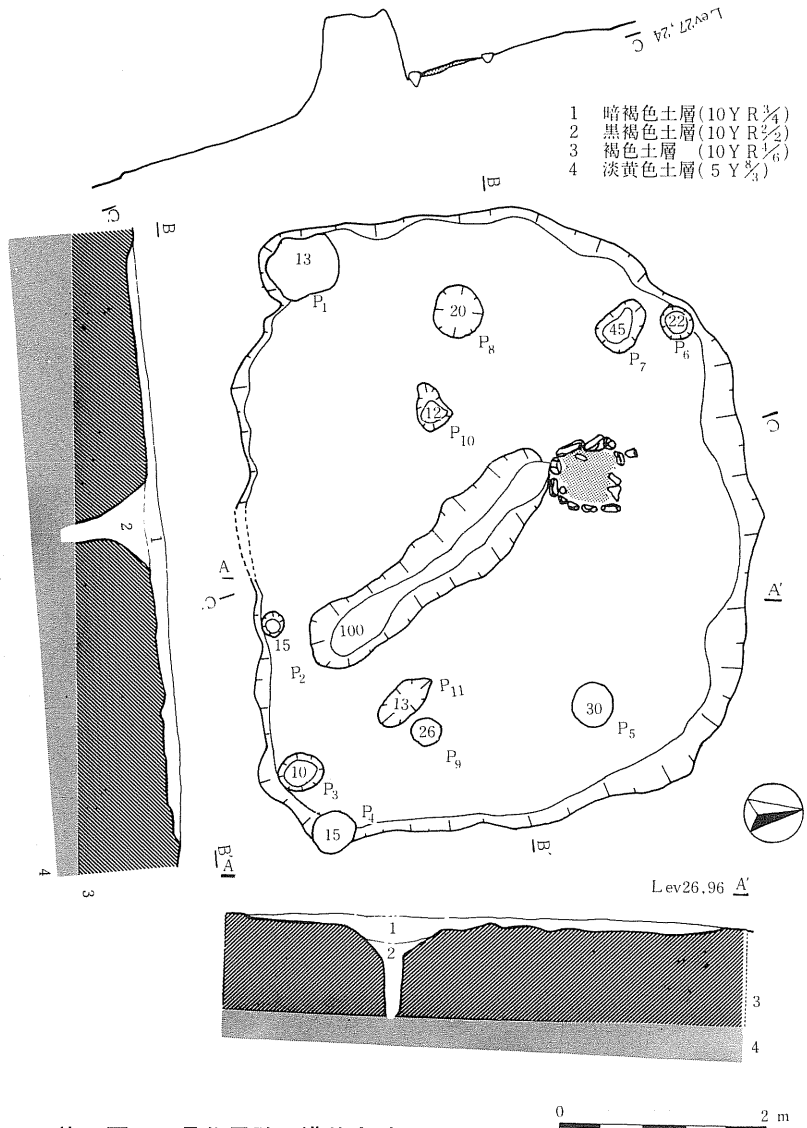
第23図　14号住居跡

15号住居跡（第24図，図版11）

〈平面形〉不整円形。長軸5．7４ｍ，短軸4．6５ｍ。

〈壁・床〉浅い掘り込みで壁高３～６cm。床面はしまっている。

〈炉〉中央より北に石囲炉。



第24図　15号住居跡・溝状土坑

〈柱穴〉11個の柱穴が検出された。

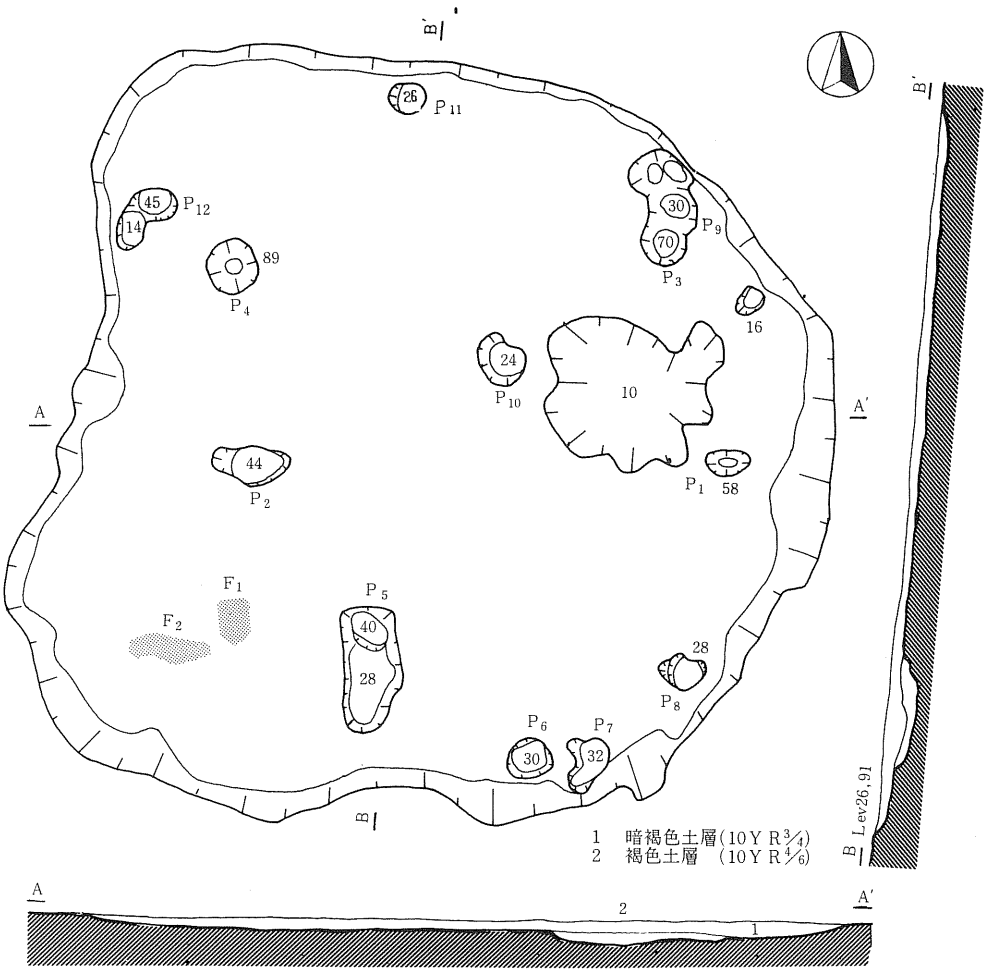
16号住居跡（第25図）

〈平面形〉不整円形。長軸5.97m，短軸5.88m。

〈壁・床〉壁高は6～10cmで，ゆるやかに傾斜する。床面は平坦で，堅くしまっている。

〈炉〉石のぬき取られた思われる炉。

〈柱穴〉柱穴と考えられるピットは12個検出。



第25図　16号住居跡

0　2 m

17号住居跡（第26図）

〈平面形〉南側の壁ははっきりしない。東西径は５ｍ。

〈壁・床〉北側で壁高５cm，南側は攪乱で不明。床面には凹凸があるが，堅くしまっている。

〈炉〉北東よりに石囲炉。床面の一部が焼けている。

〈柱穴〉柱穴と考えられるのはＰ$_{1}$～Ｐ$_{12}$。壁にそってめぐる。

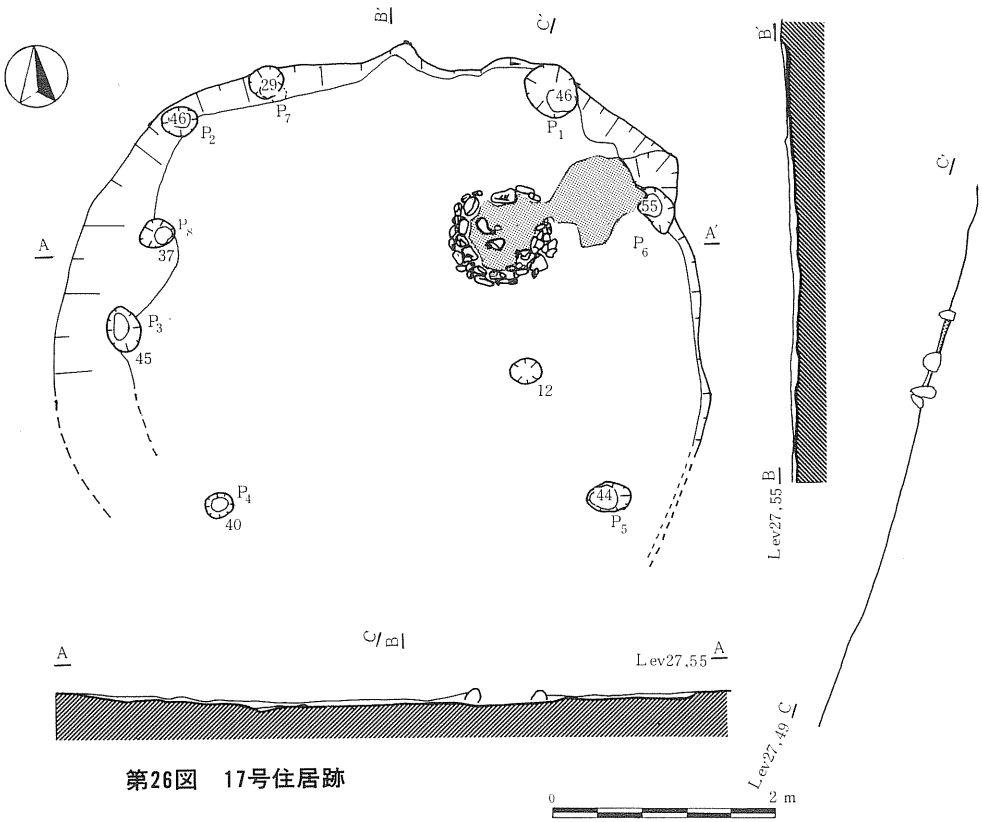
18号住居跡（第27図，図版12）

〈平面形〉径5.５５ｍ～6.２１ｍを測る不整楕円形。

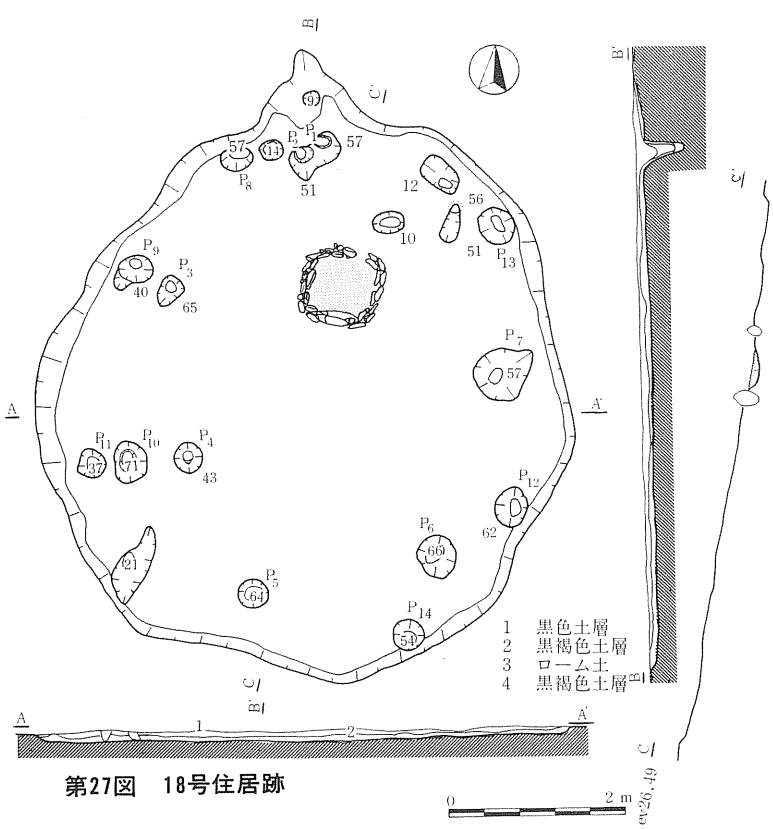
〈壁・床〉壁高は５～６cm。ゆるやかに傾斜する。床面は平坦で，堅くしまっている。

〈炉〉北よりに石囲炉。

〈柱穴〉Ｐ$_{1}$～Ｐ$_{14}$が主柱穴もしくは補助穴と考えられる。



第26図　17号住居跡



第27図　18号住居跡

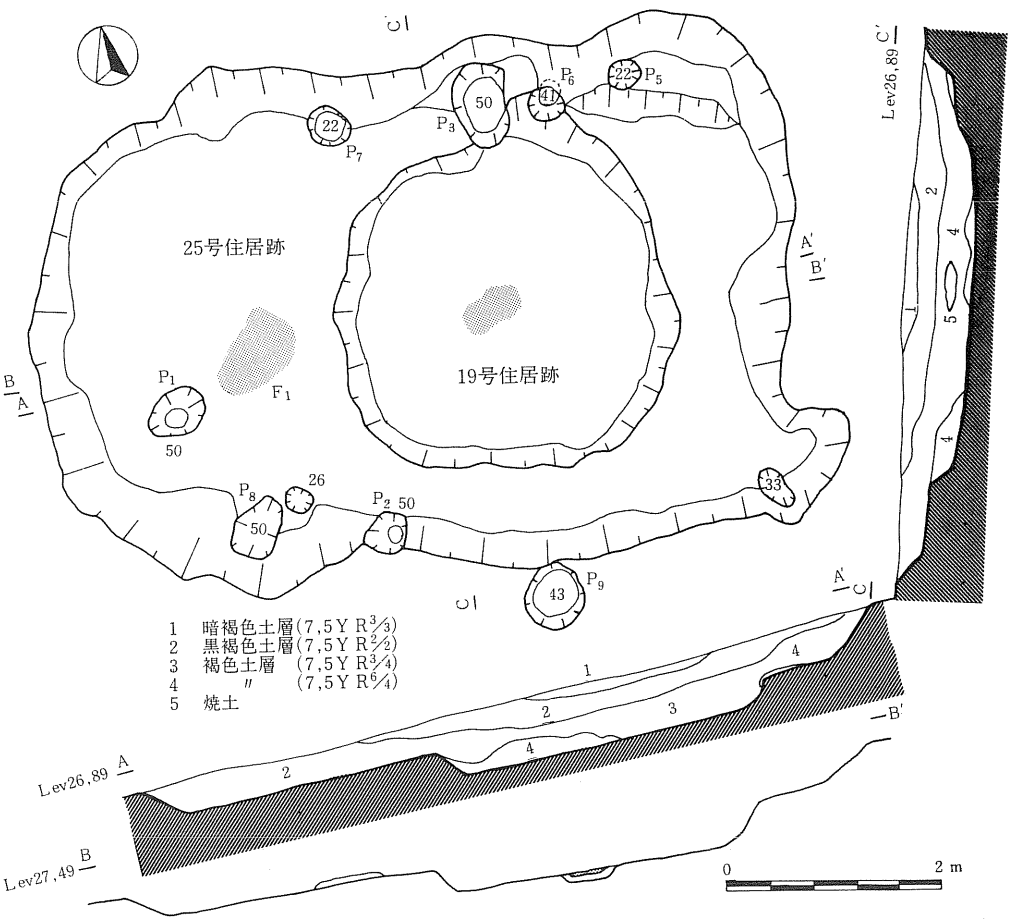
19号住居跡（第28図，図版12）

〈平面形〉25号住居跡と重複。本遺構が古い。直径2.76mの円形。

〈壁・床〉壁高は25m～30cm。急傾斜をなして落ち込む。床面は平坦，かたくしまる。

〈炉〉中央部に位置する地床炉。

〈柱穴〉不明である。



第28図　19・25号住居跡

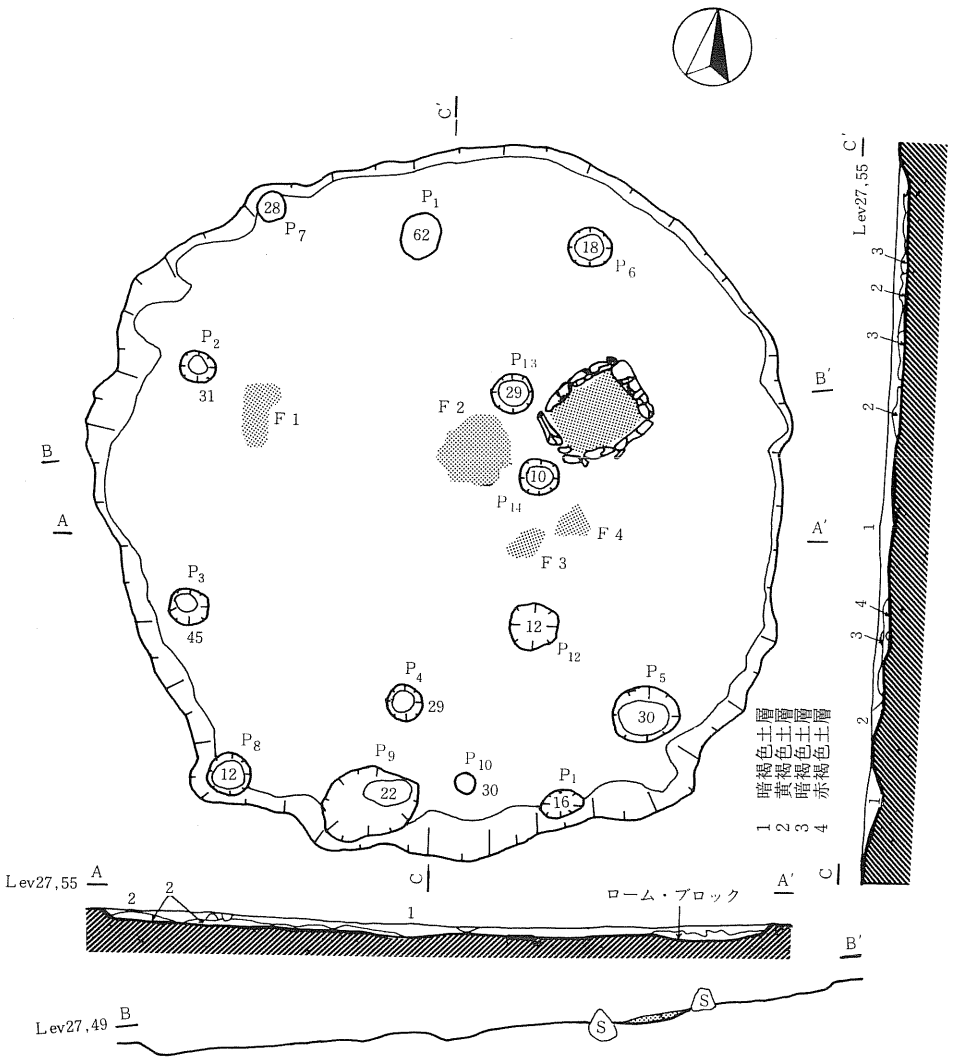
20号住居跡（第29図，図版13）

〈平面形〉直径4.8mの円形。

〈壁・床〉壁高は7～10cmで,ゆるやかに床面につづく。床面は凹凸をなすが，堅くしまっている。

〈炉〉北東よりに石囲炉。この周辺に焼土F2～F4あり。北西よりにF1。

〈柱穴〉14個の柱穴状ピットが検出された。



第29図　20号住居跡

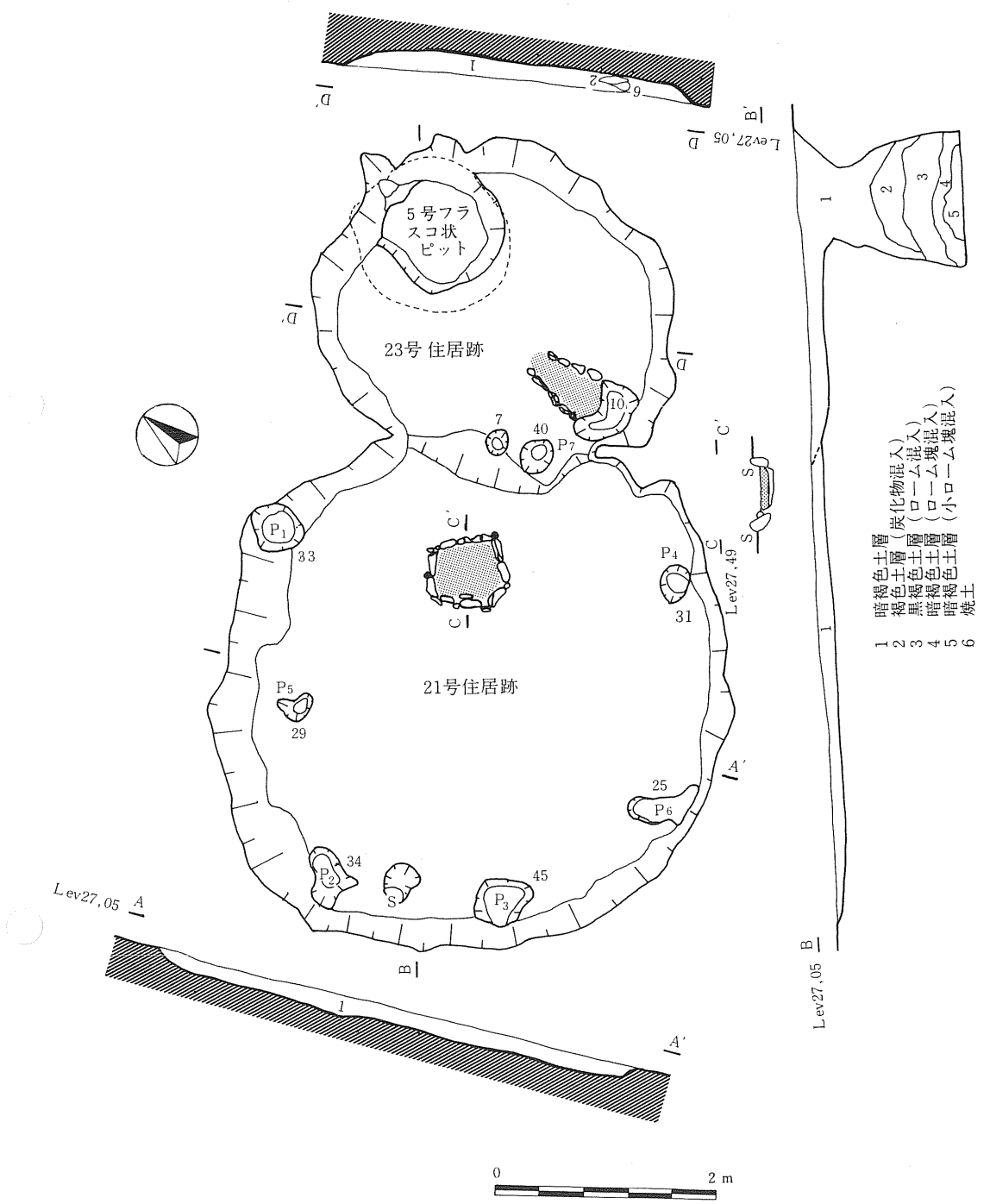
21号住居跡（第30図，図版13）

〈平面形〉東側の部分が２３号住居跡と重複している。本住居跡が古い。径4.２ｍの円形。

〈壁・床〉壁高は１０～１２cm。床面はゆるやかな起伏を呈し，堅くしまっている。

〈炉〉東北よりに石囲炉。

〈柱穴〉壁にそって配置されたＰ１～Ｐ７。



第30図　21.23号住居跡、5号フラスコ状ピット ピット

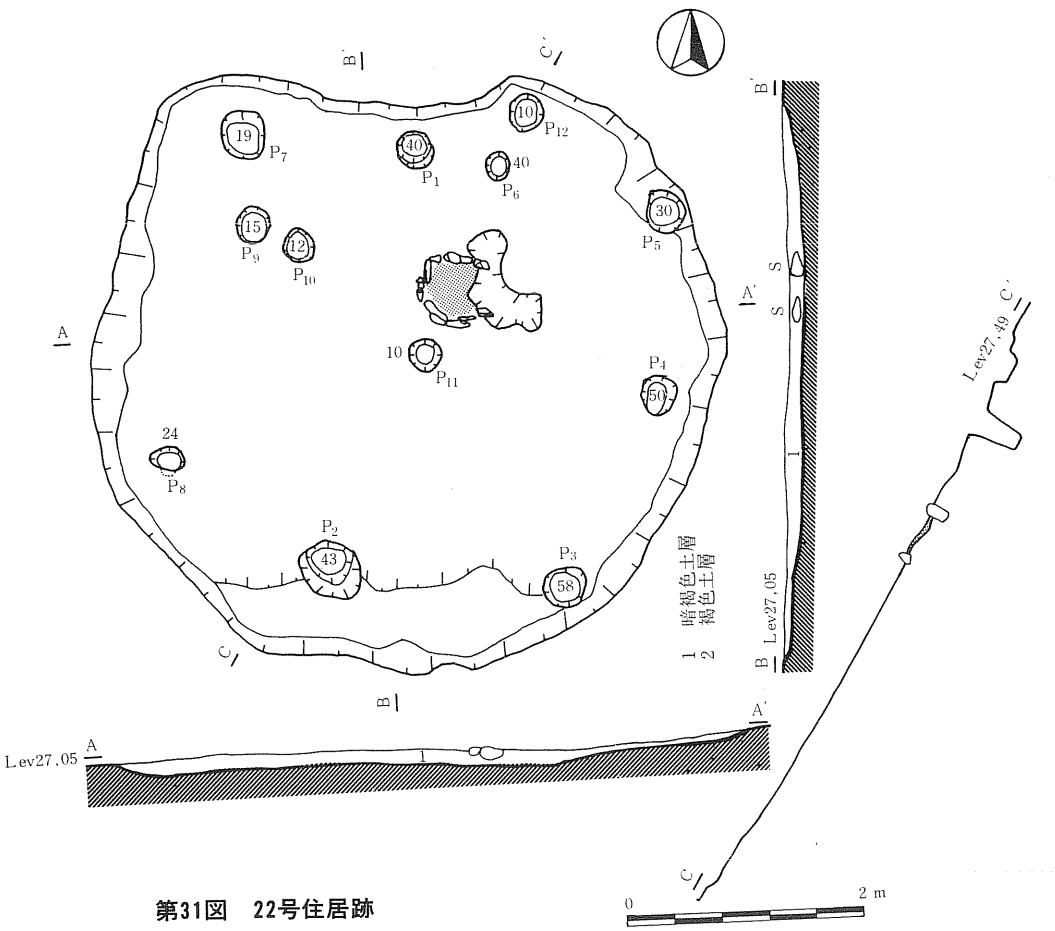
22号住居跡（第31図，図版14）

〈平面形〉直径4.８ｍの不整円形。

〈壁・床〉壁高は８～１０cmで，床面になだらかに続く。床面平坦で，堅くしまる。

〈炉〉石囲炉。

〈柱穴〉内部から１２個の柱穴状ピットが検出された。



第31図　22号住居跡

23号住居跡（第30図，図版13）

〈平面形〉直径2.９ｍほどの円形を呈する。西側において21号住居跡と切り合う。本住居跡が新しい。

〈壁・床〉壁高は１５cmを測る。床面は堅くしまる。５号フラスト状ピットを付設している。

〈炉〉南側に開く石組炉。

〈柱穴〉確認されなかった。。

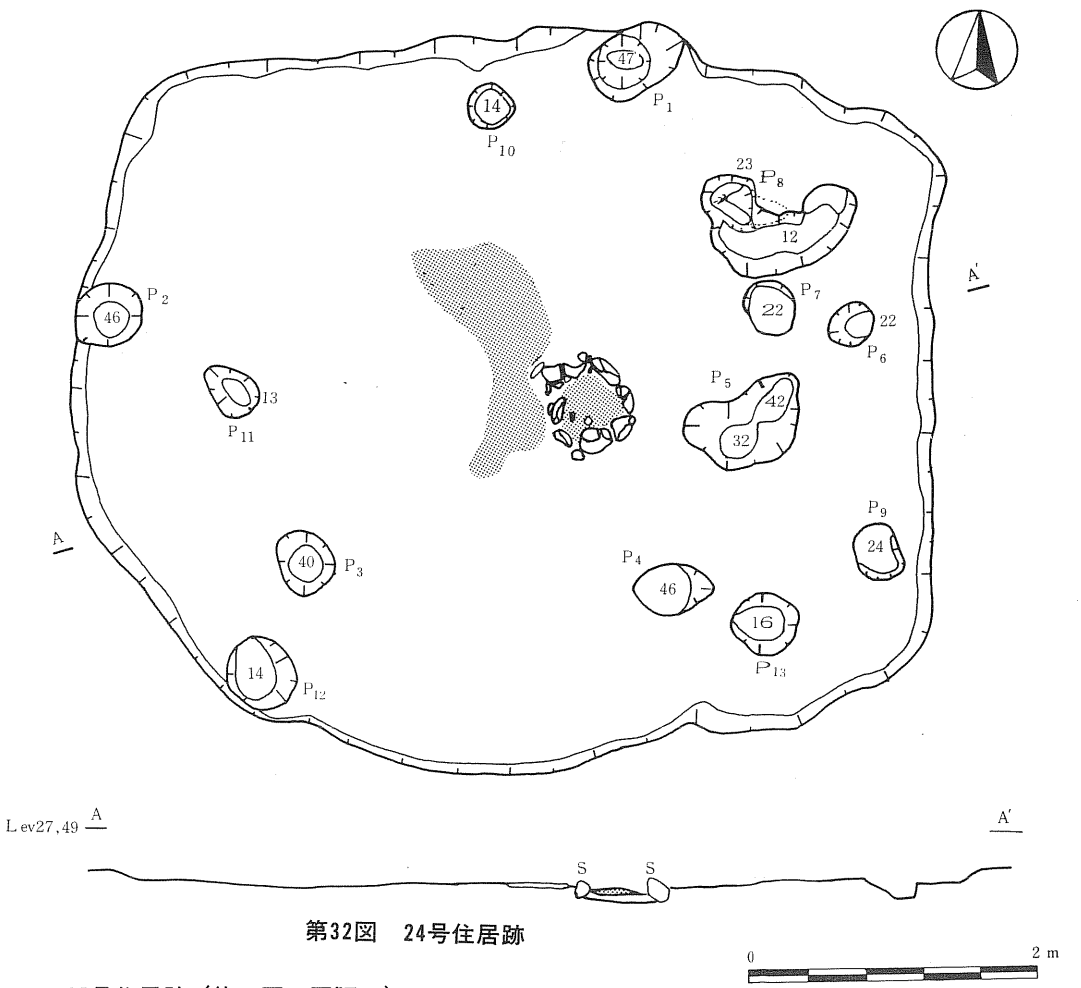
24号住居跡（第32図，図版14）

〈平面形〉不整隅丸長方形，長軸5．8ｍ，短軸4．９５ｍ。

〈壁・床〉壁高は３～５cm。ゆるやかに床面に続く。よくしまっている。

〈炉〉石囲炉。　床面に焼土あり。

〈柱穴〉柱穴状ピット13個検出された。



第32図　24号住居跡

25号住居跡（第28図，図版12）

〈平面形〉不整楕円形。長軸6．９０ｍ，短軸3．９０ｍ。長軸は東西方向を向く。１９号住居跡と重複。

〈壁・床〉壁高は３０～４０cm。急傾斜をなして床面に移行する。床面はかたくしまる。

〈炉〉地床炉。

〈柱穴〉９個検出された。

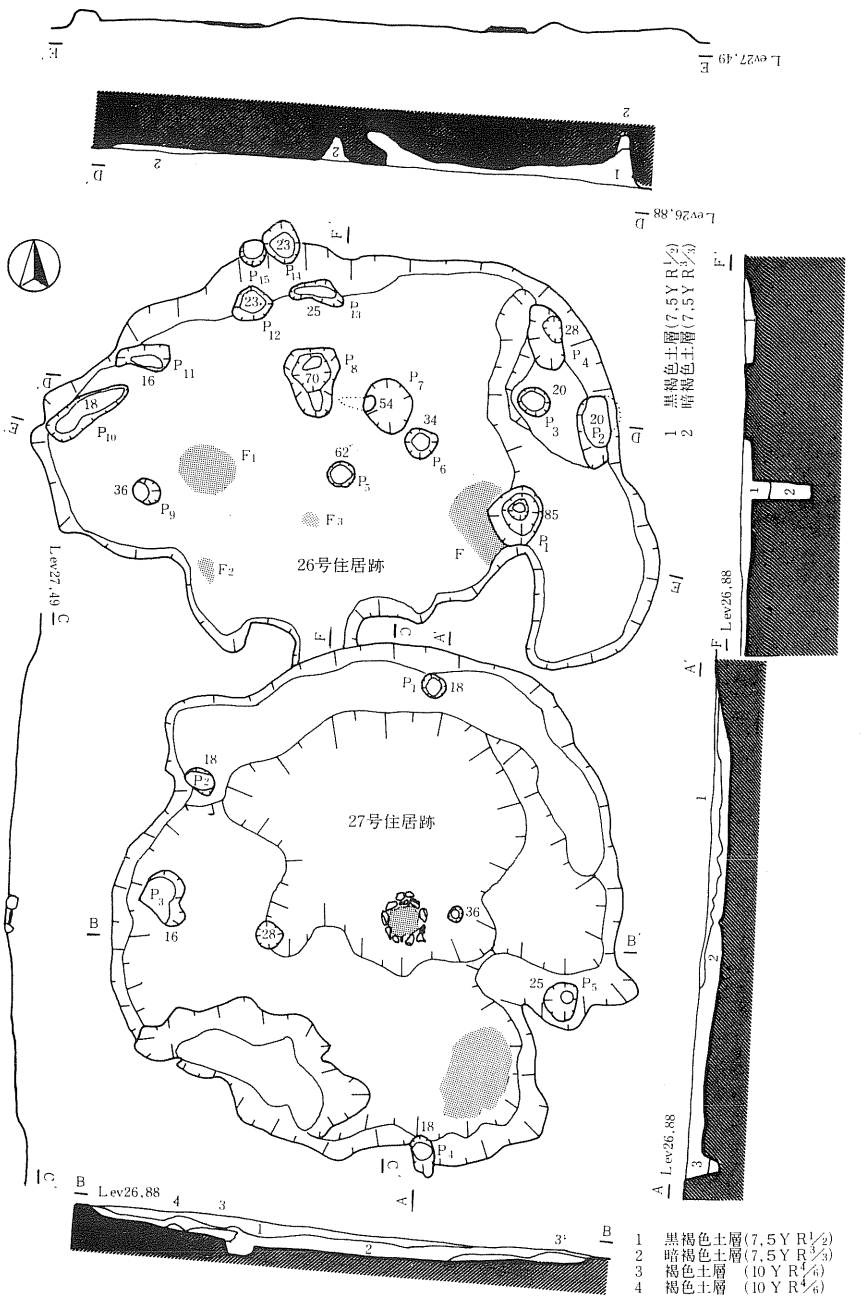
26号住居跡（第33図，図版15）

〈平面形〉不整楕円形

〈壁・床〉壁高は北側において１０～１５cm，南側４～５cm。

〈炉〉焼土面が４ヵ所検出。

〈柱穴〉柱穴らしいピット15個。



第33図　26・27号住居跡

27号住居跡（第33図，図版15）

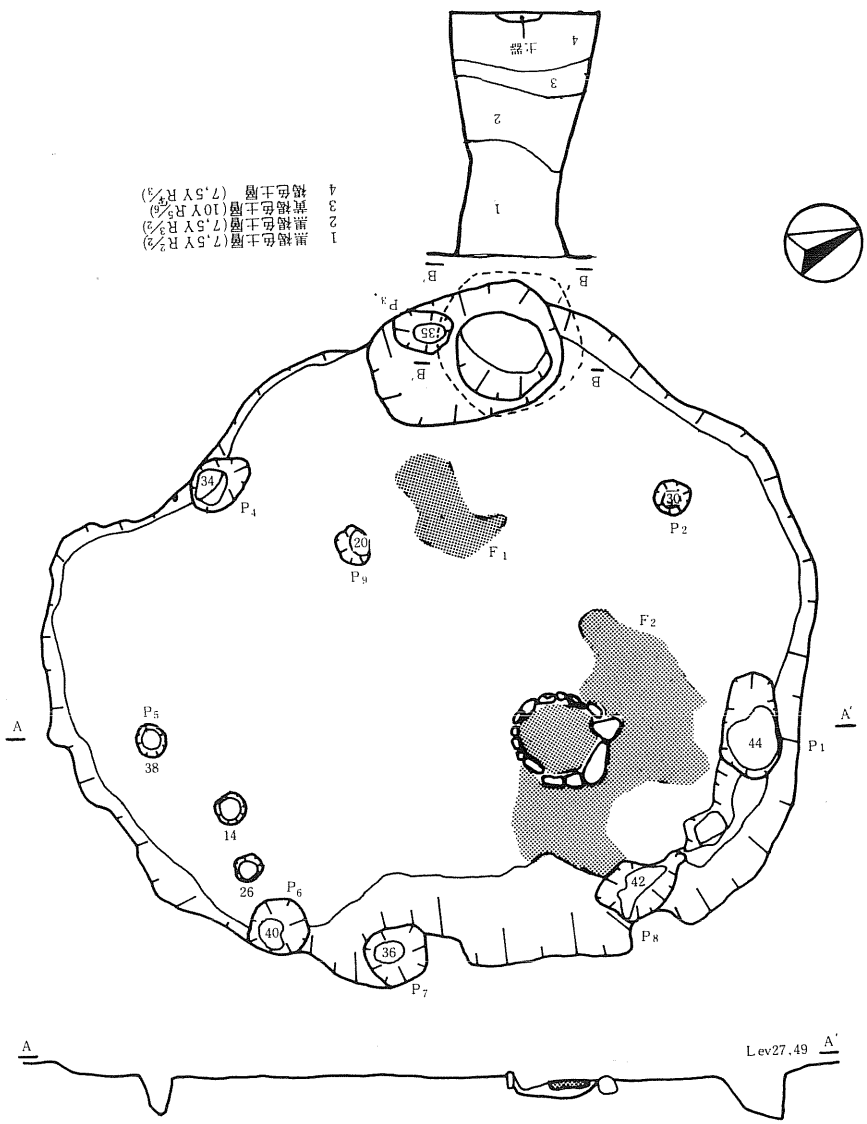
〈平面形〉不整円形。径約5.2ｍ。

〈壁・床〉壁高は１０～２０cmで，ゆるやかに床面に続く。

〈炉〉石囲炉。

〈柱穴〉壁にそって配置されたＰ１～Ｐ５が柱穴であろう。

28号住居跡（第34図，図版15）



第34図　28号住居跡・４号フラスコ状ピット

〈平面形〉不整円形で径5.3～4m。

〈壁・床〉壁高は約10cm。床面は平坦で堅くしまる。第4号フラスコ状ピットを付設する。

〈柱穴〉壁にそって配置されたP1～P8が主柱穴であろう。

〈炉〉石囲炉

29号住居跡（第35図）

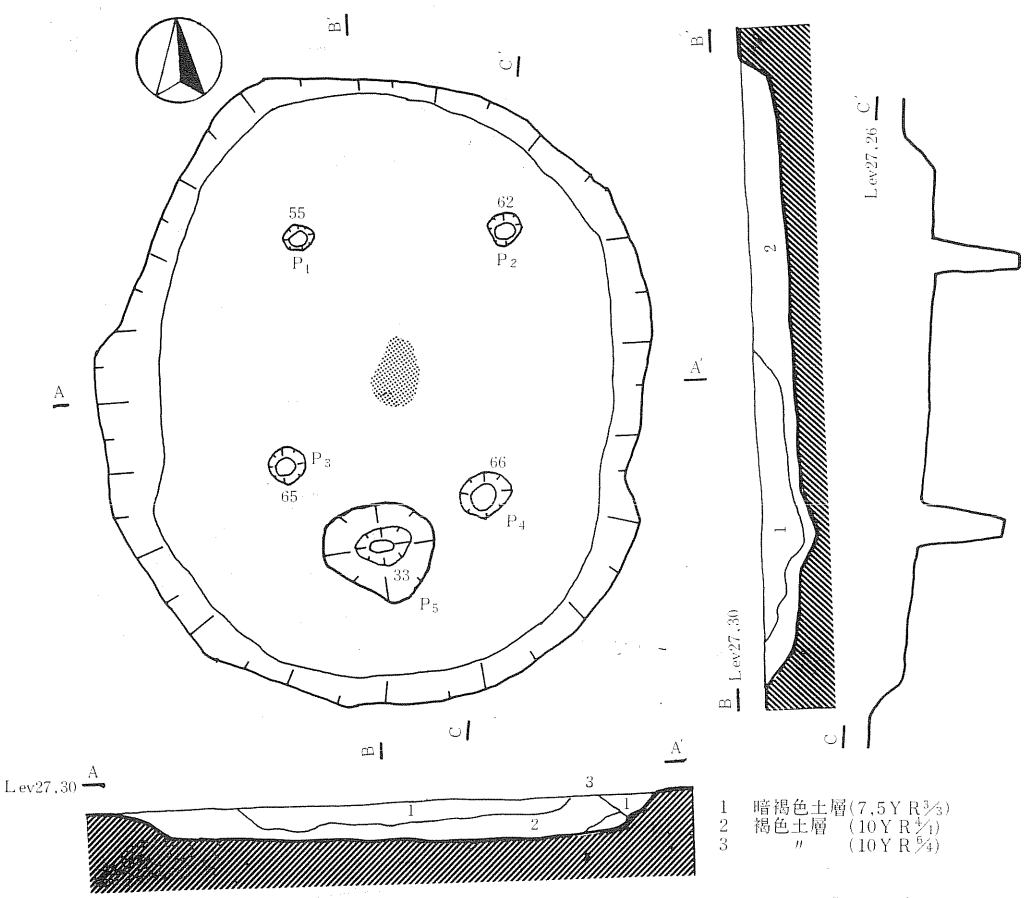
〈平面形〉長軸3.96m，3mの楕円形プラン。長軸はN－S方向を向く。

〈壁・床〉壁高は20～25cm。床面は平坦で堅くしまる。

〈炉〉地床炉

〈柱穴〉主柱穴4本（P1～P4）。長軸線を中心に2本ずつ並ぶ。

〈施設〉長軸線上には，すり鉢状のピット（P5）がある。



第35図　29号住居跡

30号住居跡（第36図，図版10）

〈平面形〉長軸5.７０ｍ，短軸3.４０ｍの隅丸長方形。長軸方向はＮ－Ｓを示す。

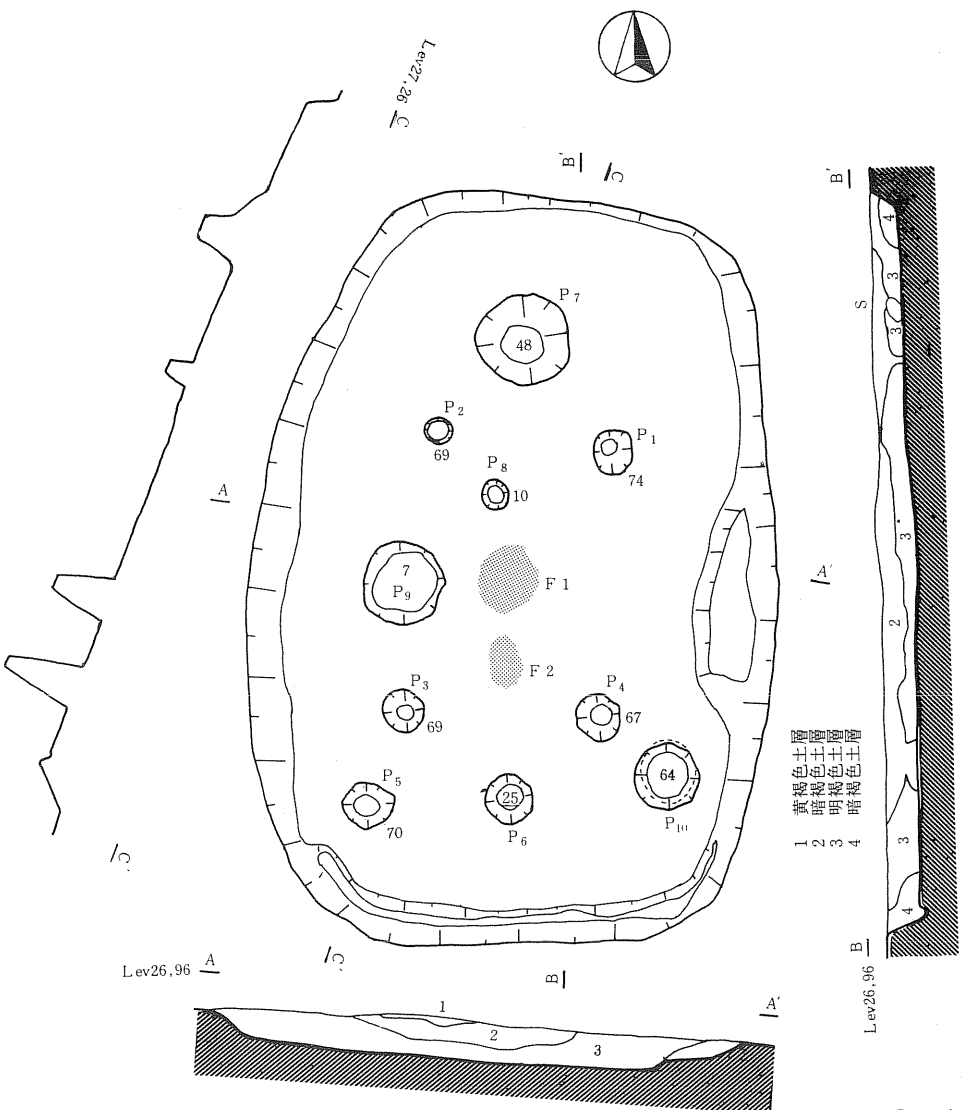
〈壁・床〉壁高２５cm。急角度で床面にいたる。床面は平坦で，かたくしまっている。

〈周溝〉南側壁に沿ってめぐる。幅４～５cm。深さ４cm。長さ3.６０ｍ。

〈炉〉長軸線上に地床炉。

〈柱穴〉Ｐ$_1$～Ｐ$_4$が主柱穴。長軸線を中心にして２本ずつ並ぶ。

〈施設〉長軸線上にすり鉢状のピット（Ｐ$_7$）がある。東壁中央には階段状の施設があり入口ではないかと考えられる。



第36図　30号住居跡

31号住居跡（第37図，図版10）

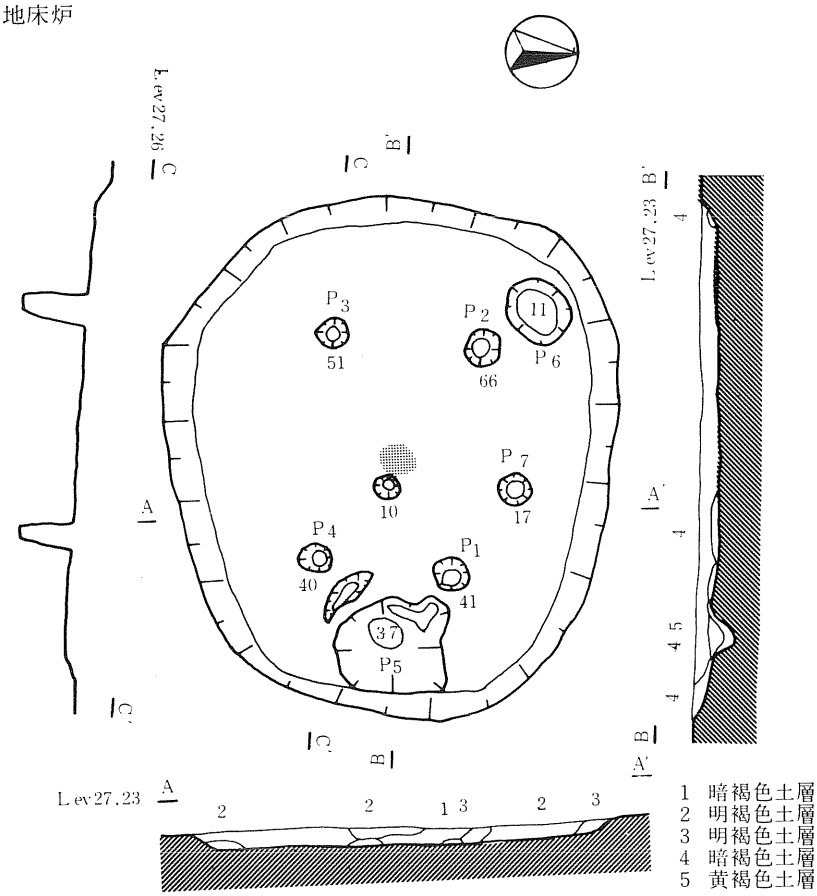
〈平面形〉長軸3.５５ｍ，短軸3.６０ｍの楕円形。長軸はＥ－Ｗ方向を示す。

〈壁・床〉壁の立ち上りが急である。床面は平坦でしっかりしている。

〈柱穴〉長軸線に平行して２個ずつ並ぶ。Ｐ$_1$～Ｐ$_4$が主柱穴。

〈施設〉長軸線上にすり鉢状のピット（Ｐ$_5$）あり。

〈炉〉地床炉



第37図　31号住居跡

32号住居跡（第38図）

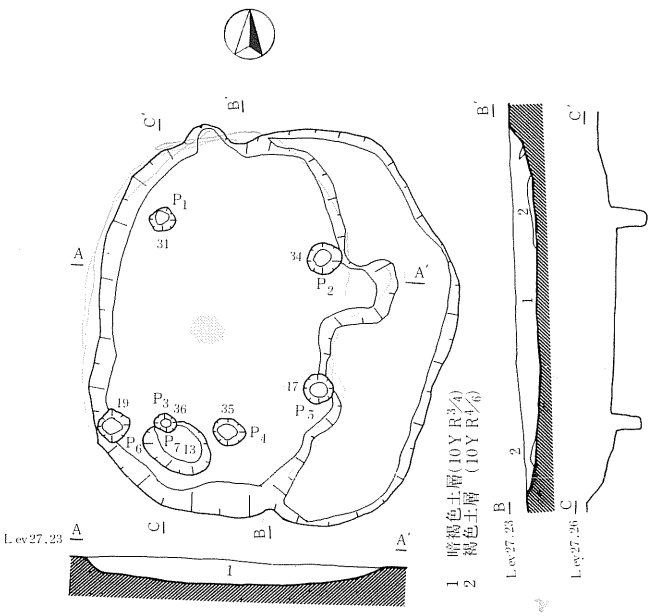
〈平面形〉楕円形プラン。　長軸4.０ｍ，短軸3.８ｍ。長軸はＮ－Ｓ方向を向く。

〈壁・床〉壁高１５ｍ。床面は平坦で，しっかりしている。

〈炉〉地床炉。

〈柱穴〉Ｐ$_1$～Ｐ$_4$が主柱穴であろう。

〈施設〉長軸線上にピット（Ｐ$_7$）がある。



第38図　32号住居跡

33号住居跡（第39図）

〈平面形〉径6.6～5.4ｍの不整楕円形。長軸方向はＮ－Ｓを示す。

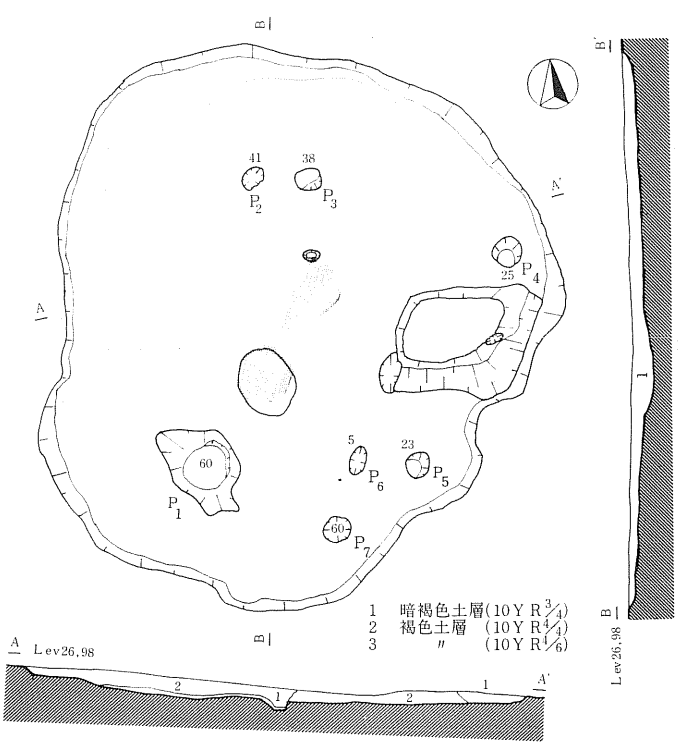
〈壁・床〉壁高は８～５cm。床はしっかりしている。

〈炉〉地床炉

〈柱穴〉Ｐ１～Ｐ７の柱穴状ピットが検出される。

34号住居跡（第40図，図版11）

〈平面形〉長軸3.4ｍ，短軸2.42ｍの楕円形を呈する。長軸方向はＮ－Ｓを示す。



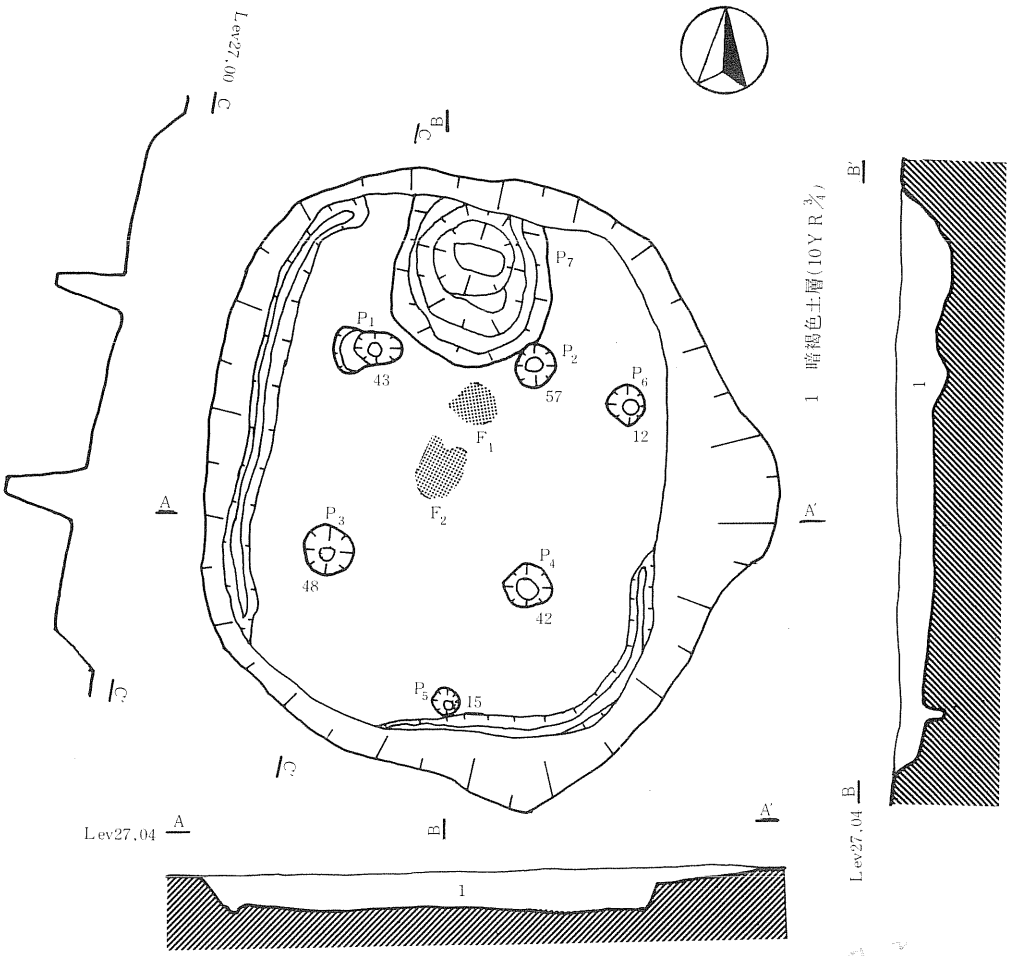
第39図　33号住居跡

〈壁・床〉壁高２０cm。東壁を除き壁面は急である。床面はかたくしまる。

〈周溝〉南東コーナーと西壁に認められる。

〈施設〉中軸線上に北壁に接して，縁のめぐったピットがある（Ｐ７）。

〈柱穴〉Ｐ１～Ｐ４が主柱穴。長軸線に平行して２個ずつ並ぶ。



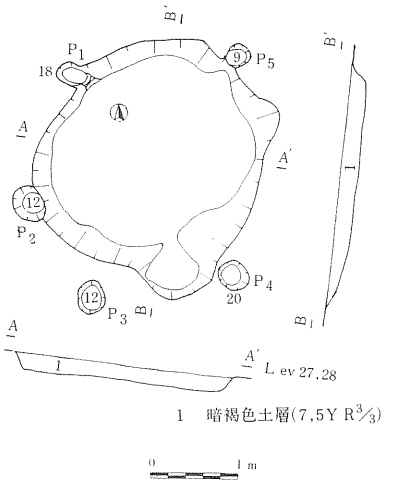
第40図　34号住居跡

②竪穴遺構

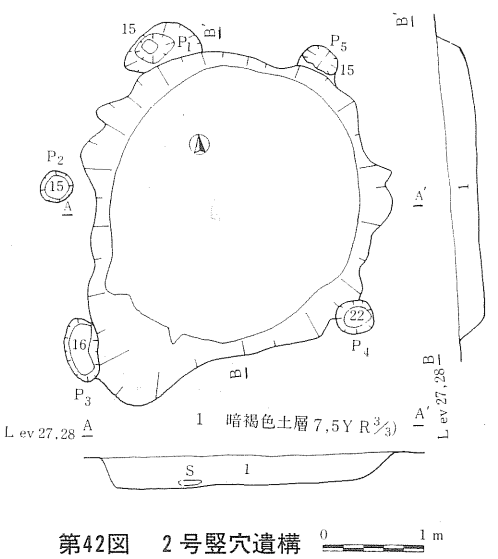
1号竪穴遺構（第41図，図版16）

長軸2.3ｍ，短軸2.0ｍの不整楕円形。床面は５０度で１７cm立ち上がる。床面はかたくしまる。

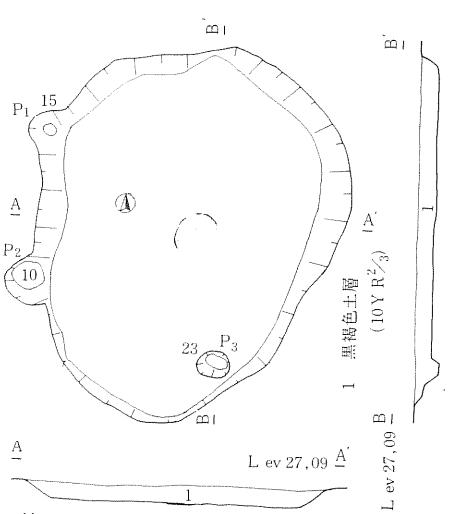
ほぼ中央に焼土あるが，小さく薄い。周囲にＰ１～Ｐ５のピットがめぐる。



第41図　1号竪穴遺構



第42図　2号竪穴遺構



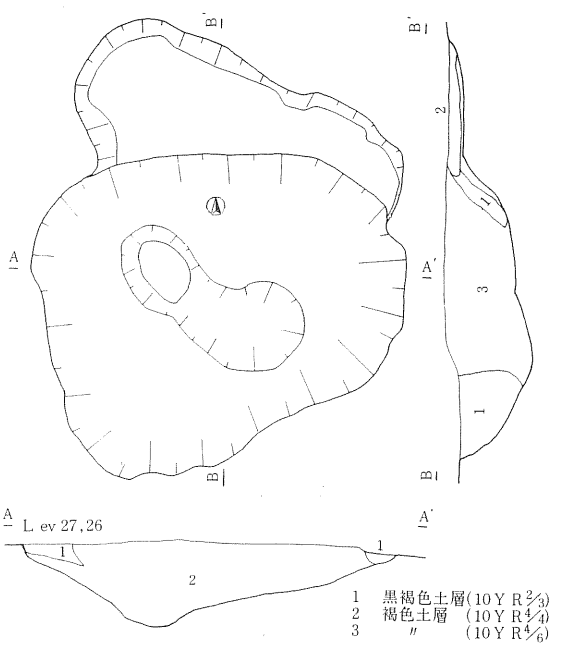
第44図　4号竪穴遺構

2号竪穴遺構（第42図，図版16）

長軸12.8m，短軸2.5mの不整楕円形プラン。壁は30度で26cm立ち上がる，床面はほぼ平坦で，中央に薄い焼土がある。周囲にP1～P5のピットがめぐる。

3.5.11.19号竪穴遺構（第43図）

平面形が1辺2～3mの不整方形を呈する。1.5mほど掘り込まれているが，埋土の状況を観察すると，いったん掘り上げた土をすぐうめもどしたような状況であった。遺物は皆無である。後世の仕事でないだろうか。11号の実測図のみ提示した。



第43図　11号竪穴遺構

4号竪穴遺構（第44図，図版17）

長軸3.5m，短軸2.5mの不整楕円形。20cmほどの深さ。床面は平坦で，ほぼ中央に焼土あり。

6号竪穴遺構（第45図）

直径１ｍほどの円形プラン。６０cmの深さである。

7号竪穴遺構（第46図）

直径0.８ｍの円形プラン。壁は６５度で２８cm立ち上がる。床面平坦。

8号竪穴遺構（第47図）

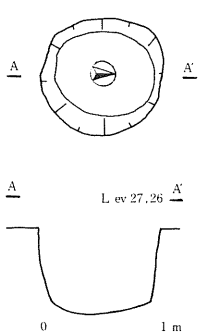
長軸1.２ｍ，短軸0.６ｍの不整楕円形。壁は３０度で８cm立ち上がる。底面はゆるやかに凹む。

9号竪穴遺構（第48図）

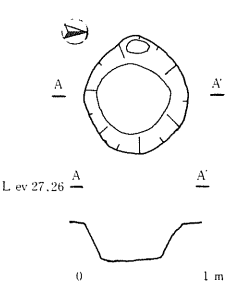
長軸3.１ｍ，短軸2.１０ｍの不整楕円形。壁は２０度で２０cm立ち上がる。平坦な床面中央に薄い焼土が認められる。壁の外周に５個のピット（P_1～P_5）。

10号竪穴遺構（第49図，図版17）

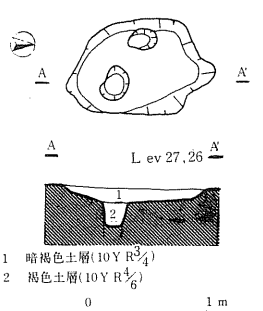
長軸2.３ｍ，短軸1.８４ｍの不整楕円形プラン。深さ１０cm。床面ほぼ平坦，かすかに焼土が認められる。



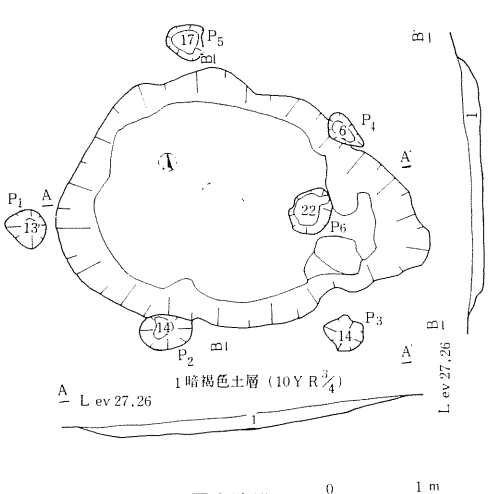
第45図　6号竪穴遺構



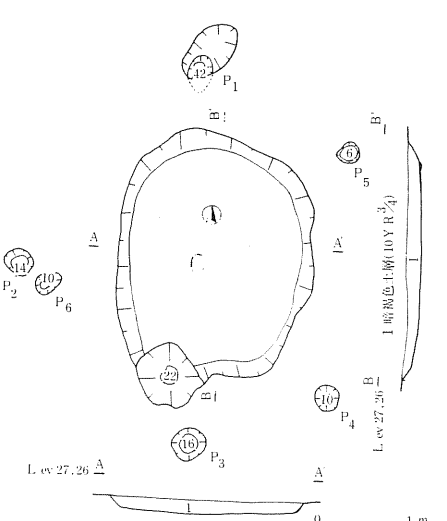
第46図　7号竪穴遺構



第47図　8号竪穴遺構



第48図　9号竪穴遺構



第49図　10号竪穴遺構

12号竪穴遺構（第50図）

長軸1.９ｍ，短軸1.５ｍの不整楕円形プラン。深さ約１０cm。床面中央に薄い焼土あり。壁の外周にＰ１～Ｐ３がめぐる。

13号竪穴遺構（第51図）

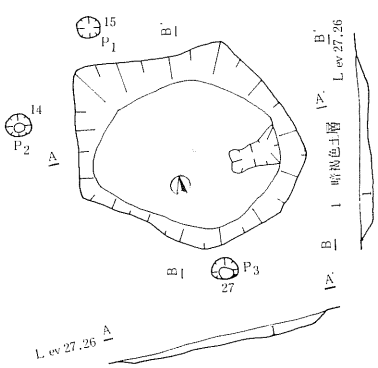
長軸2.０ｍ，短軸1.７ｍの楕円形プラン。深さ１０cm。平坦な床面中央に薄い焼土が認められる。

14号竪穴遺構（第52図）

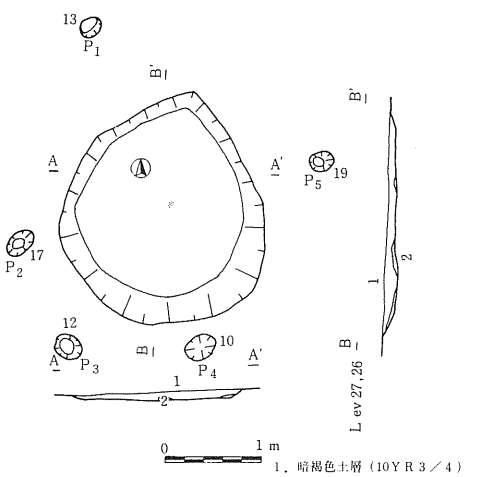
直径１ｍの不整円形プラン。深さ８cm。

15号竪穴遺構（第53図）

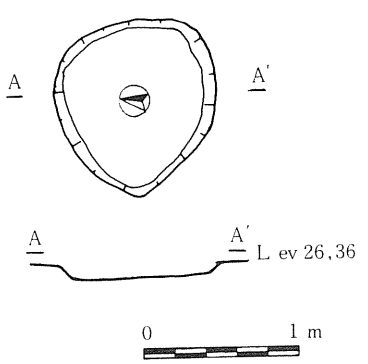
長軸0.９ｍ，短軸0.７ｍの楕円形プラン。深さ１０cm。床面平坦。



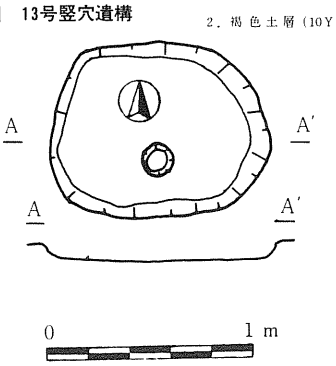
第50図　12号竪穴遺構



第51図　13号竪穴遺構



第52図　14号竪穴遺構



第53図　15号竪穴遺構

16号竪穴遺構（第54図）

直径0．3ｍの円形プラン。深さ１０cm。床面やや起伏あり。

17号竪穴遺構（第55図）

直径0．8ｍの円形プランの深さ56cm。床面は平坦。

18号竪穴遺構（第56図）

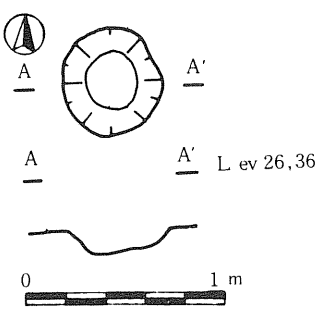
直径８４cmの円形プラン，深さ６０cm。

20号竪穴遺構（第57図）

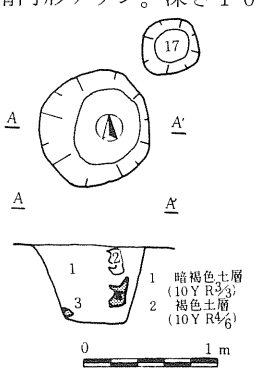
長軸3．6ｍ，短軸3．0ｍの不整楕円形。深さ１０cm，平坦な床面に薄い焼土。

21号竪穴遺構（第58図）

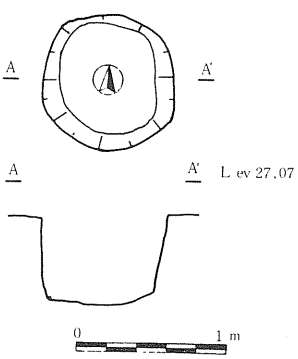
長軸０．７８m，短軸０．７６ｍの楕円形プラン。深さ１０cm。



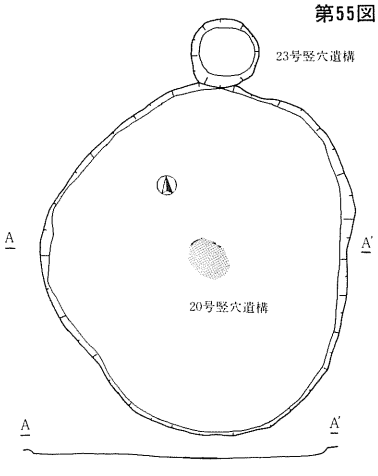
第54図　16号竪穴遺構



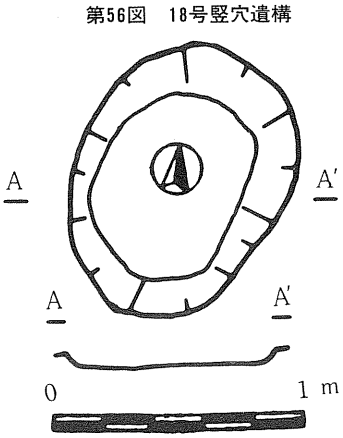
第55図　17号竪穴遺構



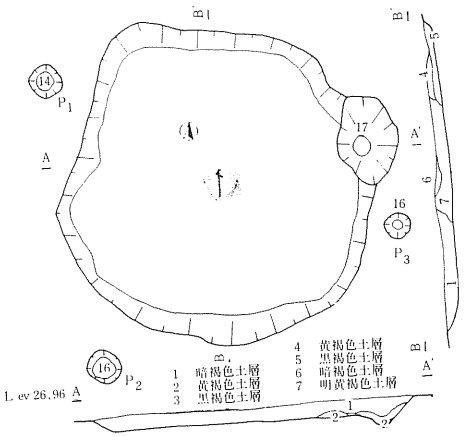
第56図　18号竪穴遺構



第57図　20・23号竪穴遺構



第58図　21号竪穴遺構



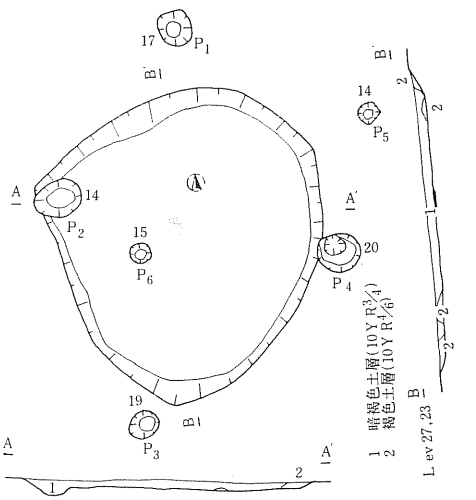
第59図　22号竪穴遺構　0　1 m

22号竪穴遺構（第59図，図版18）

直径3．1ｍの不整円形プラン。深１０cm，床面中央に焼土あり。

23号竪穴遺構（第57図）

直径0．6ｍの円形プラン。深さ１０cm。



第60図　24号竪穴遺構　0　1 m

24号竪穴遺構（第60図）

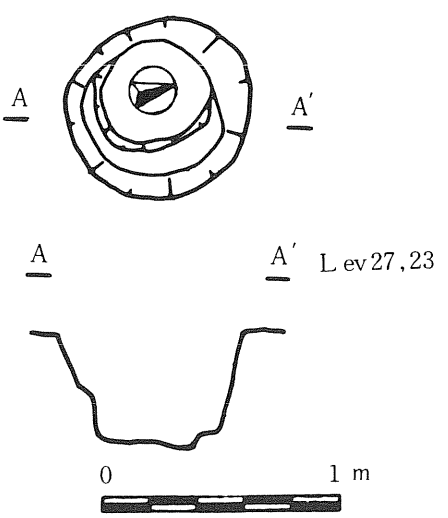
長軸3．1ｍ，短軸2．8ｍの不整楕円形プラン。床面に薄い焼土あり。壁に沿って５個のピットがめぐる。

25号竪穴遺構（第61図）

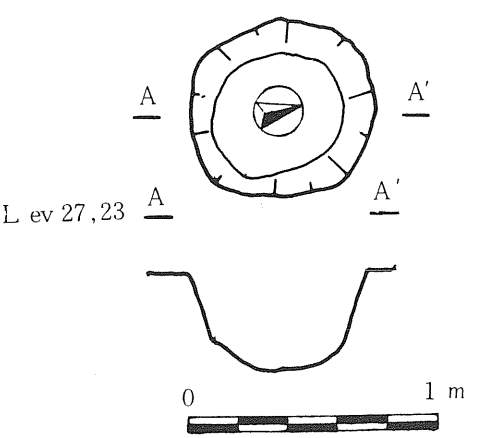
直径0.68mの円形プラン。５０cm の深さ。

26号竪穴遺構（第62）

直径0.78ｍの円形プラン。深さ３８cm。



第61図　25号竪穴遺構



第62図　26号竪穴遺構

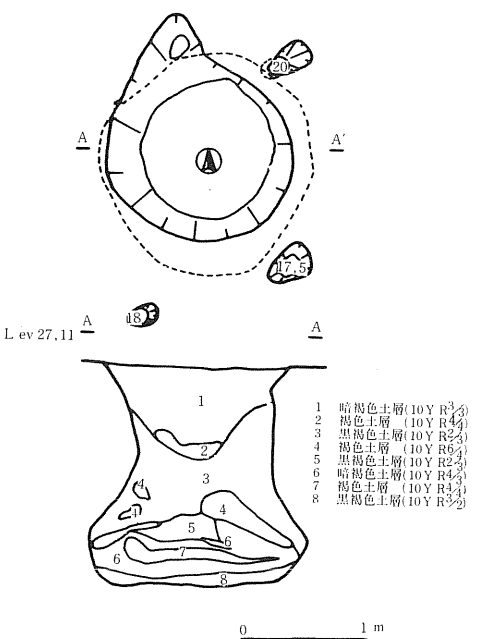
③フラスコ状ピット

1号フラスコ状ピット（第63図，図版18）

口縁部1.32m，口頸部1.02m，底径1.74m，深さ1.08m。砂層まで掘り込んでいる。周辺に6個のピットを有する。

2号フラスコ状ピット（第64図）

口縁部1.50m，口頸部1.03m，底径1.20m，深さ1.74m。砂礫層まで掘り込む。周辺に3個のピット。



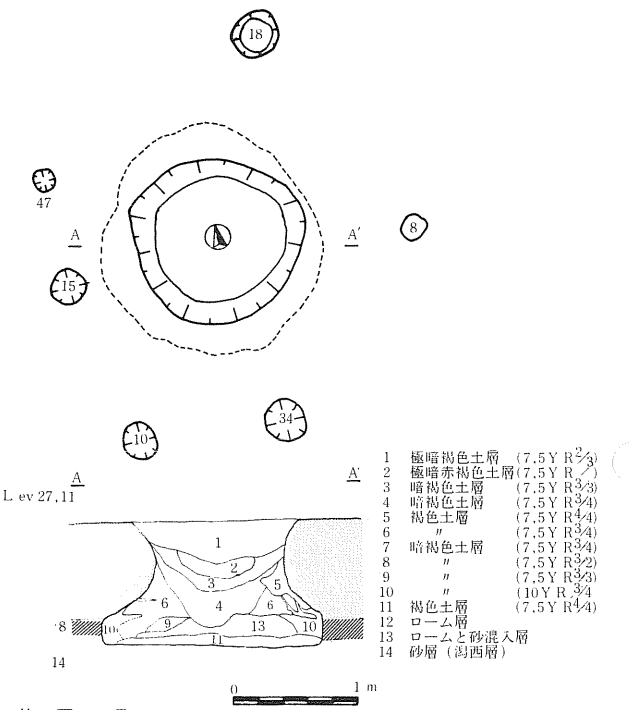
第64国　2号フラスコ状ピット

4号フラスコ状ピット（第34図）

28号住居跡に付設されたものと考えられる。口縁部0.7m，口頸部0.56m，底部0.98m深さ1.27m，砂層まで掘り込んでいる。

5号フラスコ状ピット（第30図）

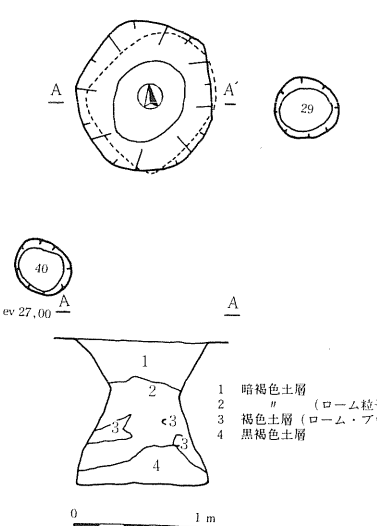
23号住居跡に付設されていたと考えられる。口縁部1.64m，口頸部0.9m，底部2.6m，深さ1.94m。砂層まで掘り込んでいる。



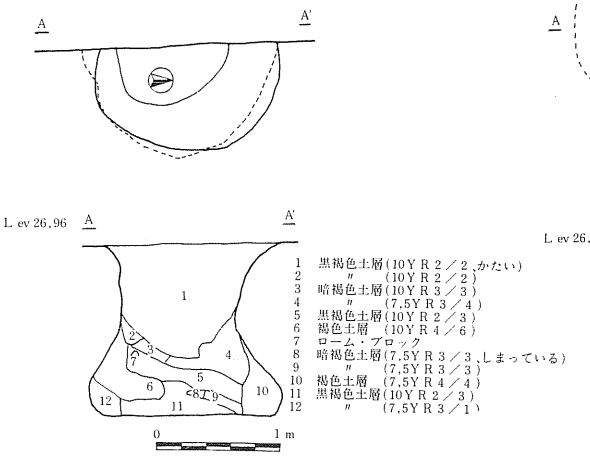
第63図　1号フラスコ状ピット

3号フラスコ状ピット（第65図）

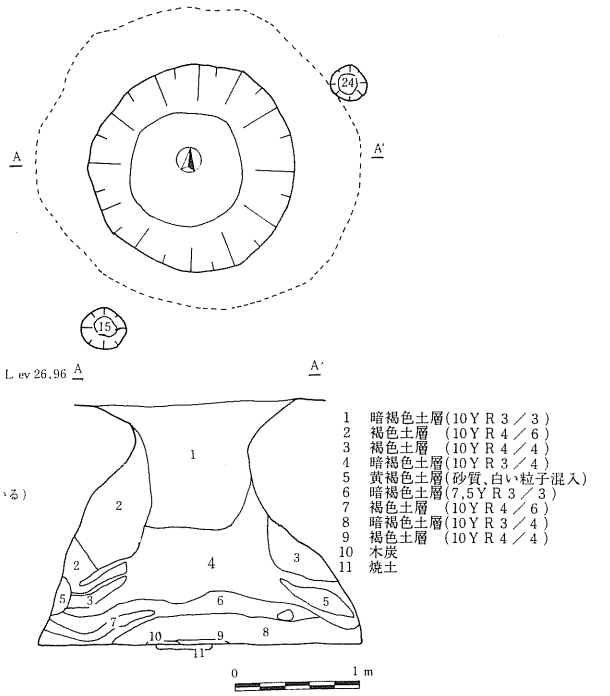
口縁部1.08m。口頸部0.48m,底部1m，深さ1.18m。砂層まで掘り込んでいる。周辺に2個のピット。



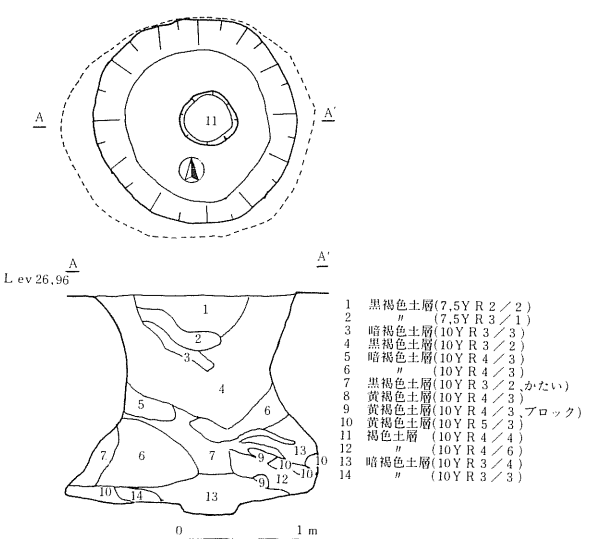
第65図　3号フラスコ状ピット



第66図　6号フラスコ状ピット



第67図　7号フラスコ状ピット



第68図　8号フラスコ状ピット

6号フラスコ状ピット（第66図）

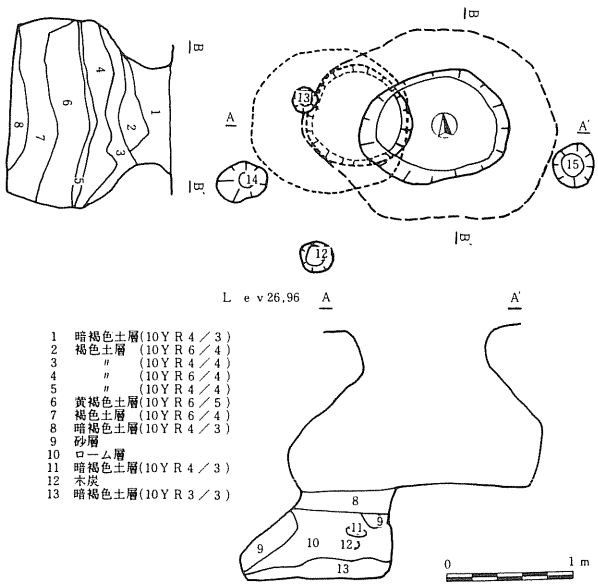
口縁部1.4m，口頸部0.7m，底部1.4m，深さ1.4m。壁の崩壊がみられる。

7号フラスコ状ピット（第67図，図版19）

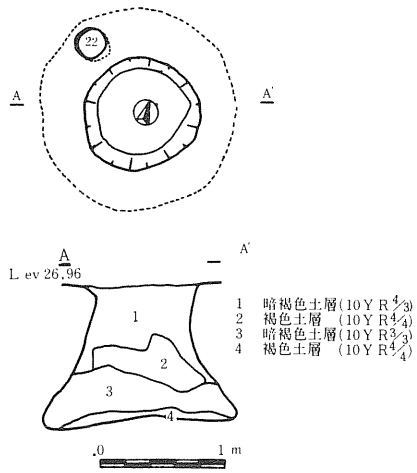
口縁部1.64m，口頸部0.9m底部2.6m深さ1.94m。砂層まで掘り込んでいる。

8号フラスコ状ピット（第68図）

口縁部1.62m，口頸部1.14m，底部2m，深さ1.93mの底部に浅いピットあり。



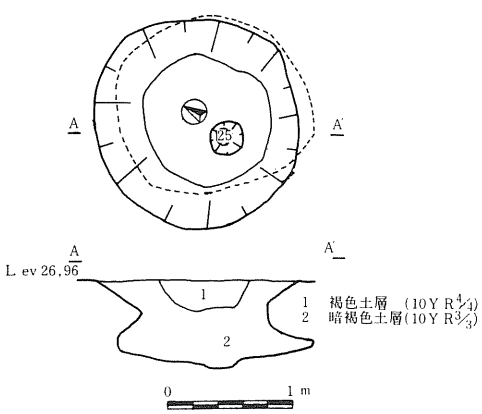
第69図　9号フラスコ状ピット ット



第70図　10号フラスコ状ピット

9号フラスコ状ピット（第68図）

二重構造のフラスコ状ピットである。上段の口縁部0.9m。口頸部0.76m，底部1.4m。深さ1.28m。口縁部は0.86m，口頸部0.78m，底部0.12m，深さ0.72m。周辺に4個のピットあり。



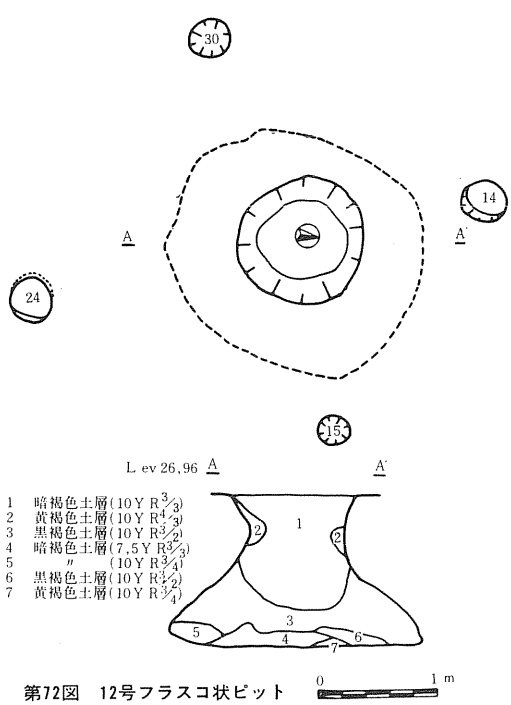
第71図　11号フラスコ状ピット

10号フラスコ状ピット（第70図）

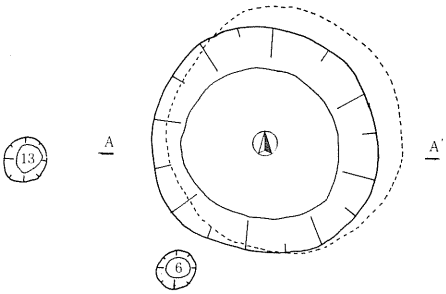
口縁部0.9m，口頸部0.8m，底部1.5m，深さ1.04m。

11号フラスコ状ピット（第71図，図版20）

口縁部1.6m，口頸部1m，底部1.58m，深さ0.66m。底部中央に浅いピットあり。



第72図　12号フラスコ状ピット

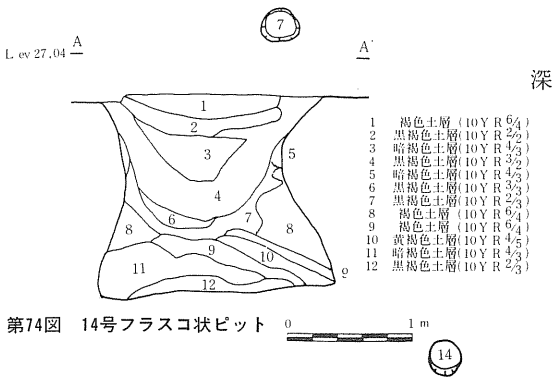


12号フラスコ状ピット（第72図，図版20）

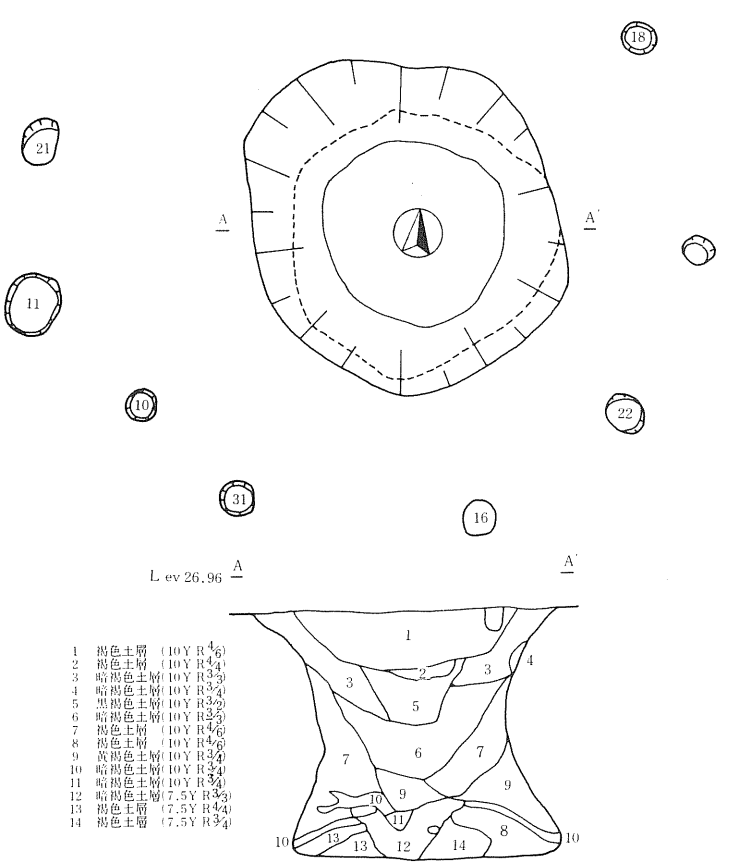
口縁部1．0 6 m，口頸0．8 m，底部2．1 2 m，深さ1．3 m。周辺に4個のピット。

13号フラスコ状ピット（第73図，図版21）

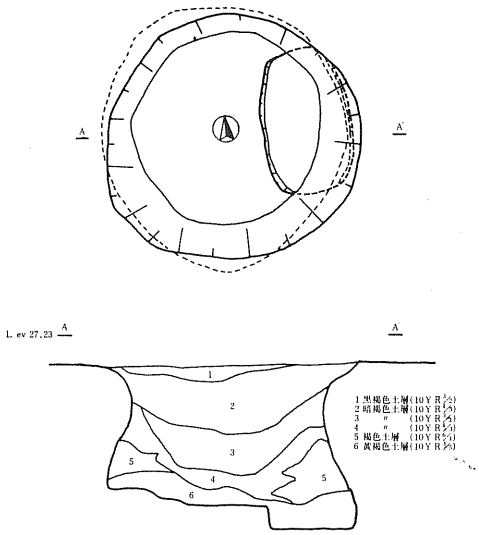
口縁部2．4 6 m，口頸部1．5 2 m，底部2．2 m，深さ2．02 m。周囲に10個の柱穴状ピットを配置。



第74図　14号フラスコ状ピット



第73図　13号フラスコ状ピット



第75図　15号フラスコ状ピット

14号フラスコ状ピット（第74図）

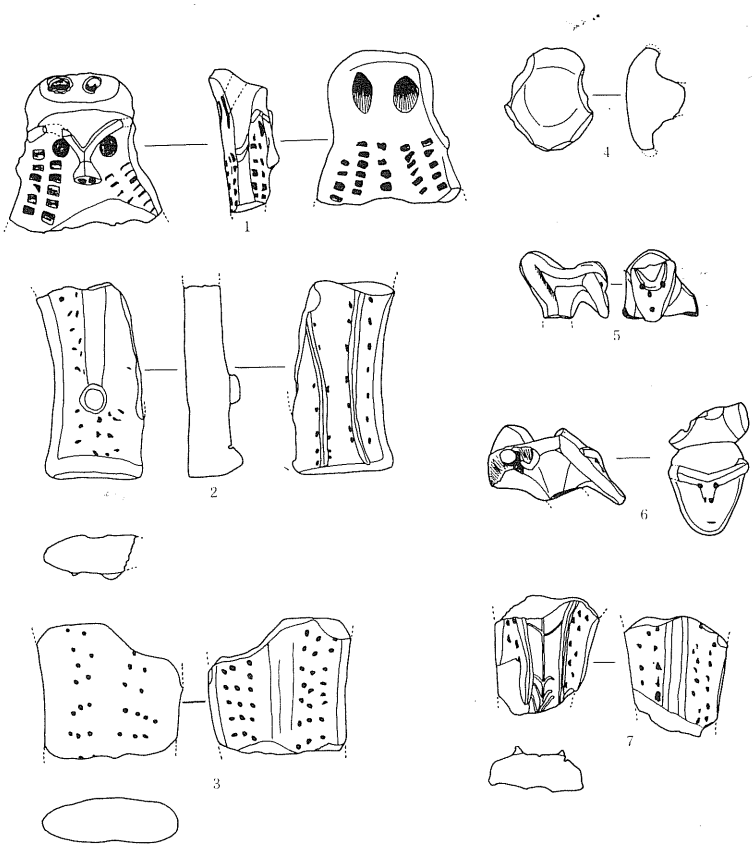
口縁部1.79m，口頸部1.26m，底部1.9m，深さ1.60m。

15号フラスコ状ピット（第75図）

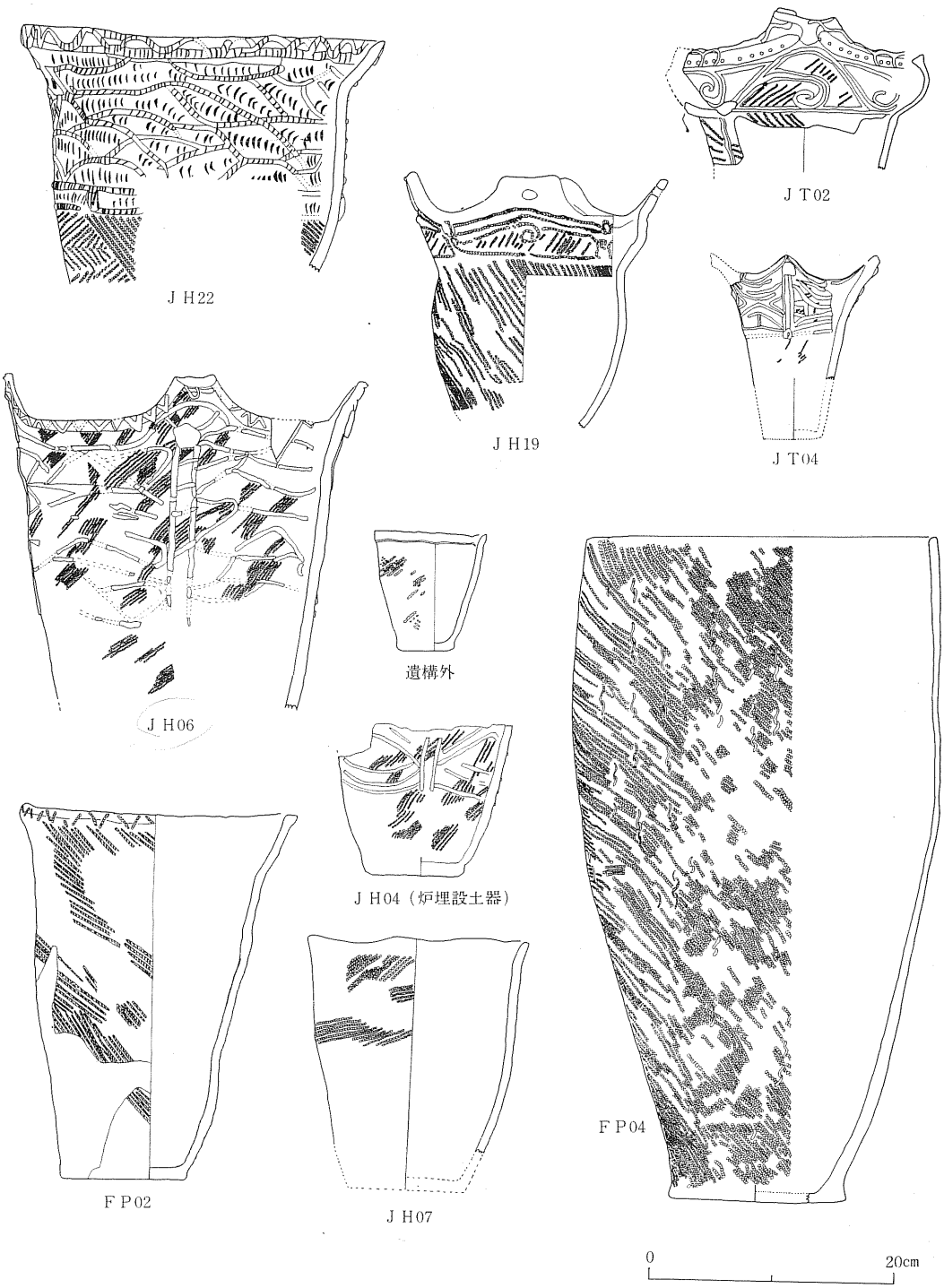
口縁部1.9m，口頸部1.44m，底部1.86m，深さ1.06m，底部東壁に接して楕円形のピットあり。

③　溝状土坑（第24図，図版11）

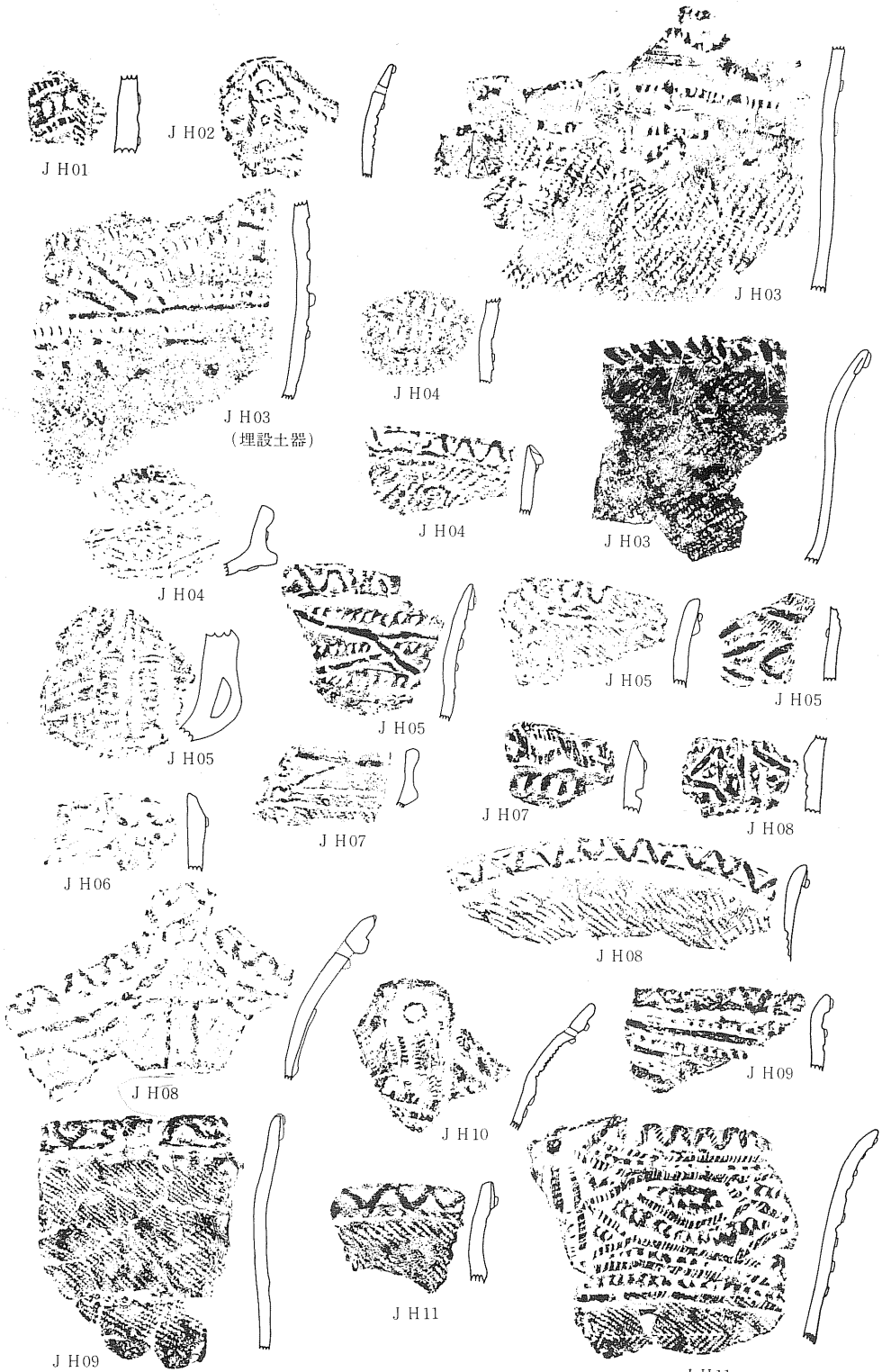
15号住居跡と重複した状態で検出された。溝状土坑のほうが古い。口縁部0.5～0.72m，底部0.2～0.76m，深さ1m，長さ2.94m。地山面を掘り下げ，淡黄色粘土層に達している。



第76図　土製品



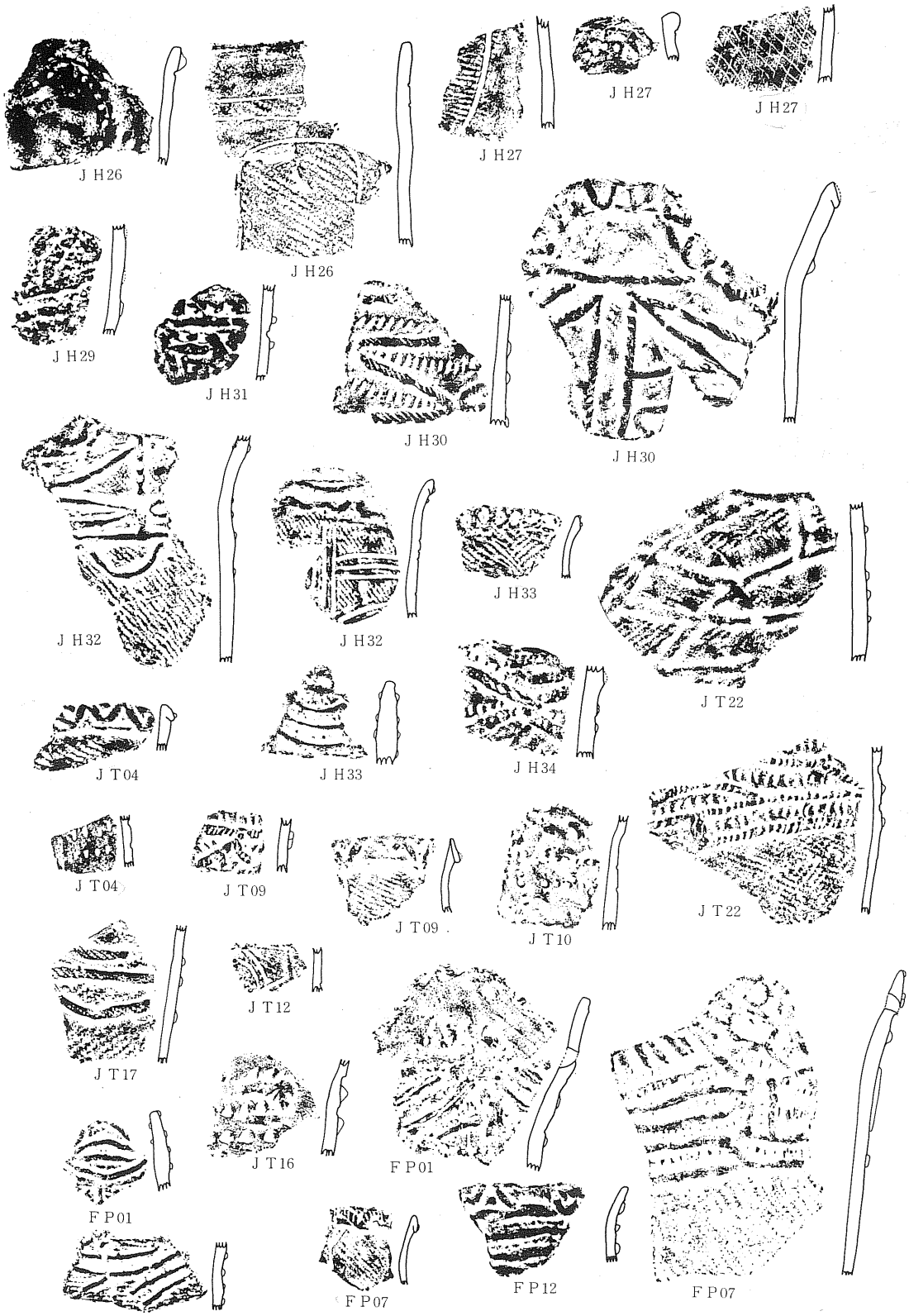
第77図　土器実測図


J H01
J H02
J H03
J H03
(埋設土器)
J H04
J H04
J H03
J H04
J H05
J H05
J H05
J H05
J H07
J H07
J H08
J H06
J H08
J H08
J H09
J H10
J H09
J H11
J H11
0
20cm

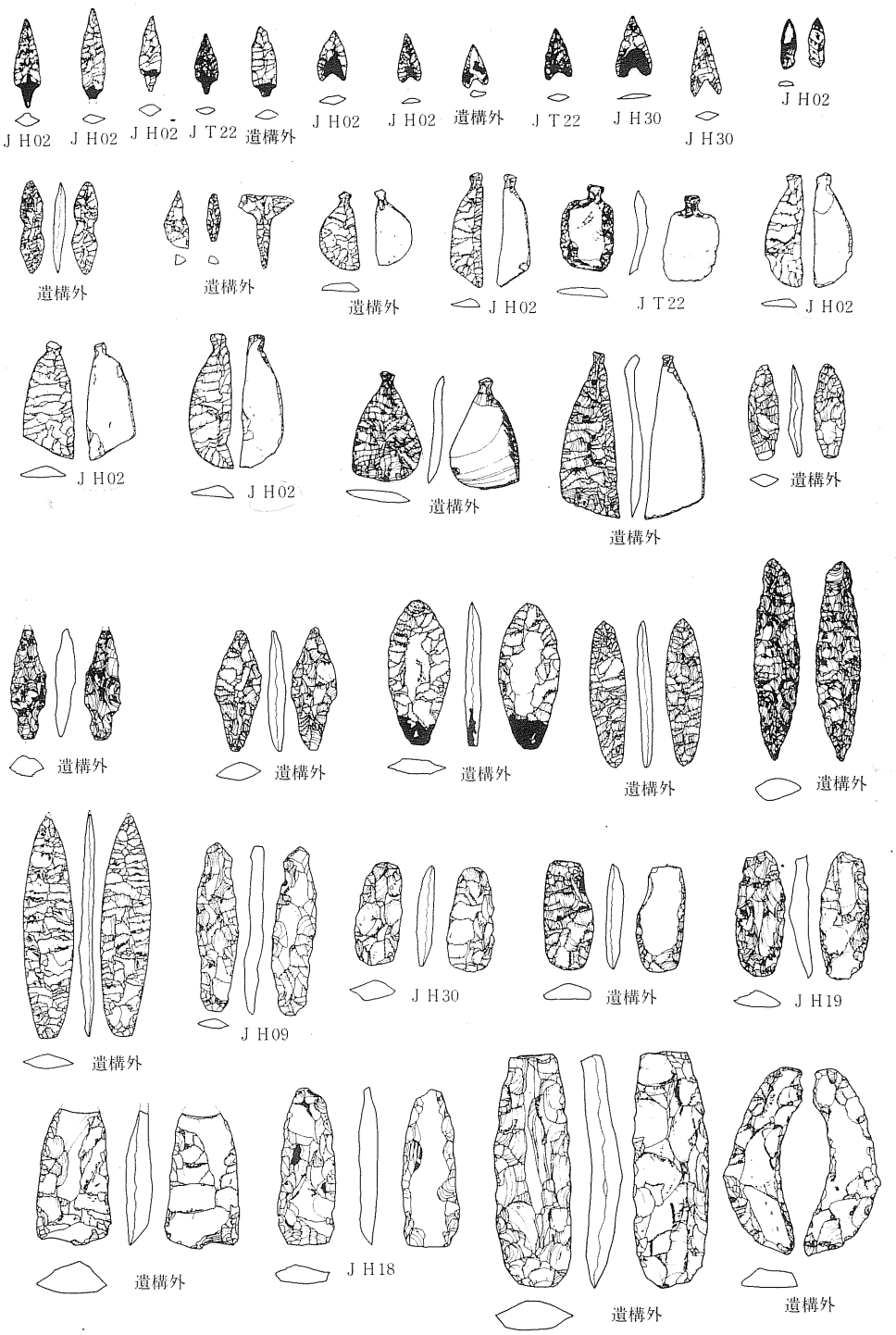
第78図　土器拓影(1)

J H12
J H12
J H15
J H13
J H14
J H15
J H12
J H16
J H15
J H16
J H16
J H16
J H18
J H17
J H17
J H17
J H18
J H18
J H19
J H18
J H18
J H20
J H19
J H21
J H20
J H21
J H21
J H20
J H22
J H25
J H21
J H25
J H25
J H25
0
20cm

第79図　土器拓影(2)

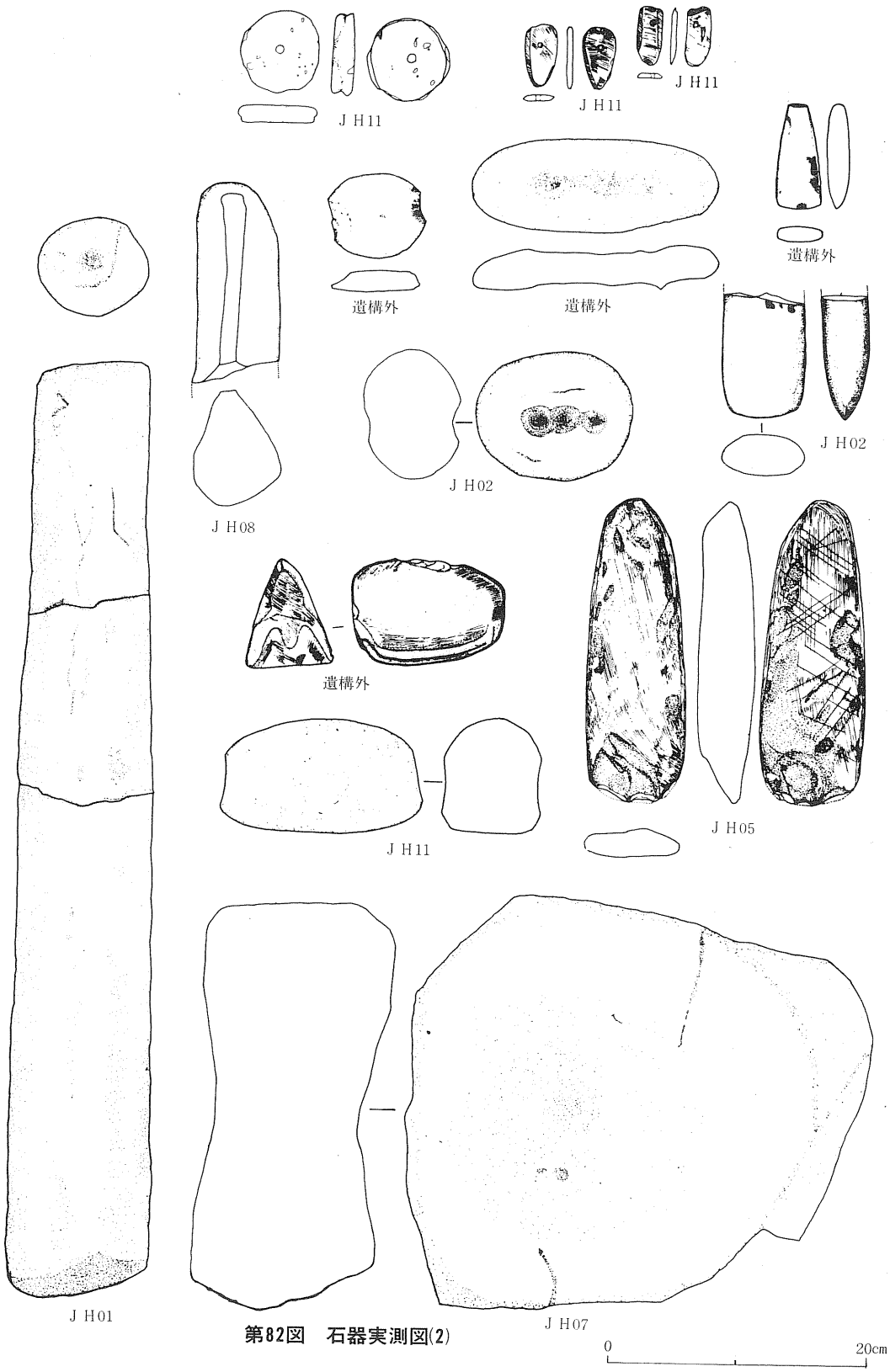

J H26
J H26
J H27
J H27
J H27
J H29
J H31
J H30
J H30
J H32
J H32
J H33
J T22
J T04
J H33
J H34
J T04
J T09
J T09
J T10
J T22
J T12
J T17
J T16
F P01
F P01
F P07
F P12
F P07
F P01
0
20cm

第80図　土器拓影(3)



第81図　石器実測図(1)

0　20cm


J H11
J H11
J H11
遺構外
遺構外
遺構外
J H02
J H02
J H08
遺構外
J H05
J H11
J H01
J H07
0
20cm

第82図　石器実測図(2)

④土　　器

出土土器はすべて破片で，コンテナ１００箱である。そのうち実測可能な資料は１０個体，ほとんど中期の土器で，次のように分類できる。

第一群土器（円筒上層式土器）

第一類土器

口頸部文様帯に絡条体圧痕文のある土器で，この類は５号住居跡から１点出土している。A1式土器である。

第二類土器

箆状工具の刺突による爪形文と，細い粘土紐を器面へ貼付ける文様構成が特徴的である。円筒器形が基本である。１２号住居出土の大破片のように，口縁部が大きな弁状を成すものと、２２号住居出土の復元土器のように平縁を成すものがある。平縁のものは胴部がややふくらむ。Ｃ式である。

第三類土器

６号住居跡，４号竪穴遺構出土の復元土器で代表される土器である。前類とは異なり爪形文が消失し，文様は粘土紐による隆帯のみになる。　Ｄ式である。

第四類土器

沈線によるいわゆる胸骨文の施文された土器である。この類の土器片は非常に少ない。１３，３３号住居から突起や胴部破片が出土しているのみである。　Ｅ式である。

第二群土器（大木式土器）

第一類土器

口頸部に隆帯で囲まれた楕円形の文様圏があり，撚糸文の施文の見られるものである。１２号住居跡出土の１例がこれで，文様圏内の隆起線にそって撚糸文がめぐり，中に撚糸による爪

形文がある。また，文様圏の下部には途中で「V」形に下垂しながら横位にのび，先端が渦巻状をなす撚糸文が施文されている。７ｂ式と一部に上層Ｂ式の特徴の見られる土器である。

第二類　土　　器

浅鉢器形を呈し，口頸部に撚糸や細い粘土紐でもって，渦巻文の施文されている類である。４号住居跡などから少量出土している。８ａ式と考えられる。

第三類　土　　器

隆起線と沈線による渦巻文が特徴的である。４号竪穴遺構から出土している。８ｂ式である。

第四類　土　　器

口縁部から斜めに下垂する隆起帯と，それにそって刺突列点文を施した類の土器である。器壁は一群の土器に比し薄く，比較的焼成も良い。口頸部はやや外反し，口縁部は波状をなすようである。沈線で画された中に縄文が残り，磨消区画の一角に鰭状の隆起の見られる破片が胴部のものと考えられる。本類はＢグループの住居跡埋土とその周辺から主に出土している。大木１０式の新しい仲間と考えられる。（後藤，１９６７）

第三群土器

撚糸文の施文された仲間である。単節の縦の撚糸文のものと，網目様撚糸文に細分できる。

第四群土器

条痕文のある土器である。

第五群土器

沈線によるＳ字状文の見られるもので，１６号住居跡出土のものが代表格である。

県内で第三群の網目様撚糸文土器を出土しているのは，鹿角市大湯黒森山麓の竪穴住居跡などである（奥山１９７１）。岩手県門前貝塚出土の網目様撚糸文土器は後期初頭に位置ずけられており，青森県では後期初頭の大曲一号から出現する。（及川１９７４，鈴木１９７４）以

上のことから第三群土器は後期初頭のものと考えたい。第四群土器についてははっきりしない。第五群土器も後期初期のものと思われる。この三群の土器は少なく，Ｂグループ住居跡群の地区から出土している。

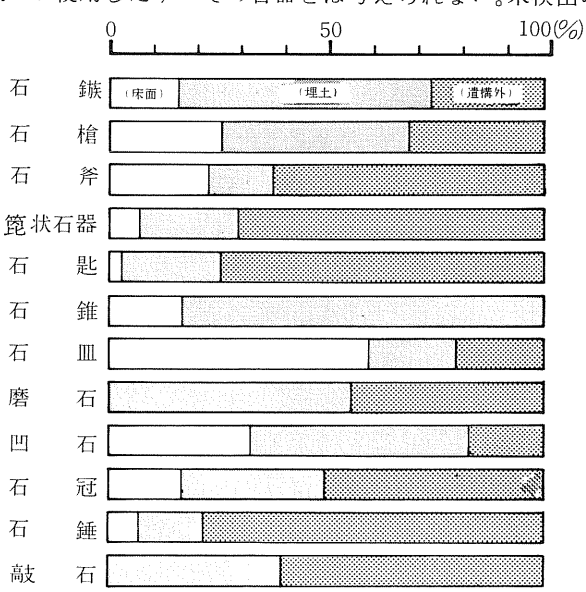
⑤石　　器

調査で検出された石器の総数は，５１５点である。

これら石器の出土地点を遺構内床面，遺構埋土，遺構外に分けて，その割合をみると，遺構床面直上１２％（６３点),遺構埋土３３％（１６９点),遺構外５５％（２８３点）である。埋土層中の石器は，住居跡などの遺構が廃棄されたあとで，投げ込まれたか，流れこんだかしたものであろうから，床面直上の遺物と同一に取扱うことはできない。むしろ，遺構外の遺物と同様な取扱いのほうがいいと考えられる。そうすると，石器の８８％が遺構外に捨てられたことになる。この現象は，石器の使用場所，保管場所などとも関連するものと考えられる。

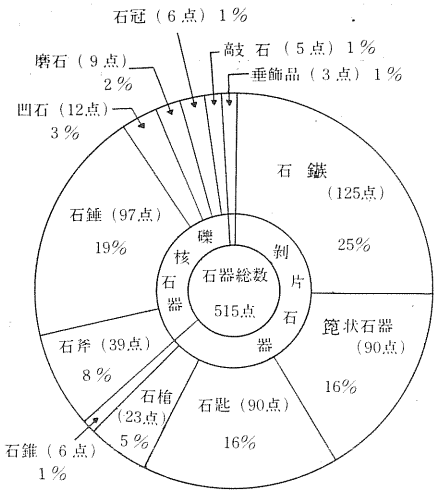
たとえば，表１は，各石器の出土場所別割合を表わしたものであるが，大部分の石器が遺構外に捨てられているなかで，石皿は，床面直上で出土する場合が多い。7号住居跡では，石皿が浅いピットの中に定置されて出土している。石皿が室内で使用され，保管されていたことが理解できる。

また，大部分の石器はＡグループでの出土であり，Ｂグループ出土の石器は稀少である。表２は，石器の種類別の出土割合を表わしている。５００余点の石器が，館下Ｉ遺跡で生活した人々が使用したすべての石器とは考えられない。未検出の石器もあるだろうし，移動のさい持っていった石器もあるだろうし，石鏃のように持ち歩き，遠くに飛んでいった石器もあったであろうからである。しかし，石器組成の概略は知ることができるであろう。特徴的なことは，石鏃，箆状石器，石匙の多いことと，石錘の多いことである。



第１表　石器の出土場所別割合

つぎに，それぞれの石器について，①形態，②製作技術の特徴，③石材，④使用痕（摩耗痕，線状痕，欠損部位，光沢，付着物），⑤共伴する土器（遺構内における共伴）などをまとめてみたい。なお，使用痕の観察には双眼実



第2表　石器種類別の出土割合

体顕微鏡（２０倍，４０倍）を使用した。

石鏃

石鏃は１２５点出土している。これを形態分類してみた。

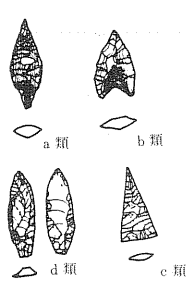
ａ類）凸基有茎式石鏃，７５点（６１％），長さは，2.7～5.2cm，重さ1.7～7.5ｇであるが，長さ３～５cm，重さ２～４ｇのものが多い。

ｂ類）凹基無茎式石鏃，３８点（３１％）長さ1.6～3.7cm，重さ0.4～4.9ｇであるが，長さ２～３cm，重さ１～２ｇに集中する。

ｃ類）平基無茎式石鏃，８点（６％）長さ1.8～3.8cm，重0.4～2.8ｇ。

ｄ類）「石刃鏃」に類似するので石鏃に分類した。３点（２％）長さ3.0～4.9cm，重さ１～2.6ｇ。

ａ～ｃ類は，ていねいな二次加工が施され，とりわけｃ類は精巧である。ｄ類は縦長の剥片の先端部を尖らしている。二次加工は背面の周縁に施されている。「石刃鏃」は，主要剥離面に二次加工を施している（芹沢，１９６０），ｄ類と「石刃鏃」との相違点である。



第83図　石鏃の形態分類

石材は頁岩が１０５点（８５％），鉄石英８点，黒曜石７点，凝灰岩２点，石英２点である。ｃ類は全部鉄石英であり，黒曜石の７点はｂ類である。

基部にアスファルトの付着した石鏃が３９点ある。ａ類２６点，ｂ類１３点であり，ａ，ｂ類のそれぞれの３４％である。ｃ，ｄ類にはアスファルトの付着はみられなかった。アスファルトは石鏃と弓柄との接着に使用されたものであろう。ａ類には，１点だけであったが基部と先端部両方にアスファルトが付着したものがあり，ａ類が効率のよい石鏃であることが推察される。

共伴する土器は，ａ，ｂ類は円筒上層Ｃ，Ｄ式，大木１０式土器と，ｃ，ｄ類は円筒上層Ｃ，Ｄ式土器にのみ共伴する。

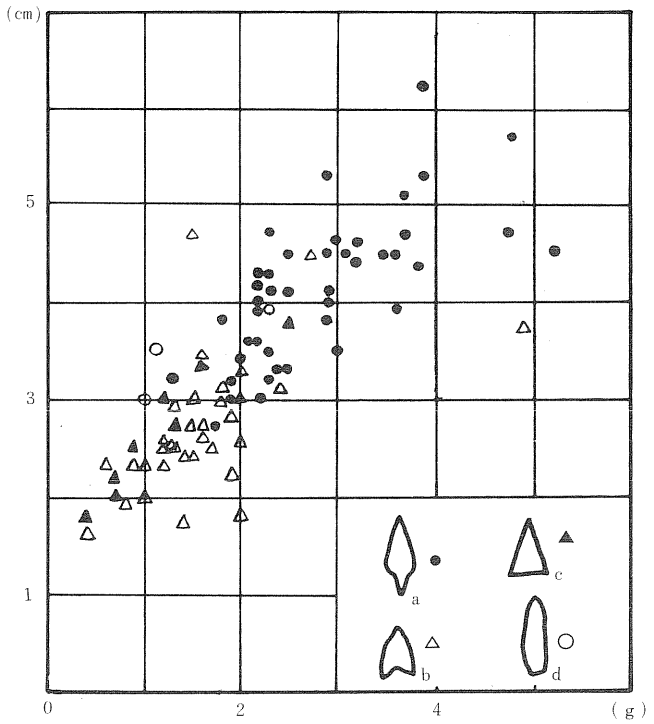
石槍　２３点出土，４類に形態分類した。

ａ類）尖基式石槍。8点（35％）長さ5.2～13cm，重さ7.5～42.5ｇ。横断面は凸レンズ状を呈する。

ｂ類）平・円基式石槍。８点（３５％），長さ5.6～14.3cm。重さ１０～３７ｇ。横断面は凸レンズ状を呈する。

ｃ類）尖基式石槍であるが，ａ類より幅広である。１点出土。長さ9.7cm，重さ43.5ｇ。横断面は扁平な六角形を呈する。重さ１５～17.5ｇ。

d類）有茎尖頭器。２点出土。長さ7.２～８cm　横断面菱形を呈する。ａ類，ｂ類には，精巧な押圧剥離を両面に施している石器が多い。Ｃ類は両面に大剥離を残し，周縁の両面に二次加工が施されている。ｄ類は前者にくらべあらいつくりで，ステップ，フレーキングも用いられている。

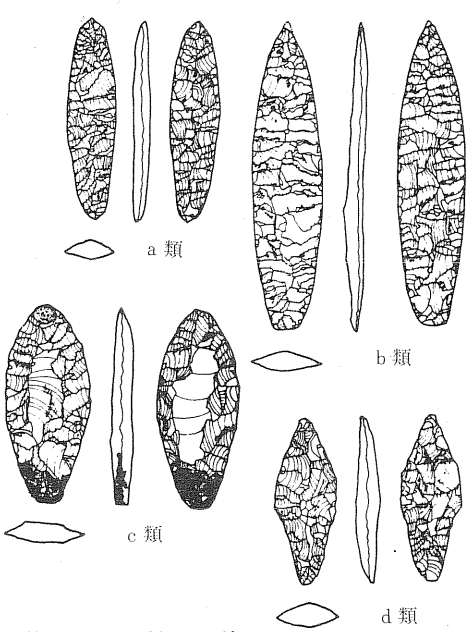


第84図　石鏃の長さと重量（完形品のみ）

石材は頁岩２１点，石英２点である。

Ｃ類の石槍の基部にはアスファルトが付着している。また，中央部で色調が，わずかに変化している。このアスファルトと色調の変化は着柄に関係あるものだろう。長軸と平行に着柄されていたものと考えられる。

ａ類は円筒上層Ｃ，Ｄ式，大木１０式土器と共伴し，ｃ～ｄ類は円筒上層Ｃ，Ｄ式土器のみと共伴する。



第85図　石槍の形態分類

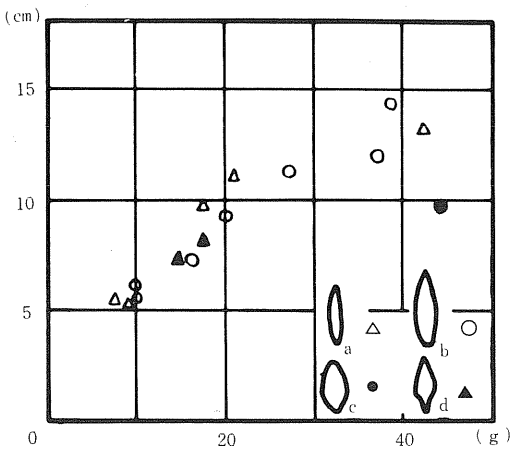
石斧

石斧は３９点出土。５類に形態分類できる。

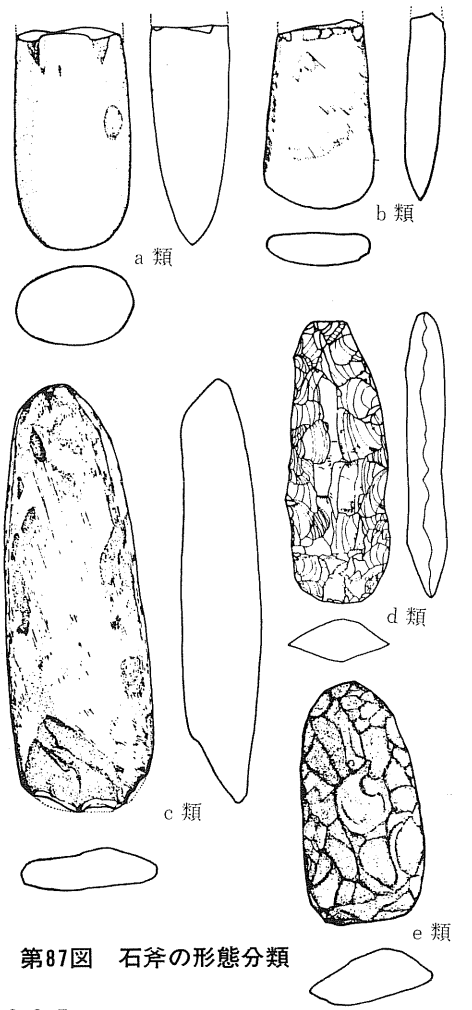
ａ類）磨製石斧。２５点（６４％）。分厚い楕円形の横断面を呈する。完形品はなく，胴部中央付近で欠損している。刃縁は円刃をなし，斧の中軸線で左右相称の両刃である。

ｂ類）磨製石斧。７点（１８％）。刃部がもっとも広く，基部が狭くなる。横断面は，扁平な楕円形を呈する。中軸線で左右非相称の片刃である。長さ約１０cm，重さ約１００ｇ。

ｃ類）磨製石斧。２点（５％）。大型の石斧で長さ１８～19.５cm，最大幅５～６cm，厚さ２～



第86図　石槍の長さと重量（完形品のみ）



第87図　石斧の形態分類

3.5cm，重さ３１０～７３５ｇ。刃部は丸刃を呈しやや片刃ぎみである。

ｄ類）打製石斧。２点（５％）。両面加工され篦状石器に近似するが，大型であり石斧に分類した。刃縁は円刃を呈し，両刃である。横断面は凸レンズ状を呈する。側縁は鋸刃状をなす。長さ１３～14.5cm，幅約4.5cm，厚さ約2cm，重さ１４２～１７６ｇ。

ｅ類）打製石斧。３点出土。刃縁は円刃をたし，片刃である。横断面は扁平な蒲鉾状である。長さ１１～１４cm，幅5.5～7cm，厚さ約2cm，重さ１８６～３２５ｇ。

ａ・ｃ類は敲製によると思われる。ｂ類のなかには，擦切技法で製作されたと考えられる痕跡を有する石斧が１点あり，ｂ類の製作技法を理解できる資料である。ｄ類は縦長の分厚い剝片の両面をフリーフレーキング，ステップフレーキングで仕上げている。

ｅ類は礫の表皮を１面に残し，地面を粗く打欠き，仕上げている。

石材は泥岩１１点，砂岩７点，安山岩６点，玄武岩２点，頁岩２点，変朽安山岩２点，玲岩１点，粘板岩１点である。ａ類は安山岩，ｂ・ｃ類は泥岩，玄武岩，ｂ類は頁岩，ｅ類は砂岩が多く使用されている。

ａ類のほとんどは胴部で欠損している。これは，使用のさい折れたもので，着柄に関係するものと考えられる。ｂ類の１点に線状の使用痕が観察された。この石斧は，弱凸強凸片刃であるが，両面に刃縁に直交する線状痕が認められた。アッズ的使用が推察される（セミョーノフ・田中訳：１９６８）。他の石器については，アックス的使用か，アッズ的使用か判断ができかねた。た

だ，c類は砂岩で軟かく，樹木を切る，削るなどの機能をはたすことはできないだろう。他の用途を考えねばならない。

石斧の大部分が，円筒上層C・D式に共伴する。

箆状石器

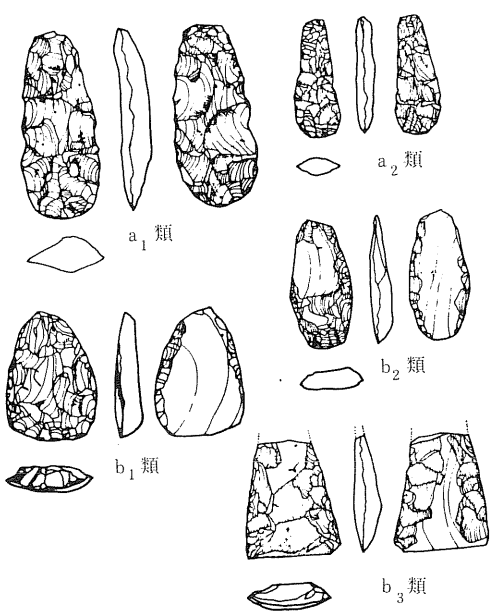
９０点出土した。５類に形態分類してみた。

a₁類）４０点（４５％）両面加工で，横断面が凸レンズ形を呈する。刃縁は丸刃をなし，両刃である。幅は基部に向ってやや狭くなる。長さ６～１０cm，最大幅2.５cm～3.５cm，重さ２５～５０g。

a₂類）３点（３％）。a類より小型である。5.３～5.７cm，最大幅約２cm，重さ２０～１７g。

b₁類）４１点（４６％)。ずんぐりした形をなし，刃部が広く，基部は狭くなる。横断面は蒲鉾状を呈する。長さ５～６cm，最大幅４cm，重さ２０～３０gのものが一般的である。

b₂類）２点。b₁類にくらべると，ずんぐりしたところはなく，基部と刃部の幅がほぼ同じである。重さはa₁類とほぼ似ている。幅は約３cm。



第88図　箆状石器の形態分類

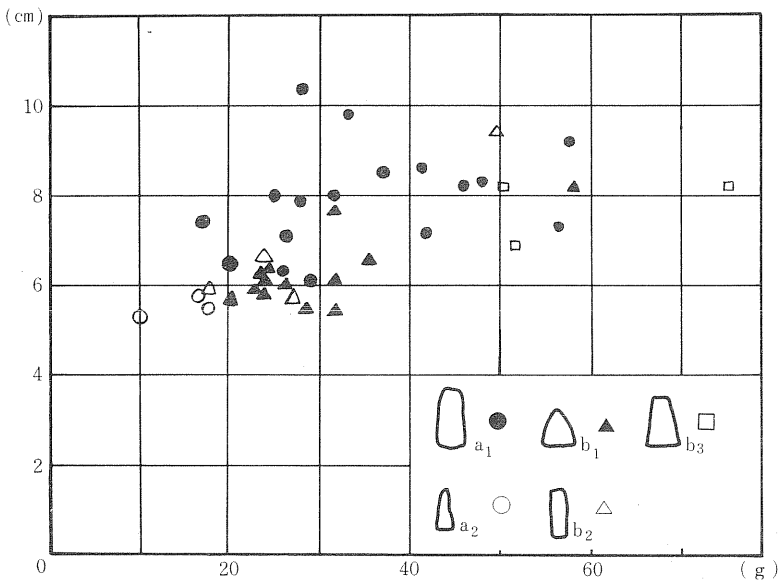
b₃類）４点出土。平面形は台形を呈し，刃縁は直刃をなし，片刃を呈する。b₁，b₂類よりやや大型である。

a₁，a₂類は分厚い縦長の剥片の両面に，フリーフレーキング，ステップフレーキングによる二次加工を施して仕上げている。基部に打面を残すものもある。側縁は鋸刃状を呈する。b₁～b₃は横長の剥片を使用し，背面は全面加工，主要剥離面は両側縁にのみ加工が施されている。b₃の刃部は一次加工のさいの鋭い縁辺である。

石材は，８４点（９３％）が頁岩，泥岩が２点，石英が４点である。

b₁，b₃類の７点には使用痕（光沢，線状痕）が認められた。使用痕は主要剥離面の刃部にのみに認められる。光沢は刃縁から１cmほどに広がり，明るく，輝きがある。また，光沢面には，刃縁に直交する線状痕が認められる。また，縁には刃こぼれが認められるものもある。b₁類には胴部で欠損したものが１７点もあり，すべてが刃縁に平行に折れている。光沢（キーリー，１９７８)，使用痕（セミヨーノフ，田中訳，１９６８)，欠損状況などから考えて，b₁～b₃は着柄して，アッズ的に使用したものと推察される。なお，a₁類の基部，または

胴部にアスファルトの付着したものが３点ある。着柄の可能性をうかがわせる。先端部の摩滅したものが１点ある。ａ１，ａ２類が着柄して使用したものとすれば，土掘り具を想定したいのであるが，積極的な根拠はない。



第89図　箆状石器の長さと重量（完形品のみ）

ａ１．ｂ１類は，円筒上層Ｃ，Ｄ式と大木１０式土器に共伴し，ａ２，ｂ２，ｂ３は円筒上層Ｃ，Ｄ式土器に共伴する。

石匙

９０点出土，６類に分類した。

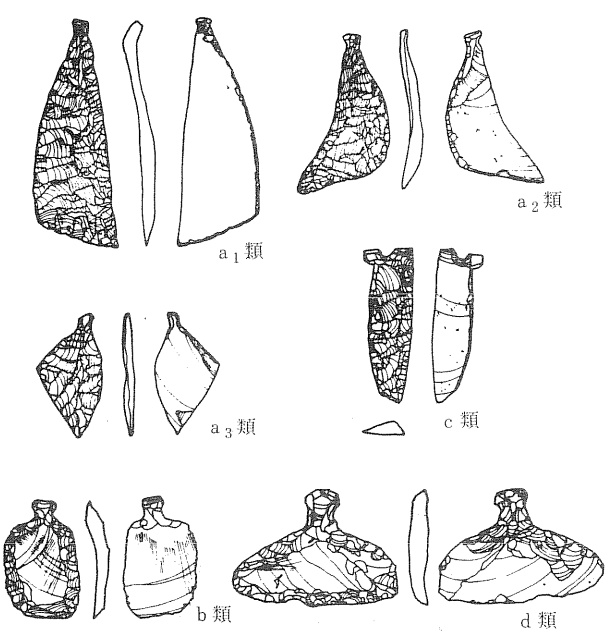
a1類）縦形の石匙。８１点（８９％）。先端部が幅広くなり，平面形は切出し型ナイフ状を呈する。長さ５～１０cm，重さ９～２０ｇ。

ａ２類）１点出土。光端部がａ１類とは逆方向に作出されたものである。

a3類）体部が短かく，つまみ部に対する側縁の長いもの。小型であり，長さ５～６cm，重さ６ｇ前後のもの。

ｂ類）４点出土。長方形の体部につまみ部を中軸線上に作出したもの。長さ約５cm，重さ約９ｇ。

Ｃ類）１点出土。体部はａ１類に類似するが，つまみ部が体部と直角に作出されている。



第90図　石匙の形態分類

d類）１点出土。横形を呈し，刃部に直交するように，つまみ部を作出している。

ａ１～ａ３・ｃ類は縦長の剝片を使用し，背面に精巧な押圧剝離を施している。　また，主

要剝離面の一側縁から先端部にかけて細加工を施している。この細加工を施した側縁に摩耗痕が認められ，刃部として使用したものと理解される。b類は縦長剝片の背面周縁に二次加工が施されている。d類は横長の剝片を使用している。

石材は１００％頁岩である。

a_1，a_3，c類は，右手人差指の第一関節を鎬にあてると使用しやすい。a_2類は左ききの人が使用する場合有効である。

a_1～d類は円筒上層C，D式土器と，a_1類の数点が大木１０式土器と共伴した。

石錐

６点出土した。２類に形態分類できる。

a類）つまみ部と錐部からなるもの。５点出土。錐部の横断面は菱形を呈する。

b類）錐部のみのもの，１点出土。横断面は菱形を呈する。

石材はいずれも頁岩。使用痕は観察できなかった。

すべて，円筒上層C・D式土器と共伴した。

石皿

１０点出土した。６類に形態分類できた。

a_1類）凹部の平面形が円形を呈する。６点出土。６点のうち，１点は両面使用である。

a_2類）凹部の平面形が楕円形を呈する。１点出土。

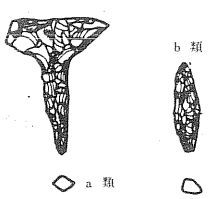
b類）凹部の平面形がU字状を呈する。１点出土。

c類）周縁に縁を有し，裏面に４個の凸状の脚を有する。１点出土。

d類）周縁に縁を有し，裏面に板状の脚を有する。１点出土。

石材は安山岩６点，凝灰岩４点。

a_1～b類は円筒上層C，D式土器と，c，d類は大木１０式土器と共伴する。



第91図　石錐の形態分類

凹石

１２個出土。ほかに石錘と兼用か転用かされたものもある。凹部の断面が円錐形をなすものと，不規則をなすものとがある。また両面に凹部のあるもの，片面のみのもの，凹部が１個のもの数個のものなどがある。

石材は凝灰岩７個，安山岩５個，いずれも片手で持てるくらいの重さの河原石を使用している。凹部が円錐形を呈するものは，細い木か骨のパンチを上から押圧しながら回転（非連続往復回転であろう）させ使用したものであろう。凹部の不規則なものは，細い木か骨のパンチを上から叩いたためできたものであろう。

円筒上層C・D式土器とも大木１０式土器とも共伴している。

石錘

９７個出土している。

河原石の長軸の両端を打ち欠き，切目部を作出している。

漁網に使用する石器と考えられている（渡辺，１９７３）。

遺跡の下を米代川が流れているので，漁業がさかんに行なわれていたものと考えられる。

４０ｇ～１０００ｇ。５００ｇ前後のものが多い。

石冠

６点出土している。

ａ類）４点出土。体部に凹部が一周する。底面は摩滅している。北海道式石冠（大場，１９６１）と称されている。石材は花崗岩。７００～９７０ｇ。

ｂ類）２点出土。縦断面三角形を呈する。一側面には凹部がある。底面は摩滅している。石材は凝灰岩。重さ３７５～４２２ｇで片手でもつには手ごろである。ａ類の使用面は短軸方向に傾斜する。

石皿とセットにして使用したものでないだろうか。

磨石

安山岩の河原石の一面を摩面に使用しているものが大部分である。

敲石

棒状の河原石の両端を使用しているものが多い。石材は安山岩。

石棒

安山岩。流紋岩の石材を使用。一端の表面に凹部を作っている。いずれも３～数分割されている。加熱を受けたものもある。破片が住居跡の床面にころがっていたり，フラスコ状ピットの中に投げこまれたり，遺構外にころがっていたり，奇異な出土状態を示す。

⑥　土・石製品

土偶（第76図）

１・３は１３号住居跡出土で，板状を呈する。円筒土器に伴うものである。1は頭部に２孔があり爪形の刺突文が見られる。２は１８号住居跡出土で，３はその傍からの出土である。両者とも刺突文があり，２にはボタン状の突起と背面に二本の隆線がある。５，６とも１８号住居跡のあるＢグループ地区で出土したものである。

スタンプ状土製品（第76図）

２４号住居跡出土で，きのこ状を呈する。傘状の表面はすべすべしている。

滑車形耳飾（第81図）

１１号住居跡出土品。石材は茶褐色を呈する火山礫凝灰岩で，最大径5.4㎝，円周上に凹の見られる不整円で，中央に径５㎜の一孔がある。

垂飾品（第81図）

耳飾と同じ１１号住居跡出土品。石材は粘板岩。

Ⅳ　小　　結

1　竪穴住居跡

館下Ⅰ遺跡から発見された住居跡は総数３４棟である。うち１～１４，２９～３４号の２０棟は段丘の西部に，残りの１５～２８号の１４棟は約５０ｍ北東の段丘中央部北東縁ぞいに存在する。前者をＡグループ，後者をＢグループと呼ぶ。

〔Ａグループの住居跡〕

このグループの住居には次のような共通点が認められる。

① 平面形は楕円形が多い。

② 長軸６ｍ～１０ｍの大型のものが過半を占める。

③ 主柱穴は住居内にあって，中軸線に並列相対して４，６，８本存在する。

④ 炉はほとんど地床炉である。

⑤ 大型の住居には特殊ピットを伴うものが多い。

⑥ 住居の長軸はＮ－Ｓを指すものと，Ｅ－Ｗを指すものとがある。

⑦ 主柱穴の内側の床面がほかに比べて堅い。

大型の住居には炉が２基あるものもあり，いずれも，中軸線の附近にある。特殊ピットは径５０～６０㎝，深さも同じ位の大きさで，すり鉢状に落ちこんでいる。そして掘りあげたロームでもって幅，高さとも10㎝前後のへりをまわしている。炉使用の際に出来る木炭や灰の捨場とも言われているが，そのような埋土の堆積状態ではなかった。性格は不明である。

Ａグループの住居は間隔を置いて構築され切り合いが無い。床面や炉から出土している土器から１２号住居が大木７ｂ式もしくは円筒上層Ｂ式期１，２，３，５，１１号住居が円筒上層Ｃ式期，４号住居は炉の埋設土器からＤ式期と考えられる。ただ，４号住居の埋土から炉埋設Ｄ式土器より古いＣ式土器が出土していること，このグループの住居の埋土からＣ式Ｄ式土器が一括出土することが多い事実から，Ｃ式Ｄ式土器を同時に使用した可能性も考えられる。集落跡の調査が進み，廃棄された住居跡に土器を残置，投棄する行為のパターンが論考されている(小林１９７４)。Ａグループのパターンは Ｃ１に近いと思われる。以上のことなどから，Ａグループの住居は何期か考えられるが，現段階では確言できない。

〔Ｂグループの住居〕

円筒上層Ｃ式期の１９，２５号住居を除いた残り１３棟は中期末大木１０式期のものと考え

られる。

① 住居の平面形は円もしくは不整円形が多い。

② 床面のロームへの掘り込みが浅い。

③ 主柱穴ははっきりしないものが多いが，検出ピットの分布から壁に沿うものと考えられる。

④ 炉は石囲炉で，住居の中心から北東にずれているものが多い。

Ｂグループの住居には以上の傾向が認められた。

石囲炉の構築は

① 最初に浅く炉の大きさにロームを掘り込む。

② 次に石の大きさによって，並べる石の下を少し掘りこむ。(地上に出ている石のレベルが同じ位になるように)

③ 石を並べる。

の手順をとる。１６号住居の炉の石は抜き取られてなかった。廃棄の際に転用されたものと考えられる。

Ｂグループの住居は，１９・２５号住居の二時期，炉の形態と住居の切り合い関係から，小型の２３号住居と他の円形の住居との二時期，計四時期が考えられる。

さて，今まで述べてきた竪穴住居より小型のものに竪穴遺構がある。ＪＴ０１のようにＡグループの大型住居の傍に位置し，径は２ｍ前後，周囲に４・５本の柱穴を持ち，床の中央に焼土の認められる遺構である。居住するにはせますぎるので竪穴遺構として区分したが，住居の可能性のあることをつけ加えたい。

２フラスコ状ピットについて

本遺跡で検出されたフラスコ状ピットは１５基である。

このうち２基は住居跡に付設されたものであり，残り１３基は単独で構築されたものである。

まず，４号フラスコ状ピットは，２８号住居跡の北西隅に付設されたものである。５号フラスコ状ピットは，２３号住居跡の北隅に付設されている。県内で住居跡内にフラスコ状ピットが付設されている例に秋田市下堤（富樫ほか，１９７６),秋田市鹿野戸（伊藤ほか，１９７６),男鹿市大畑台（磯村ほか，１９７９),八竜町萱刈沢(鍋倉ほか,１９７４)遺跡がある。

１・２・４～１５号フラスコ状ピットは単独で構築され，遺跡の西（舌状台地の先端部）に群集して検出された。これらフラスコ状ピットの群集地は住居跡群（Ａグループ）の外側に位置するものが多い。

３号フラスコ状ピットも単独で構築されたものであるが，Ｂグループの住居跡群の外側にあり，北側を調査できず断言はできないが，群をなしていた可能性がある。琴丘町宝竜前遺跡（伊藤ほか，１９７８），では４０余基のフラスコ状ピット群が検出された。大畑台遺跡（磯村ほか１９７７年調査）では１０余基のフラスコ状ピットが検出されている。

単独に構築されたフラスコ状ピットには上屋構築のためと考えられる柱穴がめぐるものがある。１，２，３，１２，１３号フラスコ状ピットがそれである。またフラスコ状ピットの口縁部に蓋をするためと考えられる施設をもつものがある。これは口縁部が広がっているフラスコ状ピットを指す。６，７，９，１１号フラスコ状ピットがそれである。柱穴のめぐる検出例は県内では，八竜町萱刈沢（前掲書），秋田市鹿野戸（前掲書），山本町古館提頭遺跡（伊藤ほか，１９７７），などがある。

蓋をするためと考えられる施設のある発掘例は，八竜町萱刈沢遺跡（前掲書）で検出されている。

底面にピットを有するフラスコ状ピットが４例ある。８・１１号フラスコ状ピットは，底面のほぼ中央に浅い柱穴状のピットを有する。９号フラスコ状ピットは底面西側に，さらにフラスコ状ピットが接続し，二重フラスコ状ピットになっている。１５号フラスコ状ピット底面の東側には楕円形の浅いピットがある。

フラスコ状ピットの用途については，おとし穴，貯蔵穴，冬期のねぐら，祭祀施設，土坑墓などの諸説がある。

本遺跡のフラスコ状ピットは，前述の通り，住居跡に付設されたり，上屋構築のためと考えられる柱穴がめぐったり，蓋をするためのものと考えられる施設があったりする。

さらに遺物の出土状態をみると，人骨が出土したり，石組，その他の祭祀を考えさせたりする遺物が出土していない。貯蔵穴と考えることがもっとも妥当のようである。夏にフラスコ状ピットの気温と湿度を観測してみた。２号フラスコ状ピットでは，外気の温湿度が３８℃，４５％のとき，内部は１８℃，９４％であった。９号フラスコ状ピットでは，外気の温湿度が２６.３℃，６０％のとき上段の内部では１９℃，９０％であり，下段では１５℃，９０％であった。古館堤頭遺跡では，フラスコ状ピットの上屋を復元した。冬期間の温湿度に微妙に反応し，氷点下を示すこともある。しかし，口縁部に蓋をすると，外気に影響されることなく，内部は温度２℃前後，湿度約８０％を保つことが伴明した。このデータは，植物質性の食料を越冬させるのに適当な温湿度である（藤本，１９７４），本遺跡の１号フラスコ状ピットでは，炭化クルミが出土している。

増田町梨ノ木塚遺跡では，フラスコ状ピットの床面から多量のクリが出土している（畠山，１９７８）。

V　む　す　び

館下Ⅰ遺跡の発掘調査は，遺跡を広範囲にわたって調査した県内でも１・２を争う大規模な発掘調査であった。その結果，後期旧石器時代と縄文時代中後期の遺跡であることが判明した。

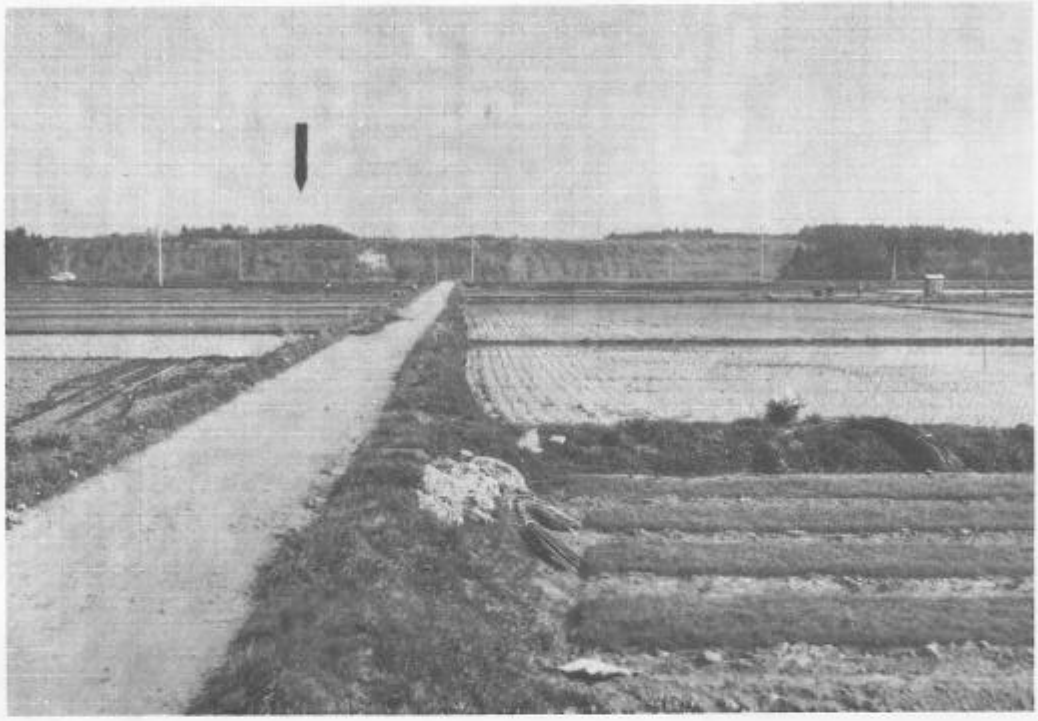
特に，縄文時代中期中葉の集落は段丘上の西寄りに，末葉の集落は北東縁寄りに居住地を変えて形成され，その住居の平面形も楕円形と円形，炉も地床炉と石囲炉という明瞭な違いのある集落のあり方を明らかにした点で大きな意義があったと考える。

参考及び引用文献　（順不同）

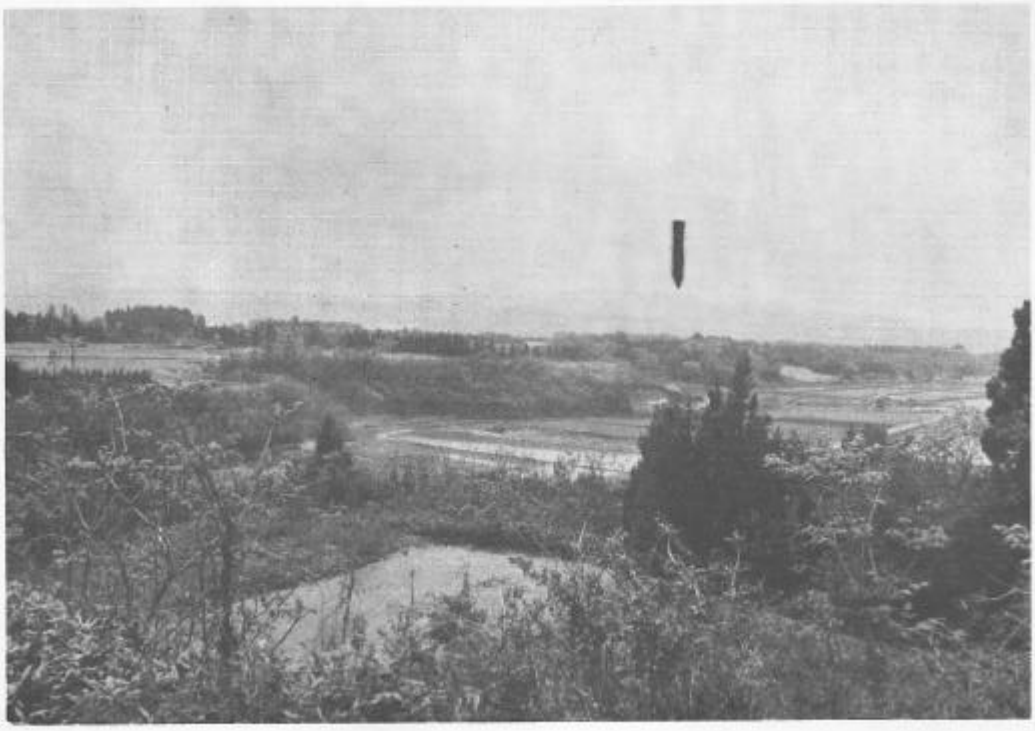
1，秋田県教育委員会　1977　「新秋田空港周辺遺跡分布調査報告書」
2，宮城県教育委員会　1969　「宮城県遠田郡涌谷町長根貝塚調査概報」
3，十腰内遺跡調査団　1969　「青森県弘前市十腰内縄文式遺跡調査予報　十腰内」
4，杉原荘介　1956　「日本考古学講座・縄文時代」　河出書房
5，みちのく考古学研究会編
　　遮光器　２号　1969
　　同　　８号　1974
6，秋田県教育委員会　1978　「大内坂Ⅱ遺跡発掘調査報告書」
7，宮城県教育委員会　1976　「宮城県文化財発掘調査略報」
8，荘内古文化研究会　1955　「山形県飽海郡吹浦遺跡調査報告」
9，北奥古代文化研究会　1977「北日本の石槍石鏃について」
10，新地町教育委員会　1978　「三貫地」
11，秋田県教育委員会　1978　「中台遺跡発掘調査報告書」
12，大和久震平　1960　「円筒上層式の細分」秋田考古学第16号
13，秋田県文化財保護協会　1957　「調査研究報告書」
14，宮城県教育委員会　1967　「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」
15，岩手県教育委員会　1977　「埋蔵文化財発掘調査略報」
16，楠本政助　1973　「仙台湾における先史狩漁文化」
17，江坂輝弥　1957　「青森県蟹沢遺跡調査報告」　石器時代第５号
18，宮城県教育委員会　1975　「宮城県文化財発掘調査略報　昭和48・49年度分」
19，杉原荘介編　「日本の考古学　第１巻　先土器時代」　河出書房
20，鎌木義昌編　「日本の考古学　第２巻　縄文時代」　河出書房
21，十和田町教育委員会　1971　「黒森山麓縄文期竪穴群」
22，詫間町文化財保護委員会　1964　「紫雲出」
23，（財）岩手県埋蔵文化財センター　1977　「都南村　湯沢遺跡」
24，村越潔　1968　「岩木山麓古代遺跡発掘報告書」
25，上小阿仁村教育委員会　1978　「上小阿仁村　不動羅遺跡概要」
26，知内歴史研究会　1975　「森越」
27，岩手県陸前高田市教育委員会　1954　「門前貝塚」
28，宮城県教育委員会　1973　「菅生田遺跡調査概報」

29, 宮城県教育委員会　1978　「北沢遺跡発掘調査概報」
30, 村越潔　1974　「円筒土器文化」　雄山閣
31, 青森県平賀町教育委員合会 1974 「青森県平賀町唐竹地区　埋蔵文化財発掘調査報告書」
32, 協和町教育委員会　1977　「米ケ森遺跡発掘調査報告書」
33, 藤森栄一　1963　「縄文中期における石匙の機能的変化について」考古学雑誌第49巻第3号
34, 青森県教育委員会　1977　「三内沢部遺跡発掘調査報告書」
35, 江坂輝弥編　1970　「石神遺跡」　ニュー・サイエンス社。
36, 麻生優　加藤晋平他　1975　「日本の旧石器文化　1，総論編」　雄山閣
37, 麻生優　加藤晋平他，1976　「日本の旧石器文化，5　旧石器文化の研究法」　雄山閣
38, 児玉幸多他　1979　「図説　日本文化の歴史　1，先史，原史」　小学館
39, 琴丘町教育委員会　1978　「宝竜前遺跡緊急発掘調査報告書」
40, 山本町教育委員会　1977　「古館提頭遺跡発掘調査報告書」
41, 秋田市教育委員会　1976　「小阿地，下堤遺跡，坂ノ上遺跡発掘調査報告書」
42, 山形県教育委員会1978　「的場遺跡，村中遺跡，古都B遺跡，助川遺跡，上台遺跡調査報告書」
43, 大場利男　1961「北海道式石冠の用途と意義」　考古学雑誌第46巻第4号
44, 青森県教育委員会　1975　「泉山遺跡発掘調査報告書」
45, 青森県教育委員会　1977　「熊沢遺跡」
46, 青森県教育委員会　1974　「中の平遺跡発掘調査報告書」
47, 福島県いわき市教育委員会磐城出張所　1968　「小名浜」
48, 加曾利貝塚友の会　千葉市加曾利貝塚博物館　1975　「縄文土器のつくり方，第3集」
49, L，H，キーリー　「フリント製石器はどう使われたか」　1978　サイエンス　日本経済新聞社。
50, 八竜町教育委員会，鍋倉勝夫　1974　「萱刈沢貝塚，第3　第4次概報」
51, 秋田県教育委員会　1976　「新秋田空港周辺遺跡鹿野戸遺跡，石坂上遺跡発掘調査報告書」
52, 藤本順治　1974　「越冬野菜の貯蔵法」　農業秋田12号
53, 渡辺誠　1975　「縄文時代の植物食」　雄山閣
54, 佐原真　1977　「石斧論」　松崎寿和先生退官記念事業会編　「考古学論集」
55, 工藤竹久　1977　「北日本の石槍，石鏃について」，北奥古代文化研究会編，北奥古代文化第9号
56, 小林達雄　1974　「縄文世界における土器の廃棄について」国史学　93号
57, 宮城県南方町　1975　「宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘報告」
58, S，A，セミヨーノフ(田中琢抄訳)　1968　「石器の用途と使用痕」考古学研究56，第14巻，第4号
59, 水野正好　1969　「縄文時代集落復元への基礎的操作」古代文化21巻3・4号
60, 水野正好　1974　「集落」考古学ジャーナル 100号
61, 鈴木克彦　1976　「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」北奥古代文化第8号

館下遺跡周辺の航空写真



遺跡遠景（南から）



遺跡遠景（北西から）

発掘調査前のようす

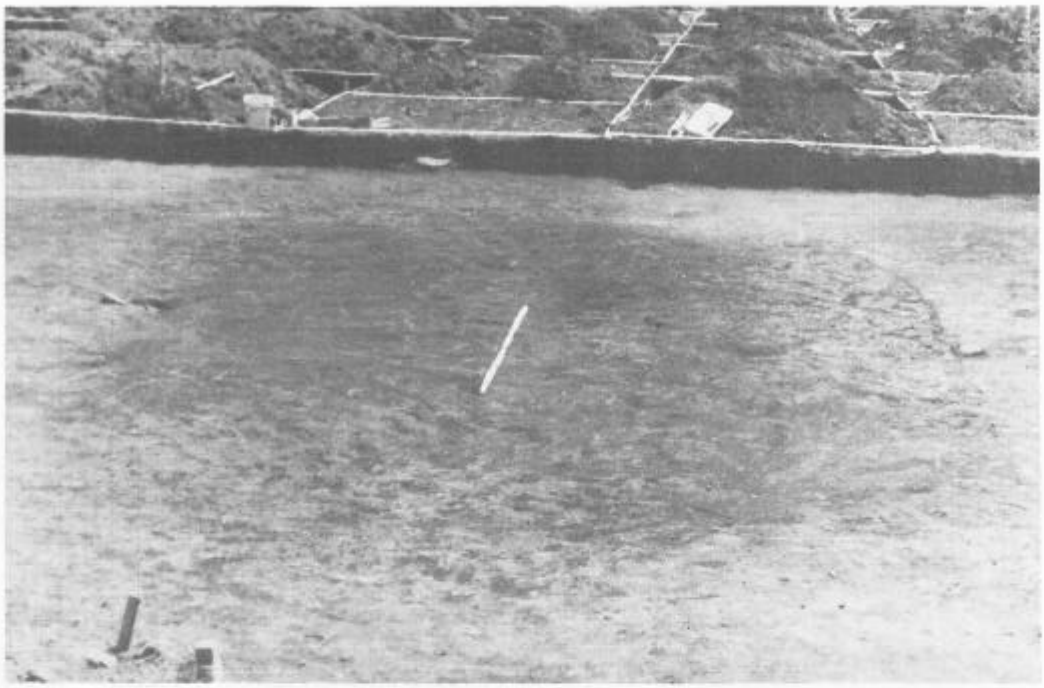
発掘風景

Aグループ　北西部の住居跡群

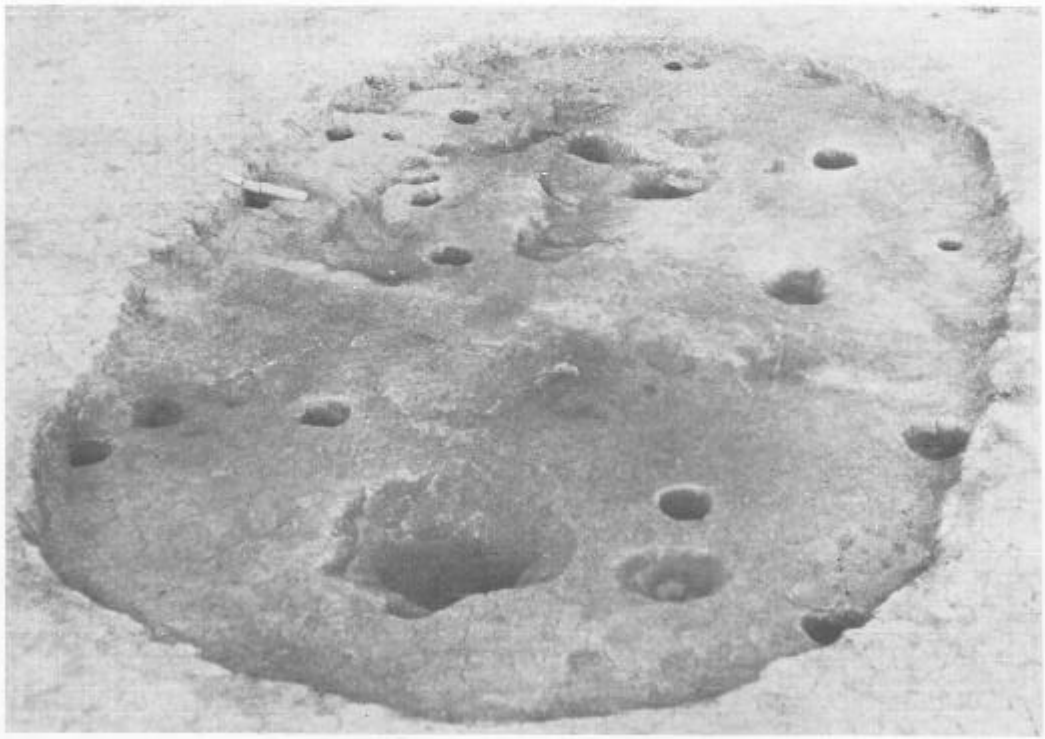
Aグループ南西部の住居跡群

Aグループ西隅の住居跡とフラスコ状ピット群

Bグループの住居跡群



1号住居跡の確認



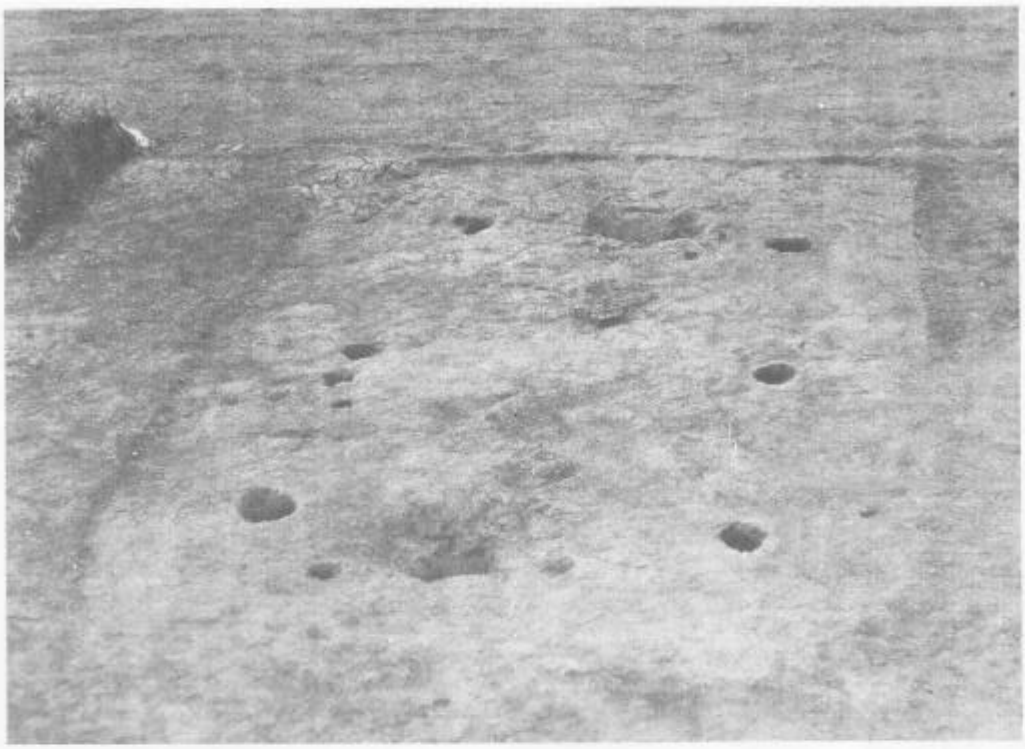
1号住居跡

4 号住居跡

5 号住居跡

6 号住居跡

7 号住居跡



12号住居跡

13号住居跡

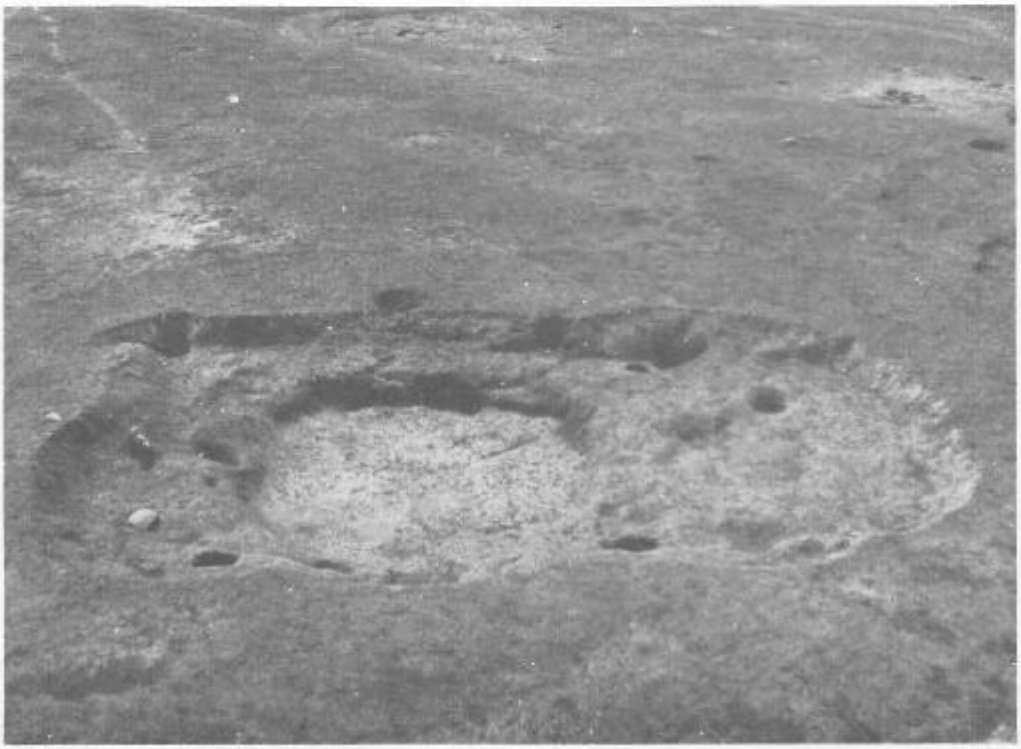
30号住居跡

31号住居跡

34号住居跡と13・14号フラスコ状ピット

15号住居跡と溝状土坑

18号住居跡



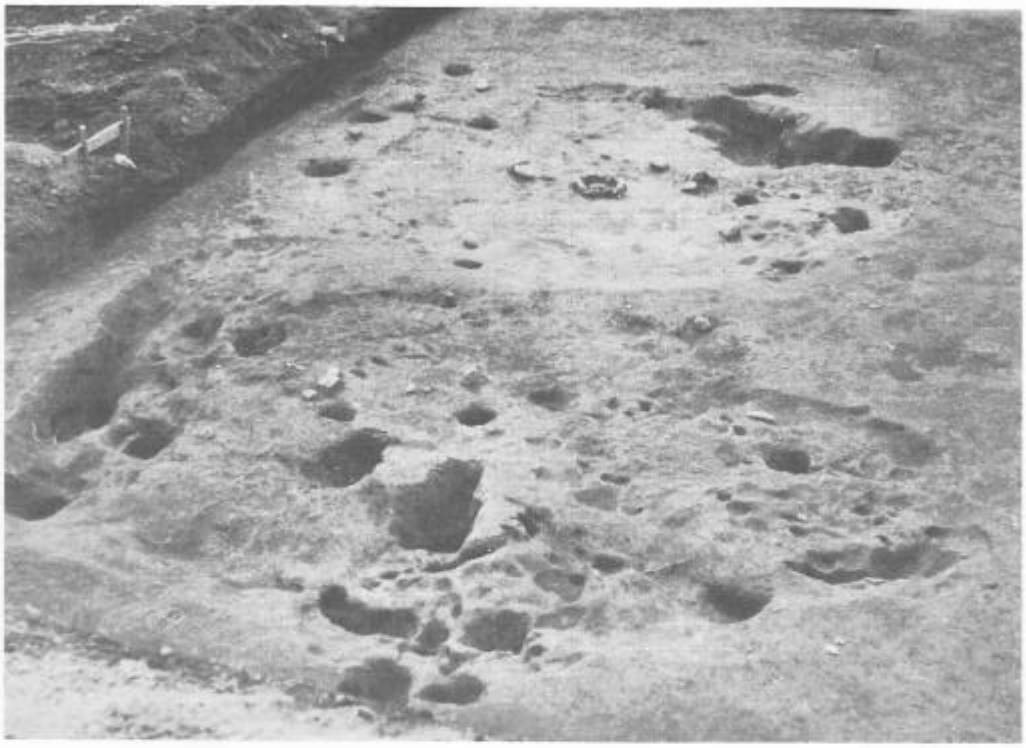
19号・25号住居跡

20号住居跡

21号・23号住居跡と5号フラスコ状ピット

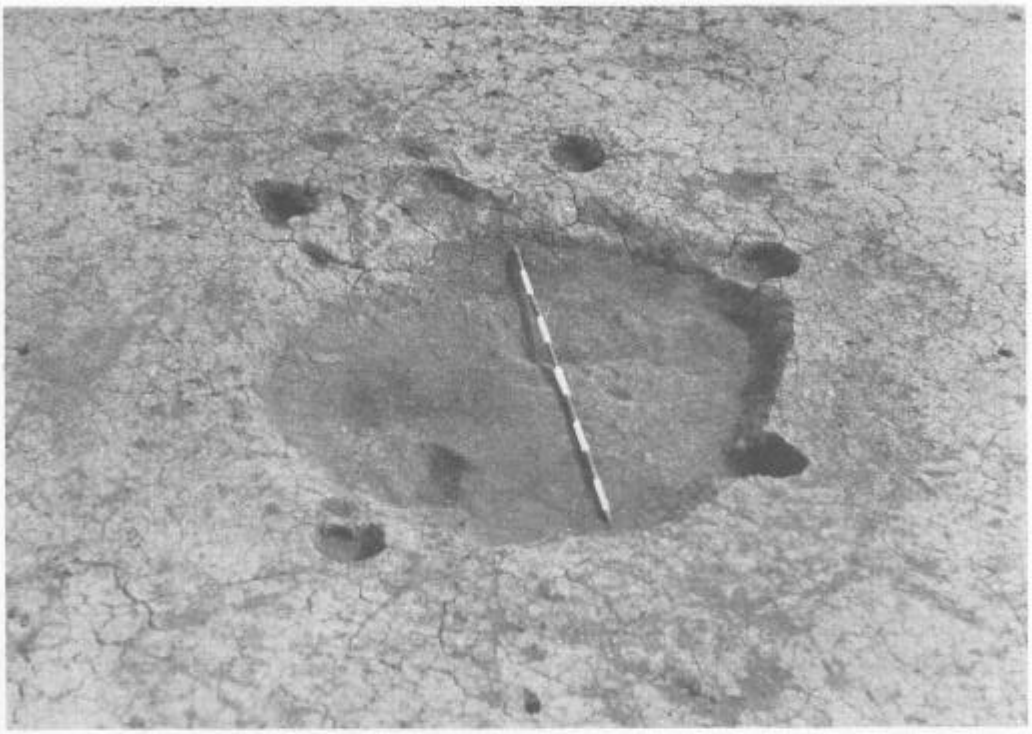
22号住居跡

24号住居跡

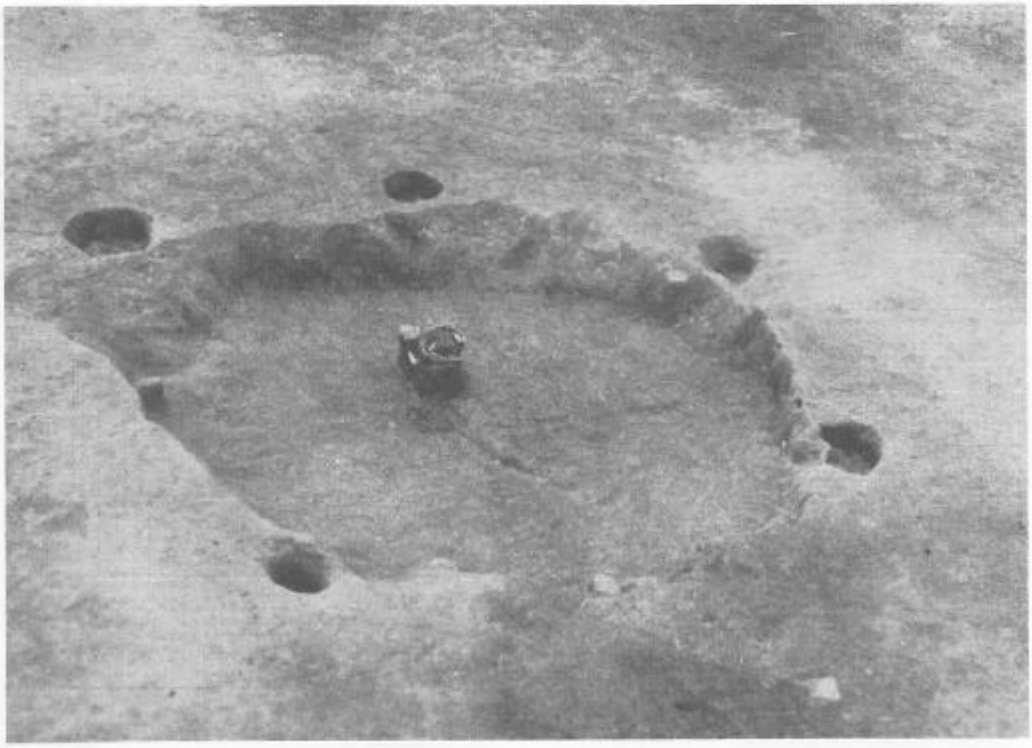


26号・27号住居跡

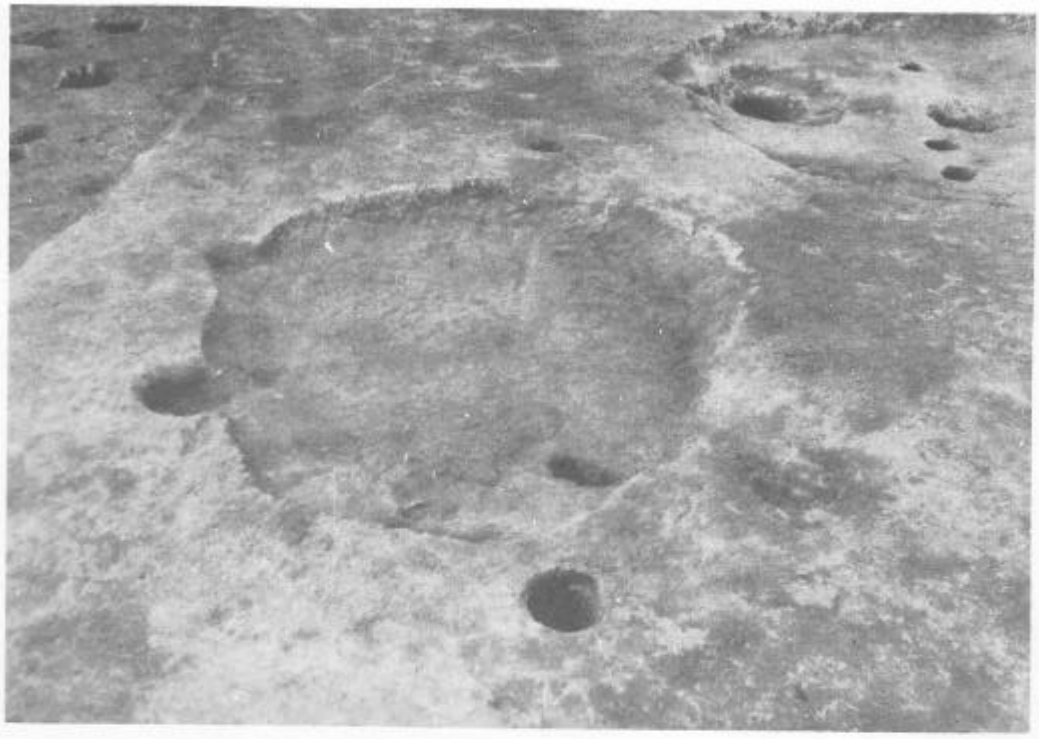
28号住居跡と4号フラスコ状ピット



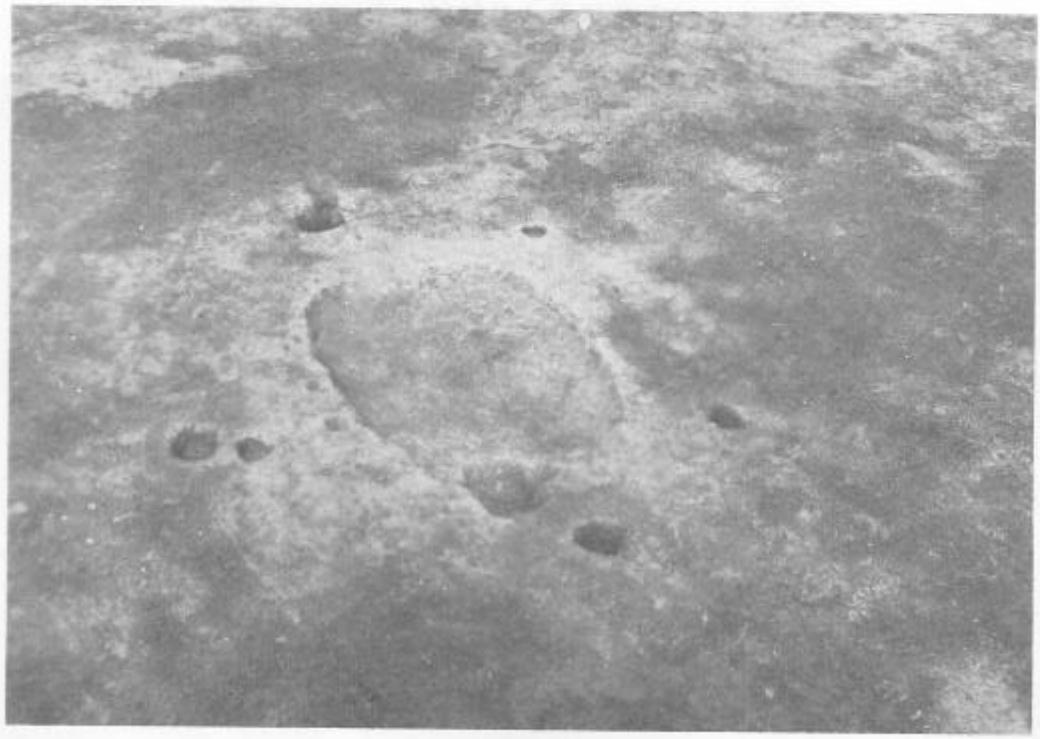
1号竪穴遺構



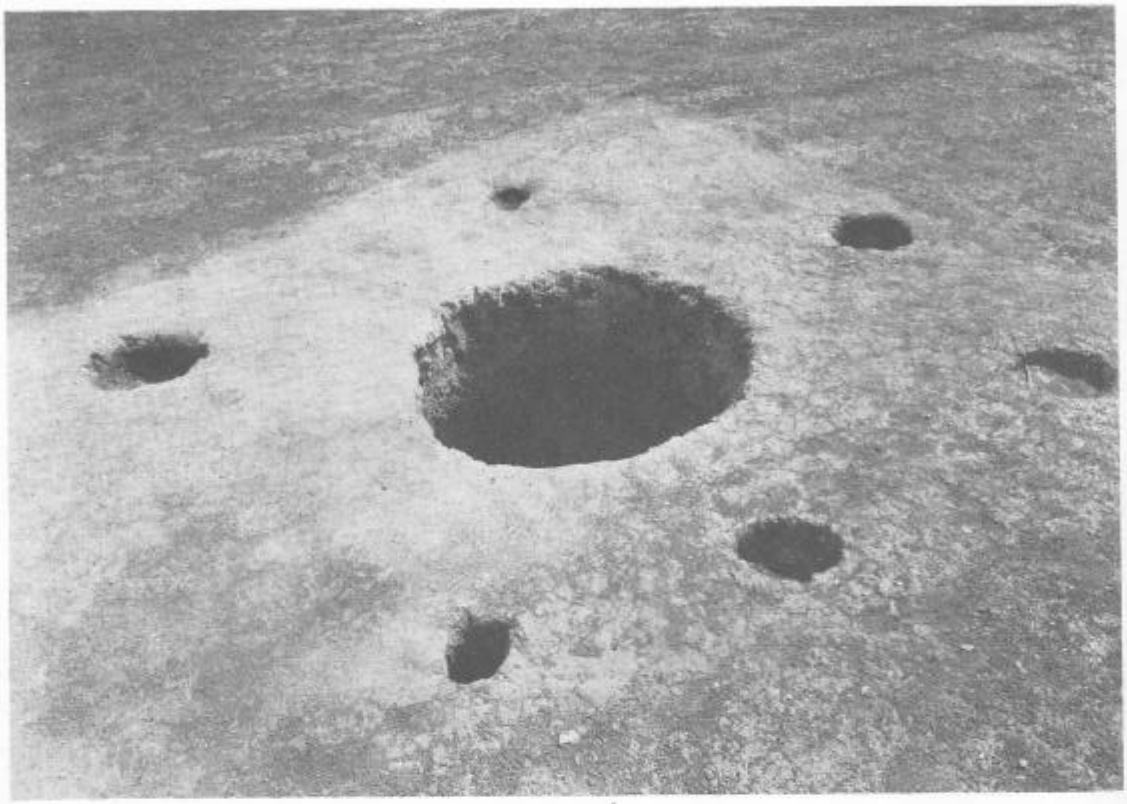
2号竪穴遺構



4 号竪穴遺構

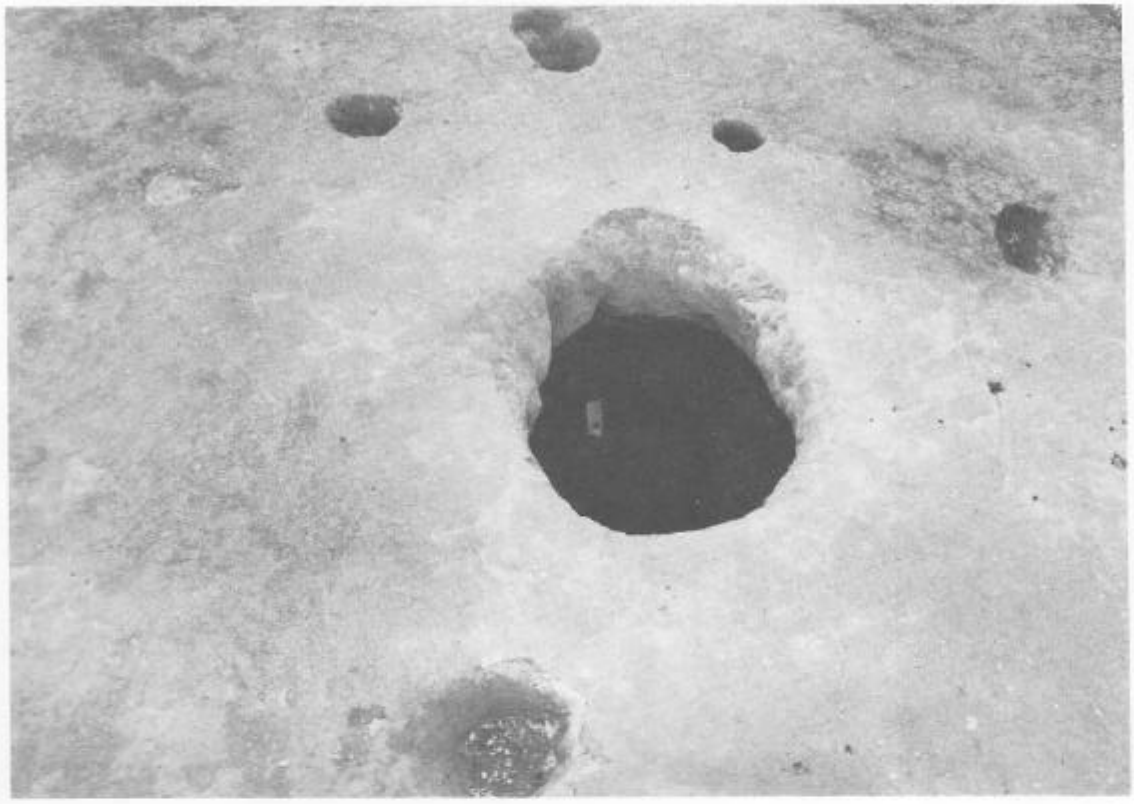


10号竪穴遺構

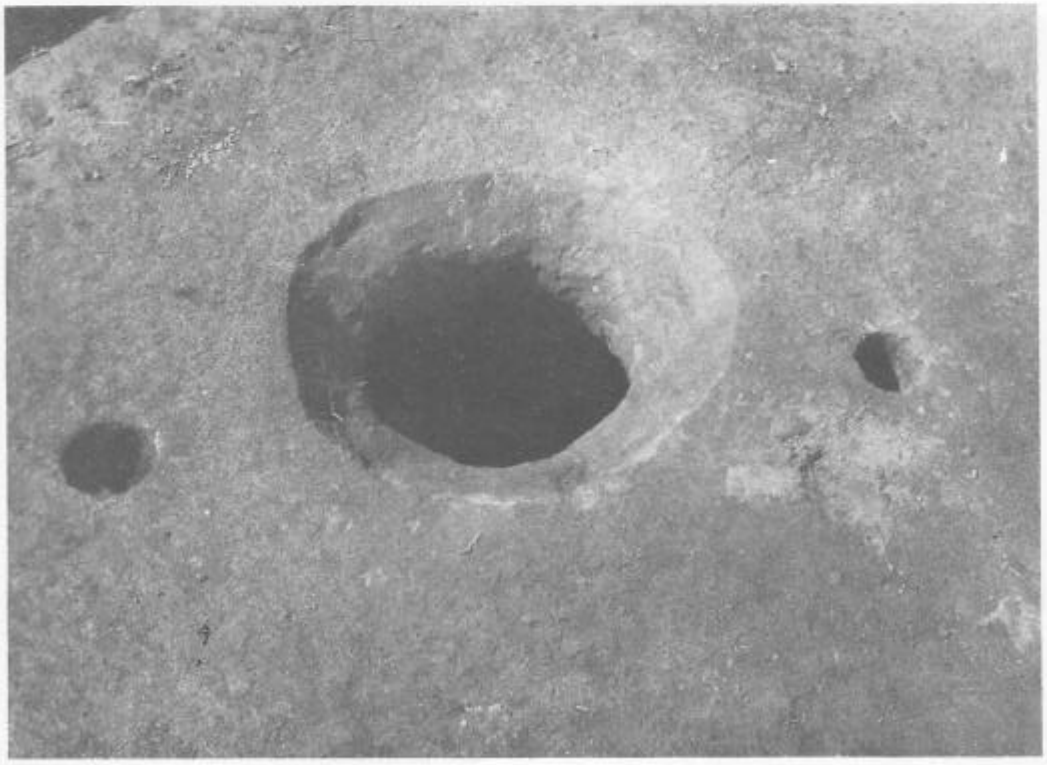


1号フラスコ状ピット

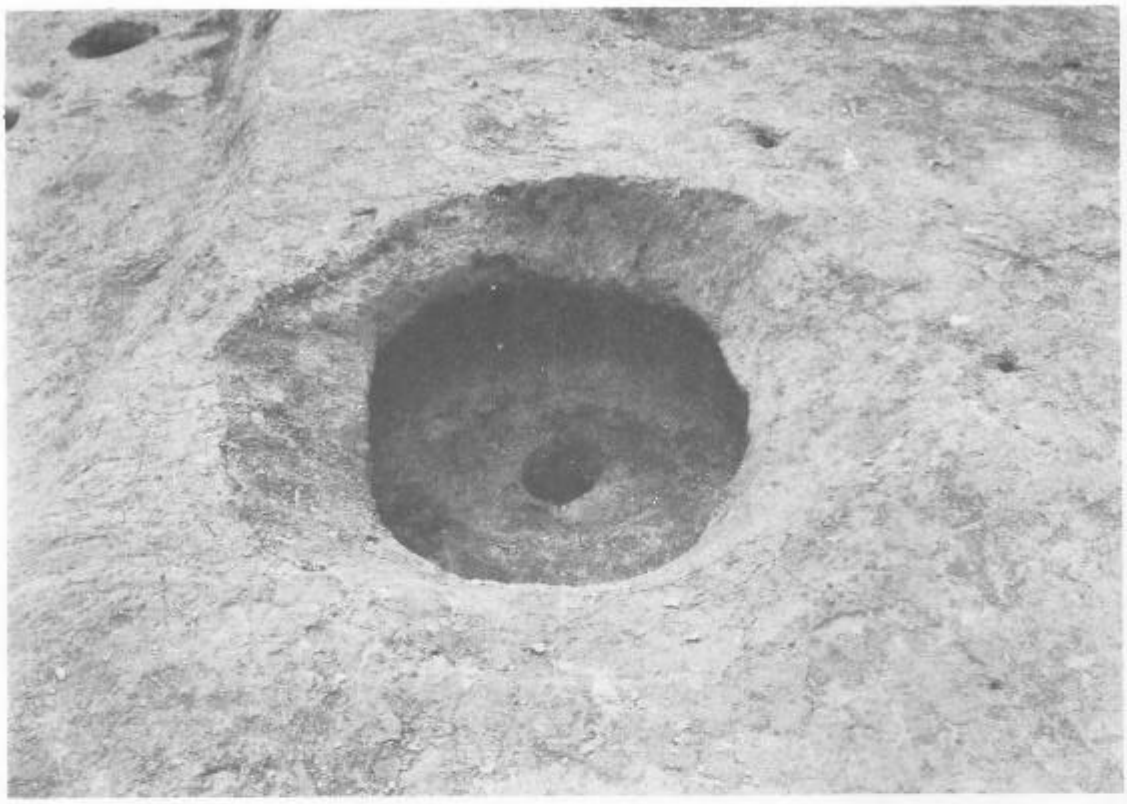
22号竪穴遺構



9号フラスコ状ピット(二重構造のもの)

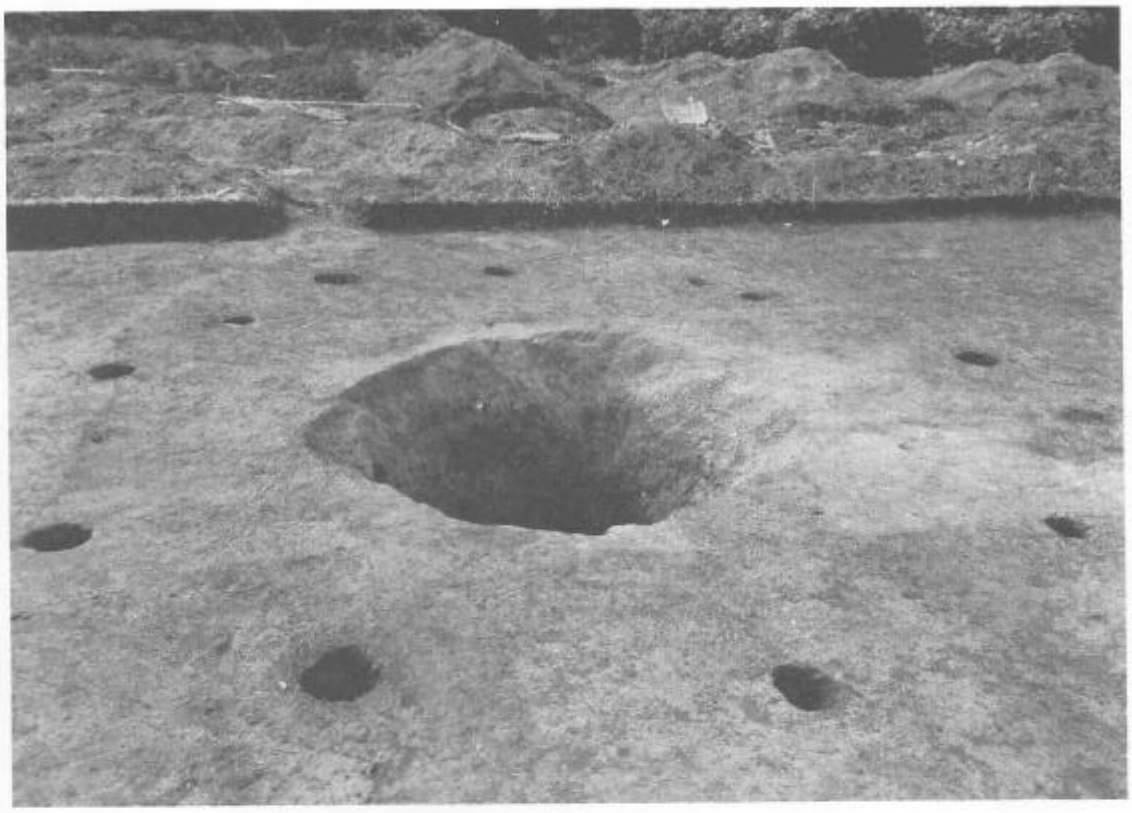


7号フラスコ状ピット



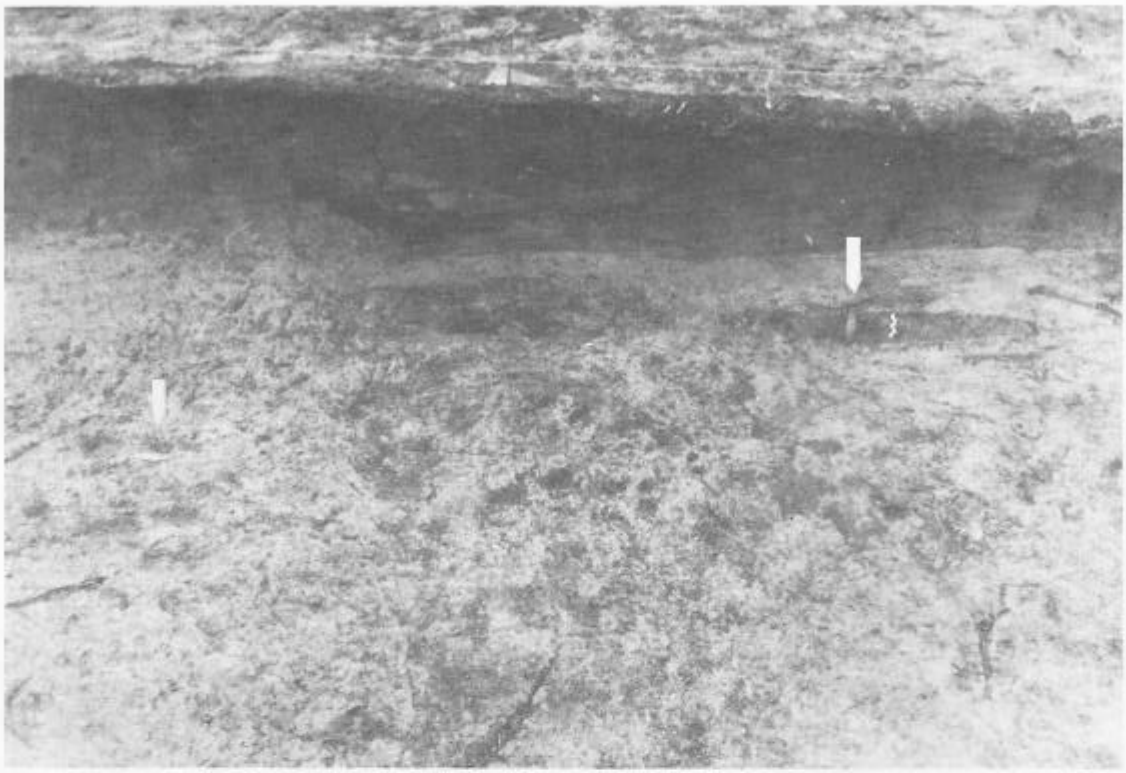
11号フラスコ状ピット

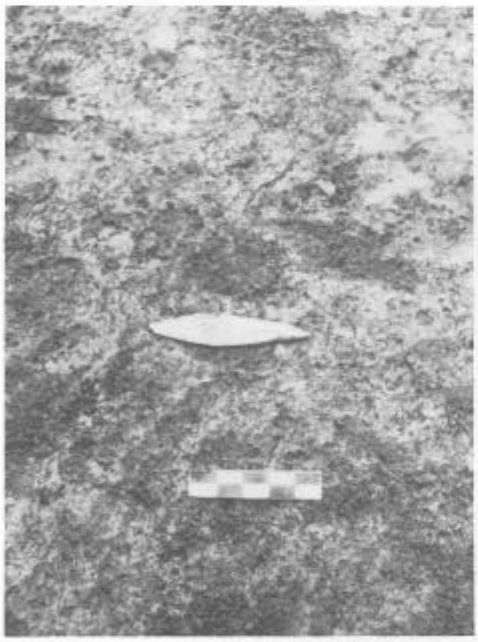
12号フラスコ状ピット

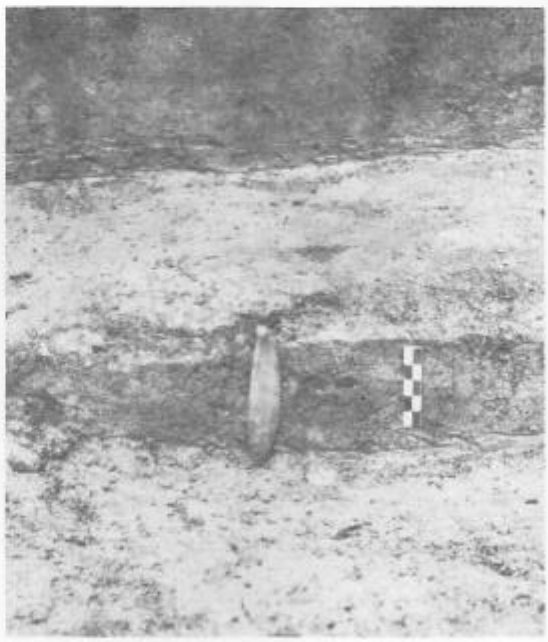


13号フラスコ状ピット

13号フラスコ状ピット土器出土の 状態

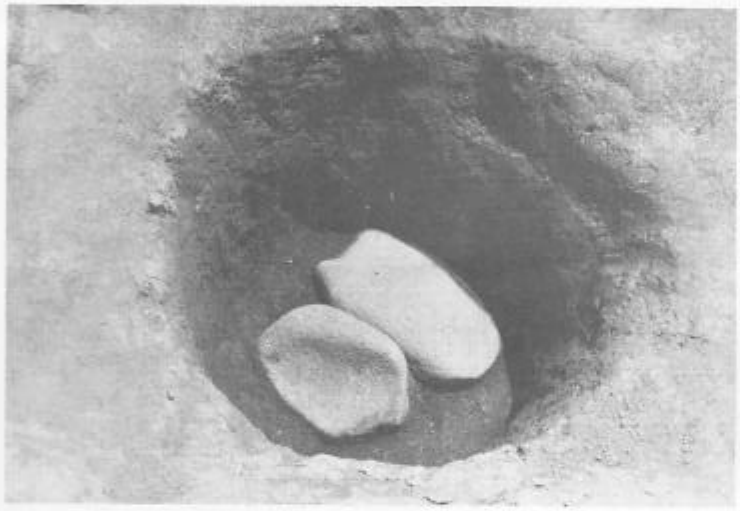




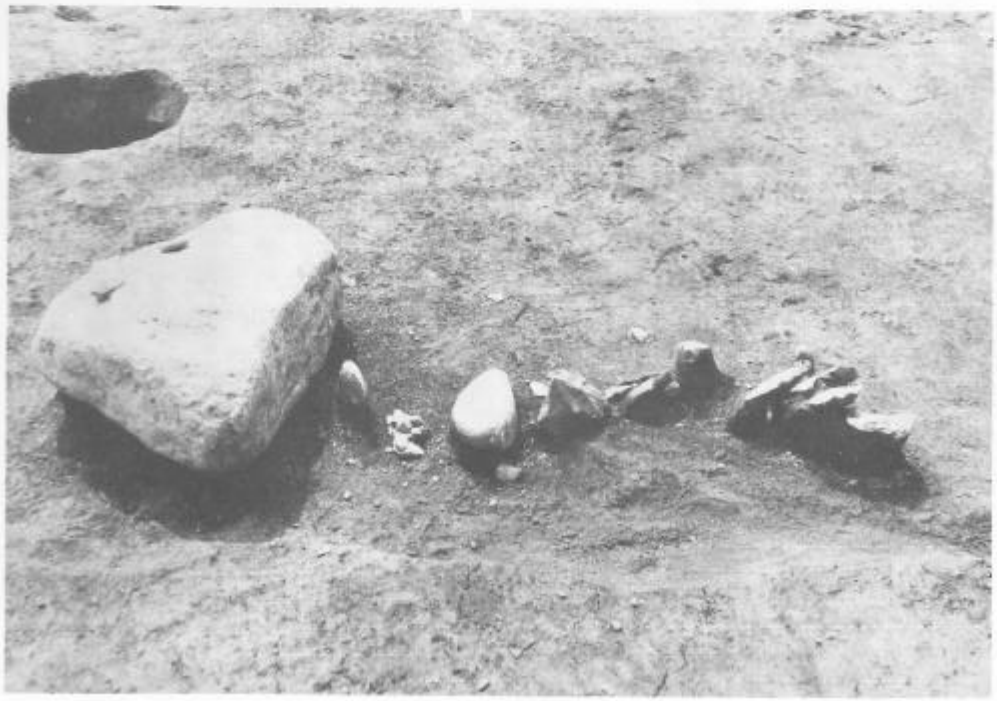


ナイフ形石器 出土状態

ピット内の石皿
（7号住居跡）



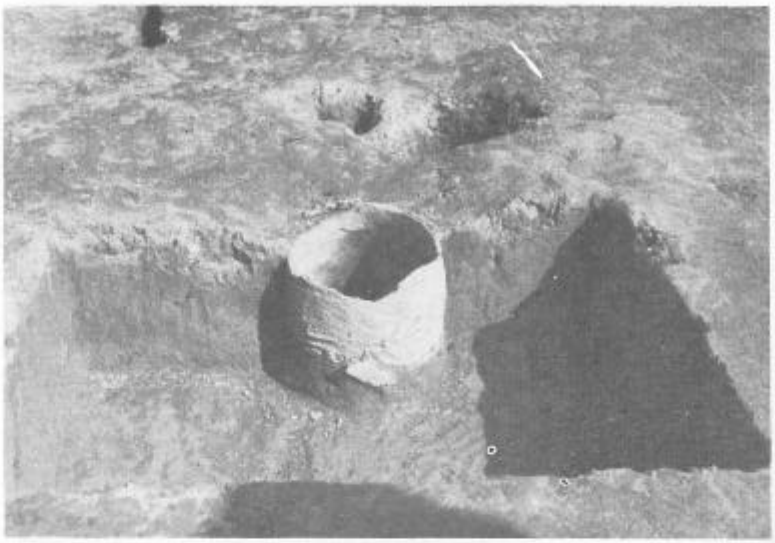
特殊ピット内の石皿
（5号住居跡）



台石と剝片　（6号住居跡）

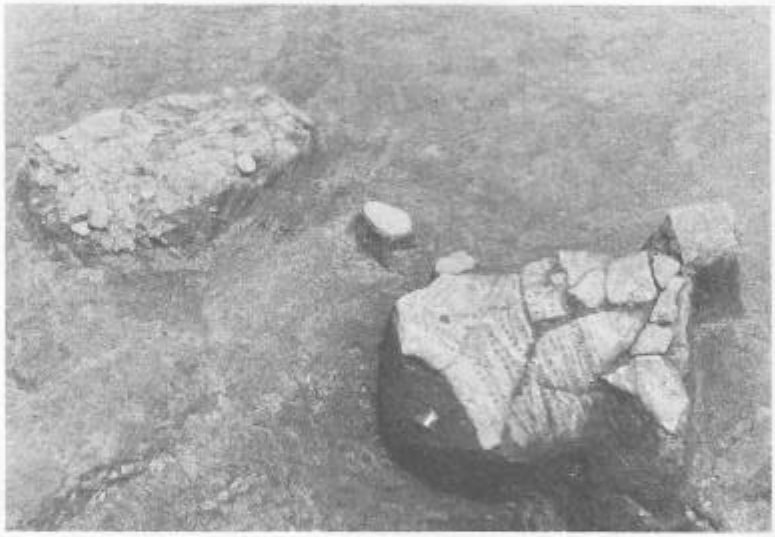
埋甕

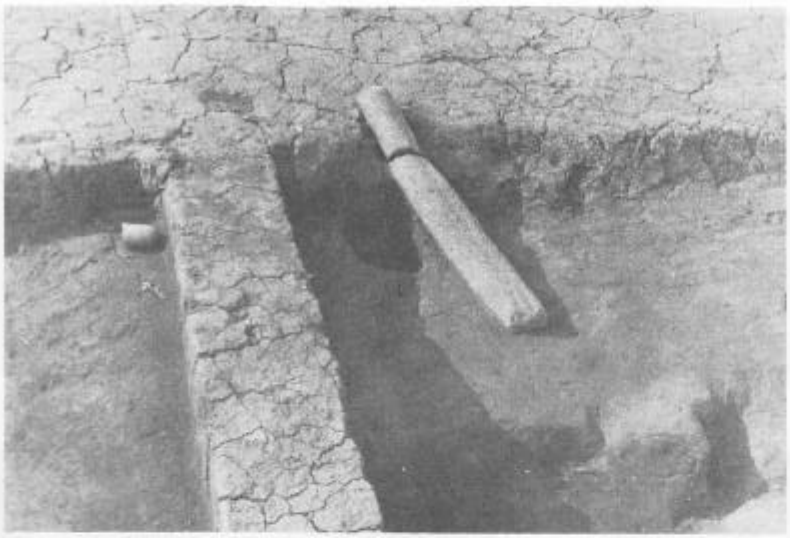
（3号住居跡）



土器出土状態

（12号住居跡）



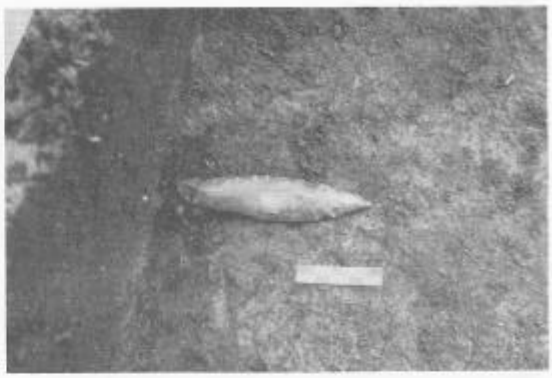


1号住居跡の石棒

耳飾

石棒

石匙



石槍

打製石斧

三日月状石器

箆状石器

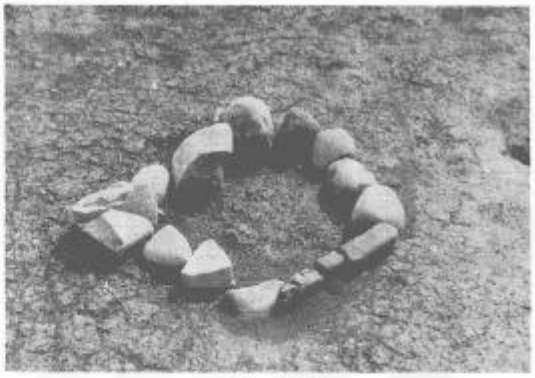
凹石

石冠

石錘

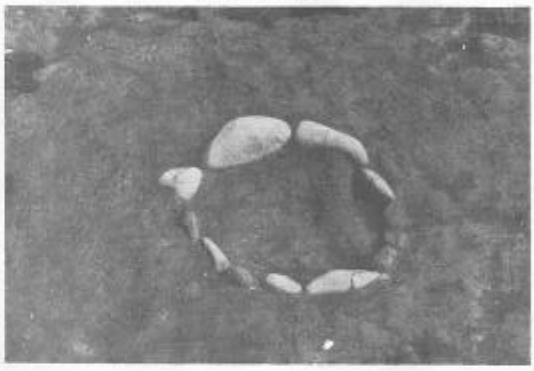
石器の出土状態

屋外石囲炉

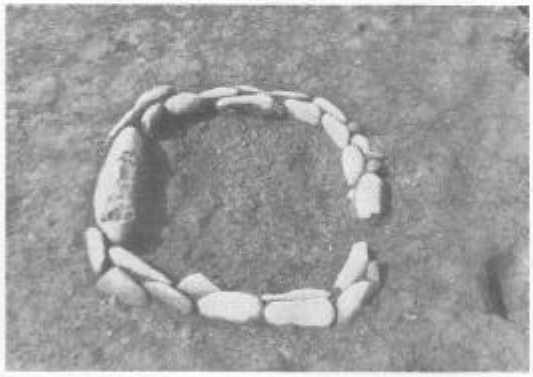


屋外石囲炉

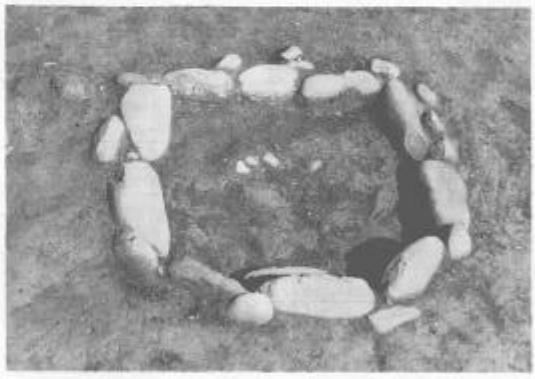
屋外石囲炉



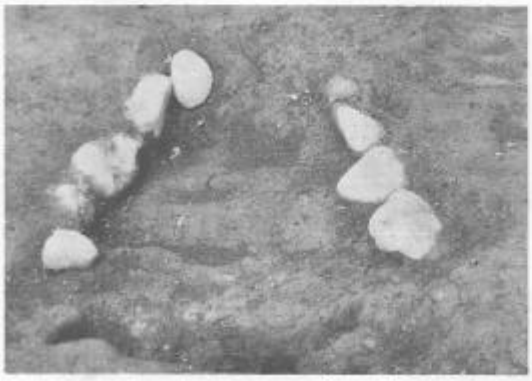
28号住居跡の石囲炉



18号住居跡の石囲炉



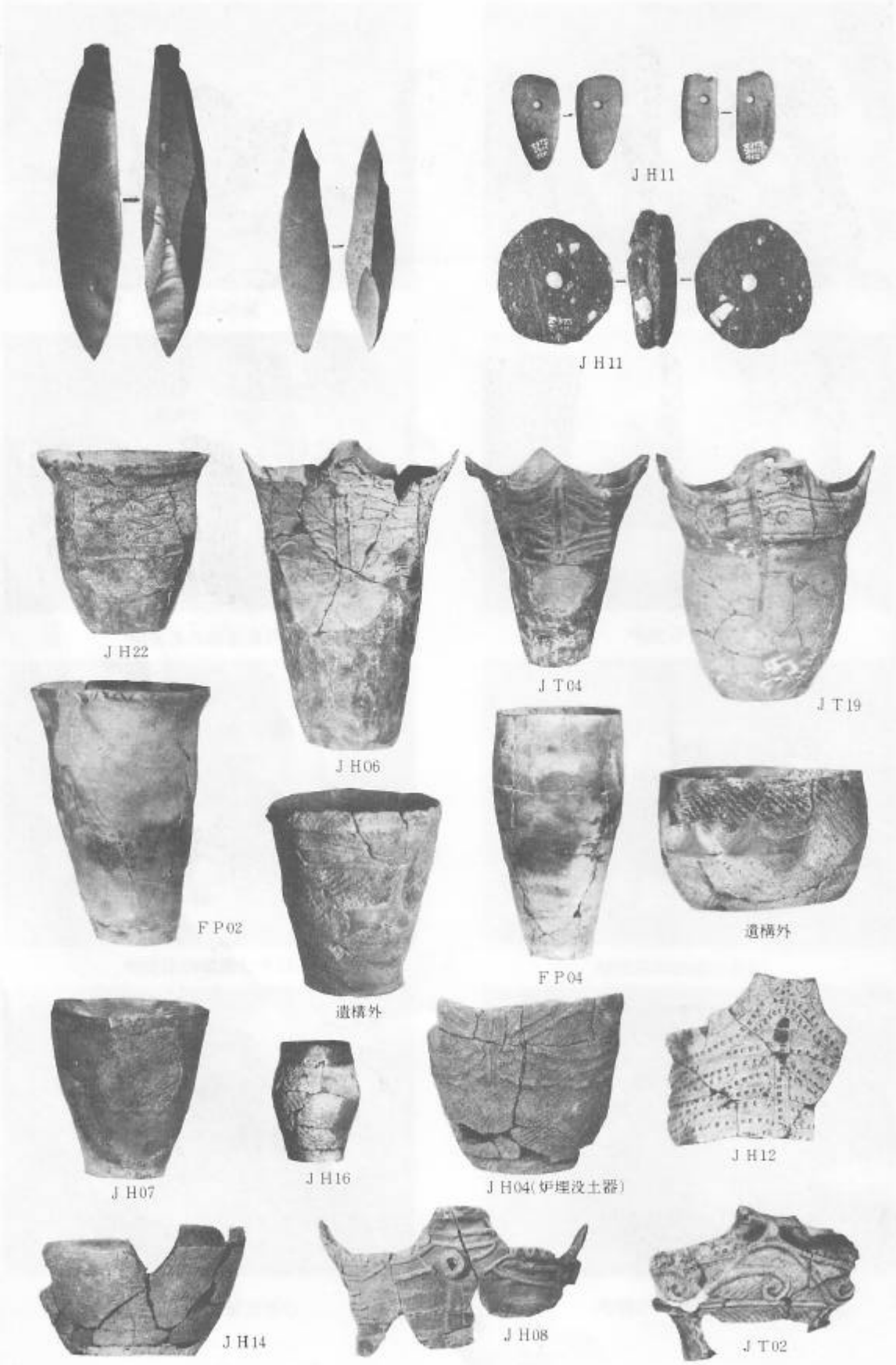
21号住居跡の石囲炉



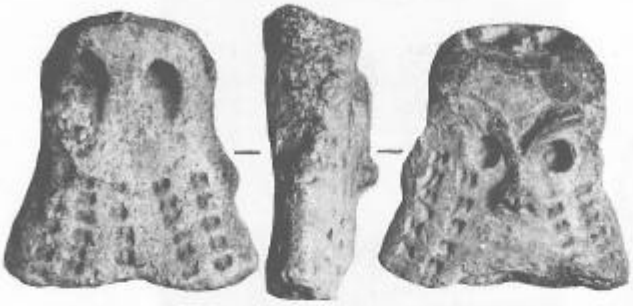
23号住居跡の石囲炉

17号住居跡の石囲炉

石囲炉

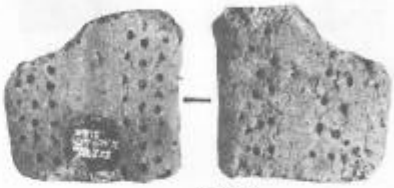


ナイフ形石器・垂飾品・耳飾・土器

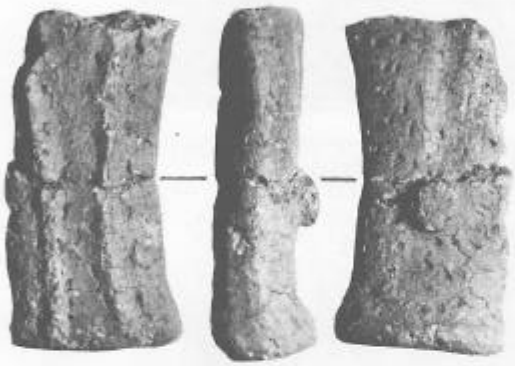


J H13

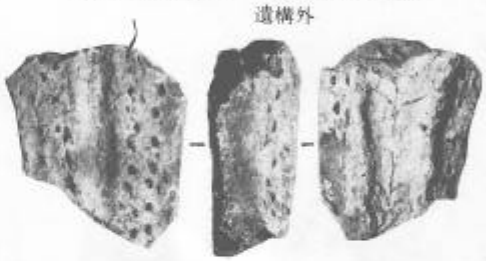
遺構外



遺構外



J H18

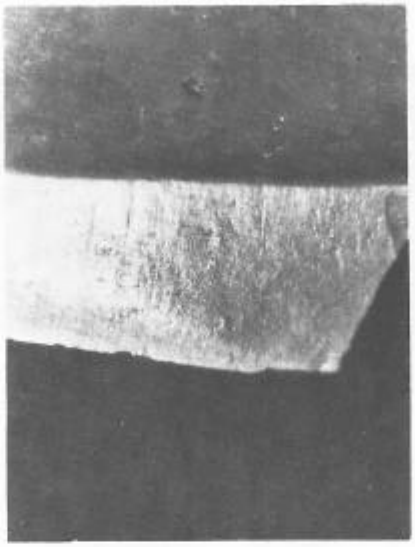


J H13

J H24

土偶・スタンプ状土製品・土器底部

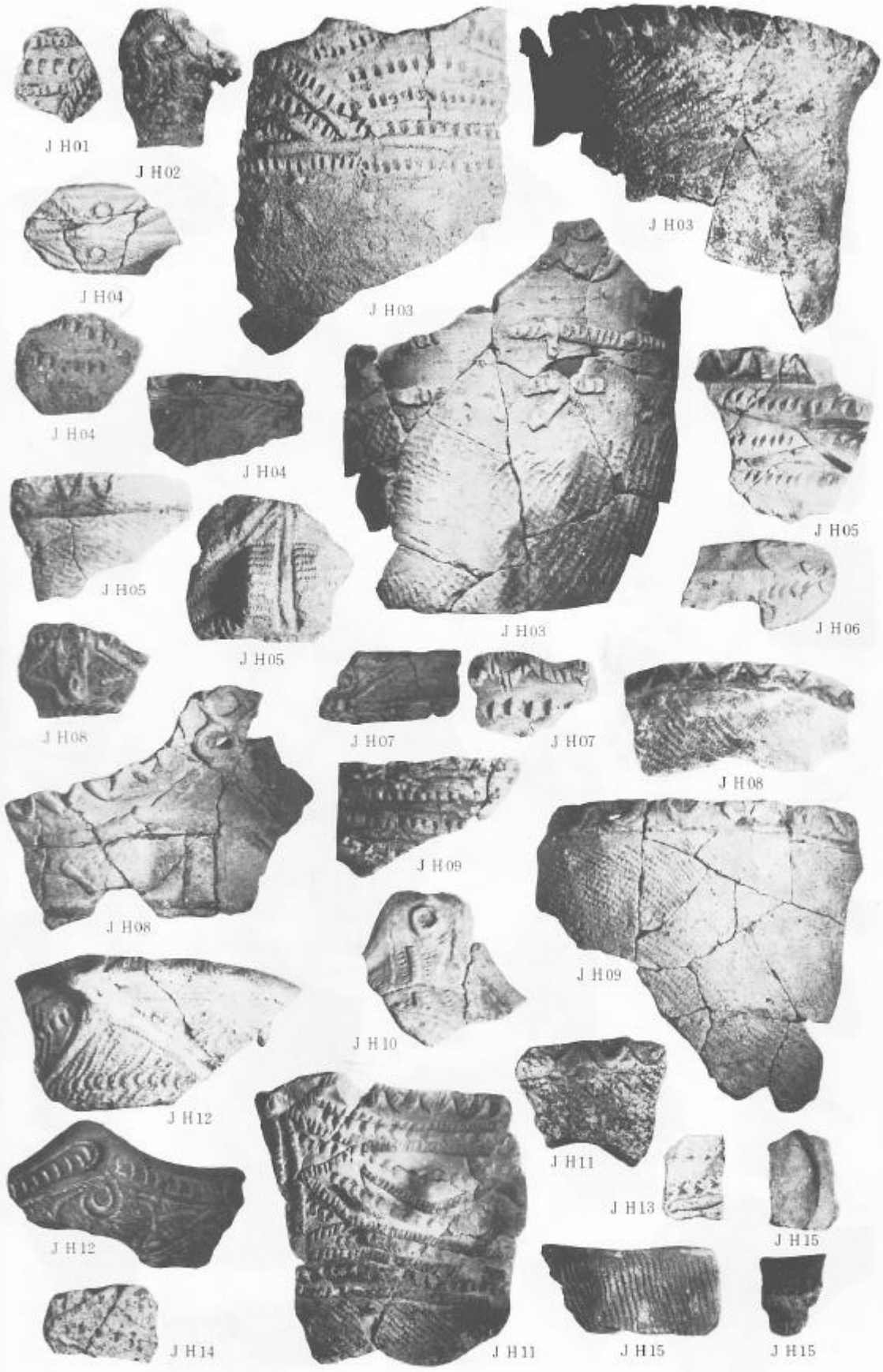
光沢と線状痕



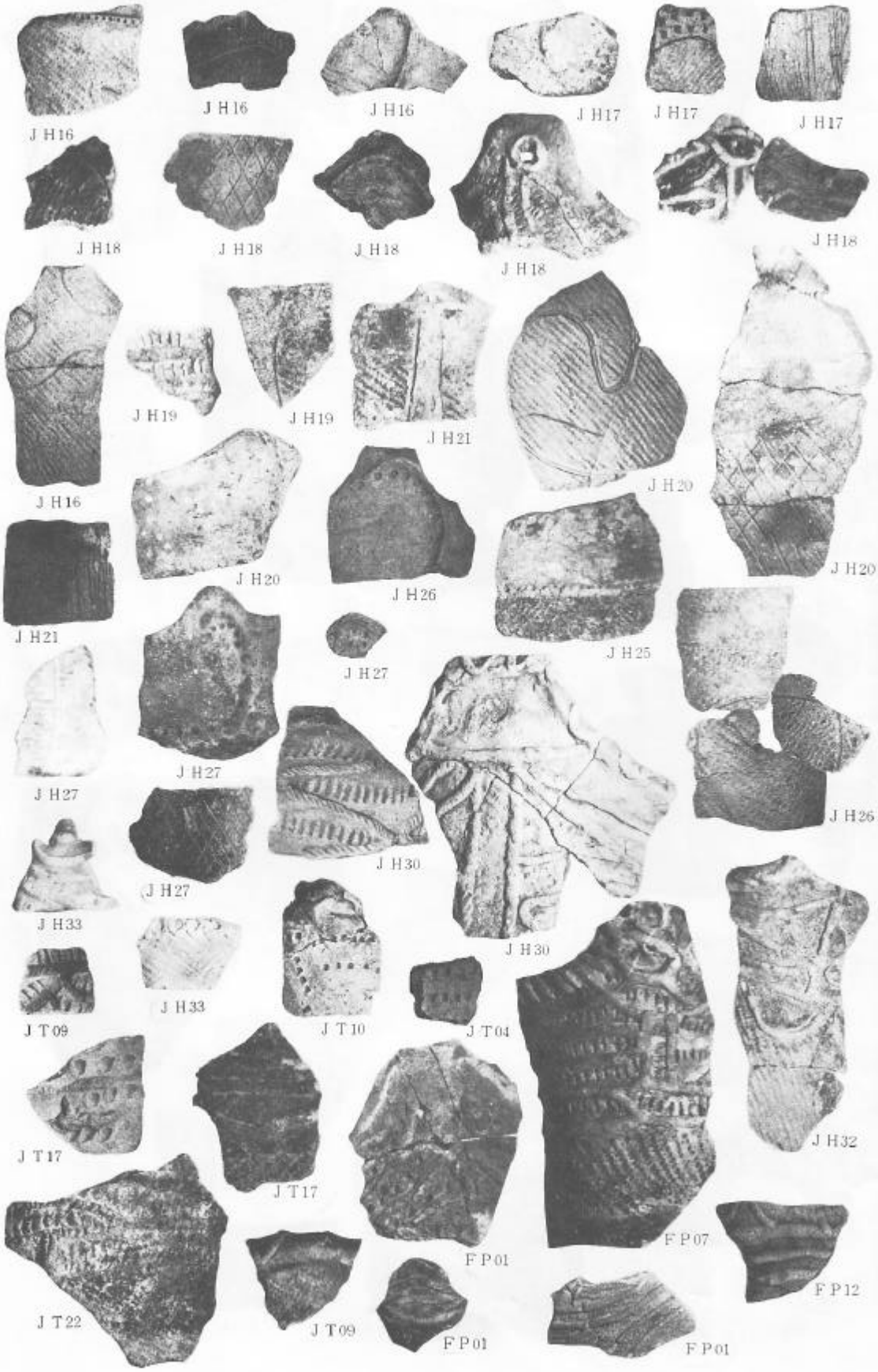
線状痕

摩耗痕

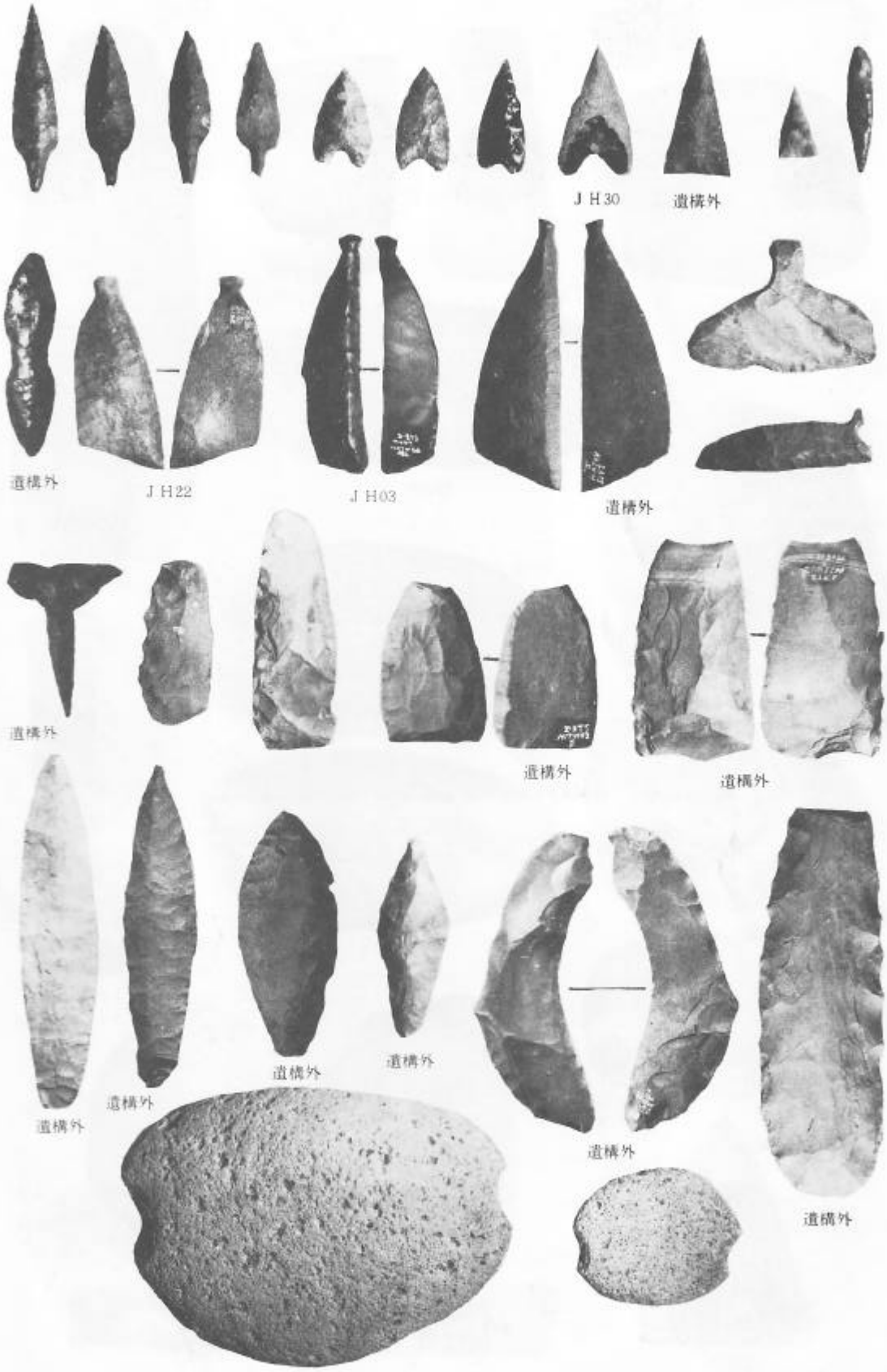
石器の使用痕


J H01
J H02
J H03
J H03
J H03
J H04
J H04
J H04
J H05
J H05
J H05
J H06
J H07
J H07
J H08
J H08
J H08
J H09
J H09
J H10
J H11
J H11
J H12
J H12
J H13
J H14
J H15
J H15
J H15

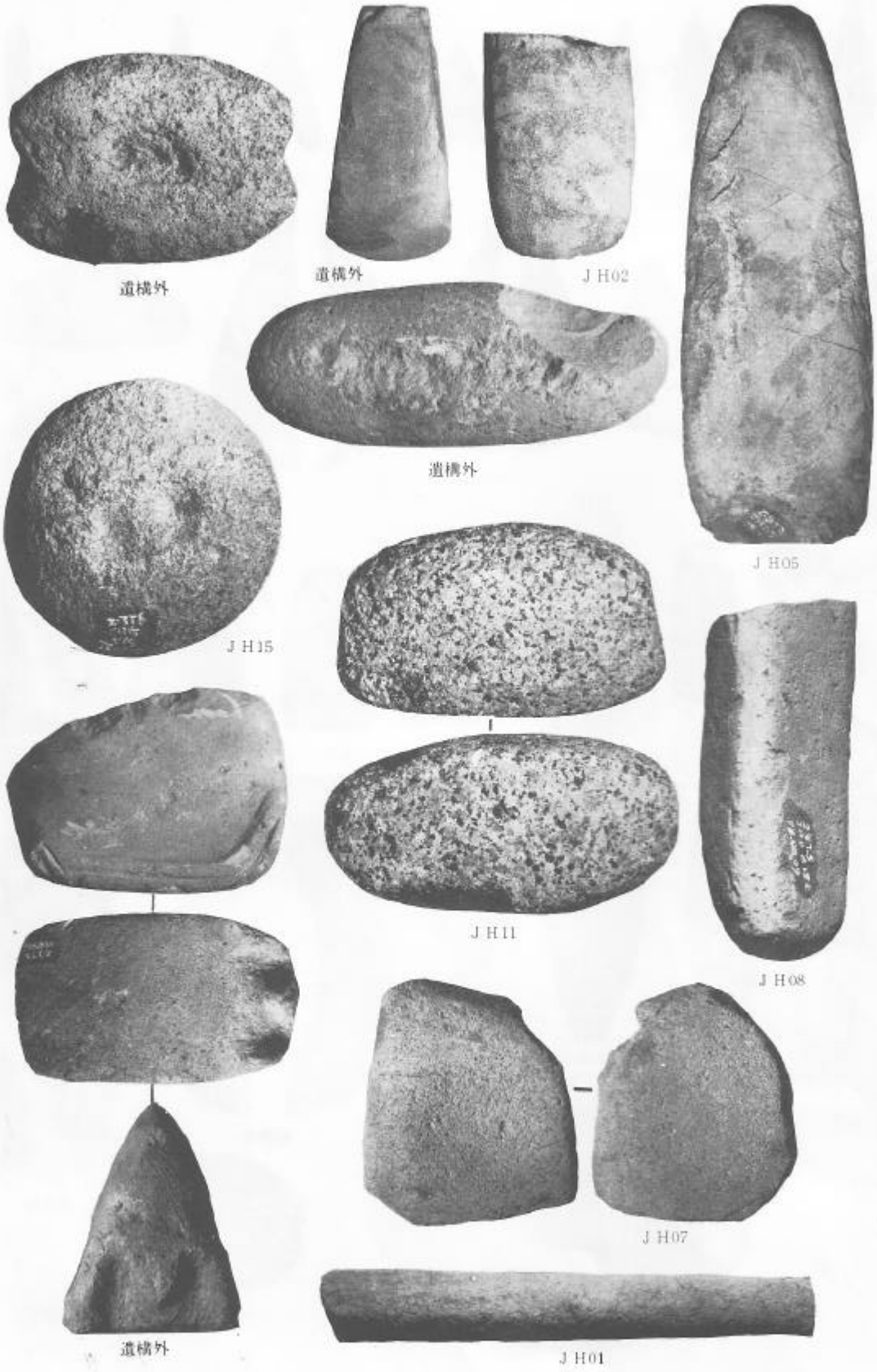
土　器


J H16
J H16
J H16
J H17
J H17
J H17
J H18
J H18
J H18
J H18
J H18
J H19
J H19
J H21
J H20
J H16
J H20
J H20
J H21
J H20
J H26
J H25
J H27
J H27
J H27
J H26
J H27
J H30
J H33
J H30
J H33
J T09
J T10
J T04
J H32
J T17
J T17
F P01
F P07
F P12
J T22
J T09
F P01
F P01

土　器


J H30
遺構外
遺構外
J H22
J H03
遺構外
遺構外
遺構外
遺構外
遺構外
遺構外
遺構外
遺構外
遺構外
遺構外
遺構外

石　器



石　器